Sleeping Legend ～もしSAOにユウキがいたら～

ジンクルタニ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもユウキがもう少しだけ早く生まれてメディキュボイドがナーヴギアよりも先に出来ていたら・・・

突如デスゲームと化したＳＡＯ。ユウキはある一つの約束を必ず叶える為に、ＳＡＯの世界に立ち向かう。

その中で出会うキリトやアスナ達との関わりの中でユウキは強く、プレイヤーの希望となる存在へと成長していく。

眠れる者たちによって伝説が紡がれる。

キリトが始まりの街からユウキを連れて出て行っていたらというＩＦになります。

ユウキはＨＩＶ持ちであることは変えずに年齢を原作よりも少し上げていて、いろいろな経験を経て段々と成長していく様を基本的にキリト視点で(時々ユウキ視点にもなる)書いていこうと思ってます。

余談ですが、感想をいただけると筆者がとても喜びます。

ｐｉｘｉｖにも投稿あります。

目次

プロローグ 1
始まりの日
出会い 6
共闘 12
殺意 17
危機 23
過去 29
第1階層攻略戦
攻略会議 35
ボス戦 42
ビーター 48
赤鼻のトナカイ
葛藤 54
不信 58
決闘 63
赤鼻のトナカイ 68
黒の剣士、黒の騎士
依頼 74
追跡 80
竜使いの少女 85
悪意 90
フラワーガーデン 96
黒の騎士 101

圏内事件
昼寝 108
結成 113
鑑定 116
黄金林檎 121
幻の復讐者 127
黒幕 133
解決 138
2人の未来へ
システム外スキル 146
打ち上げ 151
異変 156
夜景 161
黒曜石の剣 167
2人の未来へ 172
心の温度
エクストラスキル 177
鍛治士の少女 182
竜の棲む山 187
穴の中で 193
脱出 199

プロローグ

突如現れた天才物理学者の茅場晶彦が作った最新型ＶＲ機器のナーヴギア。それは脳の信号で直接ゲームのキャラクターを動かせ、ゲーム内の刺激を直接脳に与えることが出来るハードだ。つまりナーヴギアを使うことで五感のすべてでゲーム世界を感じられ、ゲームの世界に入れるようになるのである。

しかしながら情報量の増加などで複雑なソフトを作るには金がかかりすぎたためにいまいちパッとしないゲームしか販売されなかった。そんな中でとうとう戦闘をメインとしたＭＭＯＲＰＧゲーム「ソード・アート・オンライン」通称ＳＡＯが販売された。

机の上の３面ＰＣを見ると初回生産版一万本の中の一つを運よく手にいれた人が苦労話や自慢を書き込んでいる。

俺は幸運なことに更に少ない１０００人しか参加できないβテストに当選し、それにはなんとＳＡＯソフトの優先購入券がついていた。おかげで楽に購入することができたから良かったものの、もしも買えていなかったらきっとショックで３日は部屋に閉じ籠もってしまっただろう。

ＳＡＯは空に浮かぶ鋼鉄の城であるアインクラッドを舞台としている。この城は百階層の構造となっていおり、各階層は迷宮区というダンジョンで繋がっている。βテストの時は１０層目まで行き特殊な剣技を操るトカゲ男と広すぎる迷宮区に手こずり、残念ながらそこでβテスト期間の１ヶ月を迎え終了してしまった。当時は自分のデータが消される事に我が身が削られるような感覚を覚えたものだ。

サービス開始の３０秒前、開始と同時に入れるようにベッドに寝て楽な姿勢になる。そして、俺をあの世界へと送り出してくれるナーヴギアを頭に被り、起動の言葉を唱えた。

「リンクスタート！」

フルダイブ開始時に視覚、聴覚と順番に５感の全てがクリアされて再び接続されたのを感じると、そこは再び見ることを待ちわびていた異世界が広がっている。
ここは始まりの町。中世ヨーロッパをモチーフにしたのであろう光景が広がっている。二三度手を握ってみて久しぶりの感覚を確かめえる。そして込み上げてくる喜びに言葉が漏れた。
「帰って来た、この世界に！」
俺のアバターの名前は本名の桐ヶ谷和人をもじってキリトにしてある。身長は現実と感覚が変わるのを避けるために変えていないが、ゲームの中だしせっかくならと顔をいじり、どこかの伝説に出てくるようなカッコいいものにした。
早速狩りに行くことにして、この街で一番近くの武具屋に走り出す。すると後ろから、
「ちょっと、そこの兄ちゃん」
と声を掛けられたため振り替えると、そこには派手なバンダナを頭に巻いた男が立っている。
「その迷いのない動き方、兄ちゃんβテスターなんだろ。ちょっとレクチャーしてくれよ。俺はクラインって言うんだ」
不意を付かれたため、
「あぁ、俺の名前はキリトだ。よろしくな、クライン。とりあえず武器屋まで案内するよ」
とＮＰＣのように答えて近くの武器屋まで連れて行った。

この世界には魔法というものが存在しない。しかしこの世界にはソードスキルという必殺技のようなものがある。ソードスキルは特定の体勢になるとシステムが実際に動かないような速さで体を動かしてくれたり、慣性を無視したような連続攻撃が出来るようになったりととても便利なものだ。このゲームでは、ソードスキルをいかにうまく扱えるかが攻略の難易度を決めると言っても過言では無いだろう。
ソードスキルを教えるために来た町の近くのフィールドは草原と

丘がメインのステージで、今日はよく晴れている為に心地よい。
そんな中、クラインは目の前のイノシシ型のモンスター相手に曲刀を滅茶苦茶に振り回しては空振り、イノシシのカウンターを食らい続けている。
「一瞬の貯めを作るんだ。そうすれば後はシステムが勝手に攻撃を当ててくれるよ」
「そんな事いってもよぅ、あいつ動きやがるんだぜ」
一度クラインが相手にしていたイノシシを倒すと、近くにいた別のイノシシに向かって拾った石を投げつける。命中率を上げるために投擲スキル、シングルシュートを発動させる。
「いいかこうして貯めて、ズパーンと一気に放つんだ」
ソードスキルを発動したため手がひかりだし、直後に一瞬で石を放った。
石を当てられたイノシシは怒ってこちらに一直線に向かって来るからそいつをクラインに誘導してやる。
「ズパーンて言われてもなぁ」とぼやいていたがようやく感覚を掴んだのか動きを止めたクラインの曲刀がひかりだす。
「うおりゃぁぁ」
野太い掛け声と共に剣が凄い速さでイノシシの首に吸い込まれて行く。曲刀単発スキル、リーバーだ。それで体力がゼロになったイノシシは青いポリゴンの破片となり爆散した。
「うおっしゃあああー」
クラインが持ち上げた手にパシィンと手をぶつけると、クラインはようやくイノシシを倒せた事が嬉しかったのか満足そうな顔をしている。
「初勝利おめでとう。今の他のゲームで言うところのスライムのようなもんだけどな」
「マジかよおれぁてっきり中ボスクラスかと」
ひとしきり二人で笑い合い、次の獲物を決めて駆け出した。
しばらく狩りを楽しんだ後、感覚を覚えるためにソードスキルを空うちしていたクラインが、ふと赤く染まった空を見て何かを思い出し

たのかメニューを突然開く。
「チキショー、もうこんな時間かよ。今日は出前にピザ頼んでんだ。俺先に落ちるわ。サンキューなキリト。あぁそうだ！フレンド登録しとこうぜ」
クラインとならこの世界でいい友達になれるかもしれないと思っていた時だった。フレンド登録を済ませたクラインがログアウトボタンを押そうとホロウィンドウを操作していると急に
「ログアウトボタンがねーぞ」
と言い出した。
「いや、さすがにそんなわけないだろ。」
慌てて確認すると…
「・・・俺のも無い」
「おいおい大丈夫かよ初日からこんなミスしたら運営も大慌てだろうな。いや、ちょっと待てよ、あぁー俺様のピザが冷めちまう。ログアウト！おーい運営さんログアウトさせてください」
「無駄だよクライン、この世界はログアウトボタンを押すしかログアウトできないんだ。これはおかしいぞ本当なら全員を強制ログアウトさせてメンテ入れるなりするべきなんじゃないか」
何か嫌な・・・とんでもないことが起こるのではないか。そう思っていた時ゴーンゴーンと鐘の音が流れだし体を転移時特有の青い光が包んだ。
思わず閉じていた目を開けるとそこは始まりの町の中央広場だった。周囲に次々と人が転移しているため、きっと全員が集められたのだろう。クラインは俺の近くに転移されたようだ。
すると空を埋め尽くす様に何個もの赤い六角形のパネルが出現し、そこにはＷＡＲＮＩＮＧの文字が。その隙間からどろっとした赤い何かがまるで血が垂れるかの様に出現し、空中で赤いローブを形成した。このゲームのＧＭアバターのようだ。
周りはセレモニーかよと安心したようだが、どこかに違和感を感じる。そしてその違和感の正体はＧＭのアバターだった。いつもはその中に魔導師の様なおじいちゃんかメガネをかけたお姉さんがいる

のだが、その赤いローブのなかには何もなく裏地が見えている。
アバターからいつものアナウンスと異なった声が聞こえてくる。
「私の世界へようこそ。私は唯一この世界を操作できる茅場彰彦だ。諸君らの中にはログアウトボタンが無いことに気がついている者もいると思う。しかしこれは不具合ではない。ソードアートオンライン本来の仕様である」

始まりの日
出会い

「繰り返す。これはソードアートオンライン本来の仕様である。君たちがこの世界から出るには１００層に居るボスを倒し、この城を攻略するしかない。また、この世界でアバターが消滅した時、ナーヴギアが諸君らの脳を焼き切る。今後はいかなる蘇生手段も存在しない。」

「おいキリト、本当に脳を焼き切るなんて事ができんのかよ？」

「ナーヴギアはマイクロ波を出して神経を遮断しているんだ。つまり電子レンジと原理は同じなんだよ」

「じゃあよ、ケーブルをひっこ抜いちまえば――」

同じ事を考えていた俺は直ぐに答えてやる。

「いや、確かナーヴギアの重さのほとんどがバッテリーの重さだったはずだ」

「マジかよ・・じゃあいったい何のために・・・」

「きっとあいつが答えてくれるさ」

空に浮かぶアバターを指さす。

「諸君はきっと何のためにと思っているだろう。私はこの世界を作り出し、観察するためだけにナーヴギアを作った。そしてここに目的は達成された。最後に私から、諸君らに一つプレゼントを用意した」

俺は急いでウィンドウを操作するとメッセージに何かが届いている。それを実体化させると、

「手鏡・・？」

突然アバターがひかりに包まれ、再び目を開ける。

「あれ、転移してない」

何か変わったところを探すとなぜか周りの人の身長が低くなっている気がする。手に持っていた物を覗き込むと、そこには俺のあまり好きではない、見慣れた中性的な顔がこちらを覗いていた。

「この顔・・現実の!!」

周囲を見渡すと派手なバンダナを頭に巻いた男がこちらを見ている。
「もしかしてお前クラインか！」
「もしかしてオメェキリトかよ。それにしてもどうやったら現実の顔になるんだ？」
「ナーヴギアはフルフェイスだから顔のスキャンはできるはずだ。でも何で体格まで変更されてるんだ？」
「あの時じゃねーか、ほら最初に体のあちこちを触ったろ」
ナーヴギアの初期設定にそんなものもあったかとようやく思いだす。性別も統一されたようで女の初期装備をした男性があちこちにいた。
「これにてチュートリアルを修終了諸君らの検討を祈る」
その一言を残しアバターは来た時を逆再生したかの様に空に消えた。この時、俺は茅場が嘘を言っていないことが確信できていた。
不安が人々の間に広がる。一人の少女の叫び声を皮切りに、帰らせろと怒鳴り初める人、その場でしゃがみこみ泣き出す人。この瞬間に世界は有り様を変えたのだった。
しかし、そんな中にあってもなぜか冷静でいる自分がいた。
（ＭＭＯは基本的にリソースの奪い合いだ…。なら、次にとるべき行動は）
クラインに今後の行動を話すにはここではまずいと思い、クラインの手を取ると誰もいない路地に連れて行く。
「クライン、この世界はＭＭＯＲＰＧつまりリソースの取り合いなんだ。きっとこの近くの狩り場は人で一杯になるだろう。俺はそれを避けるために次の町に行く。二人ならレベル１でも安全に行けるルートを知ってる。だから・・」
クラインは一気にまくし立てる俺に最後まで言わせず首を横に振った。
「わりぃなキリト、俺はこのゲームを一緒に徹夜して買ったダチがいるんだ。そいつらもこの世界に閉じ込められただろう。そいつらをおいては行けねぇ」

後二人までなら行けるか・・？三人以上になると厳しいな。黙り混んだ俺を見てクラインも悟ったらしい、
「俺は大丈夫だ。そんなに甘えるつもりはねーよ。だからキリト、オメェは次の町に行ってくれ」
クラインを置いて行く。そうしたらきっと後悔するだろう。しかし、そこで大丈夫とは言えなかった。一緒に行き、誰かが死ぬ。そうなった時のクラインの俺を恨む顔。それが怖くて、うつむいている事しかできなかった。
この世界で初めてできた友達を見捨てて背を向けようと顔を上げたちょうどその時だった。どこかへ走る二人が視界の中に入る。
たしかそっちはフィールドとは逆方向・・・！まさか外周から飛び降りるつもりなのか。
「あっちはダメだ、自殺が起こるかもしれない・・・クライン、来てくれるか？」
「誰かが死ぬとなってじっとしてられるかってんだ」
クラインが即座に返事を返してくれる。
「・・・ありがとな、クライン」
ばつの悪さもあってそう呟き、全力で走り始めた。

少し走ると開けた場所に出た。ここは丸く飛び出したテラスのようだ。景色を見るためか回りと比べると柵が低い。すると女の子の大きな声が聞こえてくる。
「ボクはそんな事許さないよ！」
「本当に死ぬなんて事があるわけないんです。脱出するにはこれが手っ取り早いに違い無いのですよ！」
男は２０代後半位で髪は黒、誠実そうな印象を受ける顔を今は恐怖で歪ませている、一方女の子の方は同い年位だろうか、一人称はボクらしい。黒い色の髪を肩で揃えて、初期の装備に身を包んでいてテラスの柵の前に立って両手を広げている。
なるほど、と思った。確かにこのゲームで人は無理やり動かす事が出来ない。自分が壁になることで男の自殺を止めようとしているの

か。女の子の度胸に称賛を送ると共に一抹の不安を覚えていた。もし、あの男がβテスターだったら・・・

その不安は男が距離を取り剣を抜いたことで確信に変わった。街中ではＨＰが減少しないようになっているため、いくら剣を振り回しても人に当たる前に障壁によって剣がはじかれる。

しかし、ソードスキルを使うことでＨＰこそ削らないものの相手にノックバックを発生させることが出来る。悪質な通行止めに対してβの時には時々見られた。

しかしこれは最後の手段で相手にかなりの恐怖を抱かせる。βテストの時にはそれを悪用した強盗も発生した位なのだ。流石に剣を抜かれた時は少し動揺していたが、その事は知らないのか手を広げて立ったままだ。

「バカ野郎」

そんな事したらあの子が・・

俺も剣を抜く。あの子と男までの距離は４メートル、俺と男までが６メートル位。普通に走ったのでは間に合わない。

「くそっ」

俺は一歩を踏み出しながら片手剣単発突進スキル、レイジスパイクを発動させる。少し遅れて男の剣が発光し始める。

あの緑色の光は片手剣単発突進スキル、ソニックリープだろう。同じ突進技でも俺の技は突進の距離が長く出が速い。それに対して奴の技は突進の距離こそ短いものの空に向かって打つ事ができる。

男は少女が退かないのならテラスから突き落とすつもりのようだ。

自分の剣に集中していく。段々足音が聞こえなくなり周りの物が遅くなっていく。俺の頭の中にはただ一つの事―あの子は必ず助ける―それだけ。

「一緒に帰りましょう！」

男がそう叫び、俺は気付かれない様に静かに地面をおもいっきり蹴る。俺の狙いは男の剣。男の体が滑らかに動き始める。

俺は体を意図的に動かして威力や速度を上げる。しかし、男のソー

ドスキルが思ったよりも速い。これでは剣を狙っても間に合わない。
レイジスパイクの軌道を少し変えて自分が間に入り込む。瞬間、男のソードスキルにかかっているシステムアシストの標的が俺に移る。
男は驚いた顔をしていたが、ソードスキルは一度放つと急にはキャンセル出来ない。紫色の障壁が出てソードスキルによる嫌な衝撃が体を襲う。柵を使ってノックバックを軽減させようとするが高さが足りない。
二人でもつれ転がる様に柵の外側に投げ出される。空中で右手に握っていた剣をテラスへ投げた。
そのまま外周部を右手で掴んで先に落ちた少女の真っ直ぐ伸ばされた腕を左手でなんとか掴む。そんな姿の俺たちを見て
「そんなにこんな場所に居たいんですか？なら良いです。ですが私は先に帰りますね」
「ダメーーー！」
少女が叫ぶも止まらず、そう言い残して男はテラスの柵を越えるとそのままオレンジ色に染まった空に落ちて行った。
「もう、ボク嫌だよ。こんなのはもう・・・」
そう呟いた声はテラスを掴むのに必死だった俺には聞こえていなかった。

クラインにどうにか引っ張り上げてもらった。助けた少女の方を見ると、人が死んだショックに耐えられないのかうつむいている。どうしよう、泣いている女の子を慰めるスキルなんて持ってないぞ。どうした物か考えているとクラインが、
「俺の名前はクラインだ。お嬢ちゃんはこのゲームに知り合いは居るか？
」
と優しく話し掛ける。
「ボクの名前はユウキです。あの・・・助けてくれてありがとうございます。さっきの男の人と一緒に来たん・・・ですけど・・・」
「そうか…嫌なこと聞いてすまねぇな。ところでユウキさんはこの

ゲームをクリアするために戦いに出るのか？」
俺はクラインが何を言おうとしているのか理解した。
「おいクラインそんなの無・・・」
「もう誰かが死ぬのは嫌なんだ・・・だからこの世界はボクが終わらせたい」
今にも消えてしまいそうな細い声で、しかし、きっぱりとそう言いきった。俺はユウキがこのままでは一人でも町の外に行ってしまう事を確信した。
覚悟は決めた。
「俺の名前はキリトだ。俺はβテスターだからいろんな事を知ってる。ユウキ、強くなるために一緒に来ないか？」
「…お願いします。キリトさん」
「俺の事はキリトで良いよ。後、敬語もなしで。クライン、お前は大丈夫か？」
「おうよ！オメェから教わったテクでなんとかしてやらぁ」
と、胸を叩いて頼もしい返事をくれる。
「何かあったらメッセくれよな、ユウキはもう行けるか？」
「うん・・もう大丈夫」
この世界で初めて出来た友人を置いていき、守るべき人を連れて次の町へ走り出した。

共闘

俺たちの目的地はホルンカという小さいが武器屋や道具屋、宿屋などがある狩りの拠点に最適な村だ。さらにそこでは俺とユウキの使う、片手剣を報酬としたクエストがある。

始まりの街を出て少しするとオオカミ型のモンスターが索敵スキルに引っかかった。ユウキにそれを告げると飛び出していき、モンスターのタゲを持って行ってしまったが、ユウキはあの男から戦闘について教えてもらっていたらしい。ソードスキルを難なく使いこなして俺が何かを言う必要もなく倒し切っていた。

初めて見るユウキの戦い方は端から見ると安定している様に見える。戦闘中にスイッチと言ってみたが、よっぽど集中しているのかターゲットを譲ろうとしない。

仕方なく別のモンスターを相手にする事にしていた。

俺は何を話しかければいいのか分からず、ユウキもこちらをちらちらとうかがうのみで話しかけてはこなかった。気まずく感じつつも道にいたモンスターを倒しながら移動すると、町の外壁が見えてきた。二人ともダメージを受ける事なくホルンカに着いたことに安堵しつつ、そういえばと思いだした事を聞く。

「ユウキ、今何かスキル取れるだろ、何取るんだ？」

「何が良いの？」

初めに取得可能なスキルは二つで、一つは二人共片手剣スキルで埋まっている。俺はユウキの安全性を高める為に索敵スキルを取った。

「う～ん人に決めてもらうもんでもないしな～。あ、さっきユウキがｍｏｂに気が付く前に俺がどこに居るか教えてただろ、あれは俺が取った索敵スキルの効果だ」

「そうなんだ…そういえばキリトが言ってたスイッチって何？」

・・・ユウキは初心者だったな

スイッチのレクチャーをしている内にホルンカの村に入る。俺は真っ直ぐとある家を目指して歩き、ユウキがその後を続く。先に家に

入るとユウキはためらったものの
「お邪魔します」
と呟いてキョロキョロしながら入って行く。そこには火に掛けた鍋をかき混ぜる痩せた女の人がいた。
「もてなしたいのですが、うちは貧しくて水しか有りません」
と声をかけてもらい、ここで断らずに水をもらう事で目的のクエストを受けられるのだが、ここで大丈夫ですなどと言うと・・
「そんなに気を使わないでいいですよ。」
「すいません、貰えないでしょうか！」
危うく女の人が鍋を再びかき混ぜ始めるところで水の入ったコップが一つだけ出てきた。すると女の人の頭の上にクエスト発生を知らせる黄色のビックリマークが出てきたのだが、やはりユウキには見えていない様だ。ＮＰＣは言葉通りにしか受けないのでぐいぐい水を勧めて来る事が無い。結局、ユウキは水を貰うことが出来なかった。
「そんな行儀の悪い奴を見る様な目で見ないでくれ、これはクエストを受ける為に必要なんだ」
「…先に言って欲しかったかなぁ」
「申し訳ありません…」
そうこうしていると、閉まったドアの向こうからこんこんと咳の音が聞こえてくる。
これはユウキにも聞こえたらしい、何故かとても悲しそうな顔をしている。
その音をきっかけに女の人が話し始める。まとめると、彼女の子どもが病気で薬を作っているが材料が足りない。その材料は森に居るモンスターから取るしかなくて困っている。といったところだ。
話しを聞き終わり
「クエは始まったか？」
「クエスト受けられてない…」
結局クエストの報酬を受け取りに戻ることになるのでその時にクエストを受けることにした。

素材を落とすモンスターが出る森に行くと、リトルネペントというウツボカズラに似たモンスターがｐｏｐしている。さっきの二の舞にならない様にユウキに

「ネペントには普通の葉っぱ付きの奴の他に2種類存在しているんだ。一つが花付きで、今回のクエストで必要な植物種の胚珠を落とす。次に実が付いている奴がいるんだけど絶対に攻撃しないでくれ。実に攻撃が当たると実が破裂して周りのネペントを呼び寄せてしまうんだ」

「そうなんだ。ところでキリト、ここで武器は買わないの？」

ユウキのゲーム感のよさに少し驚きつつ、

「ここで売られてる剣は攻撃力は高いんだけど耐久値が低いんだよ。これからネペントを百何匹と狩らなきゃいけないから都合が悪いんだ」

「百何匹・・・」

「とりあえずもう夜になるけど大丈夫か？」

「まだ大丈夫だよ」

「よし、行くか。相手の攻撃は実際に戦いながら説明するぞ」

「うん」

「相手が膨らんだ、消化液が来るぞ！」

俺が手本を見せた時の様にユウキが右に飛び退くと、ソードスキルを発動させて相手にダメージを与える。弱点である頭と胴体の間には当たっていないものの、正直ユウキの戦闘センスは目を見張るものがある。敵の攻撃が当たらないのだ。敵の鞭での攻撃は全てパリィし、消化液は最小限のステップで回避しきってしまう。

その戦い方を見て一人で大丈夫だと判断し、目の届くところで別のネペントを倒しに行くことにした。

数十分がたち、まず俺のレベルが2になり、次にユウキのレベルアップを知らせるファンファーレが聞こえた。そろそろ頃合いかと思いユウキに休憩しようと声を掛けようとしたその時、茂みから音が聞こえてきた。

まずい、レベルアップで警戒が緩んだか。

ユウキを俺の後ろに隠し、俺は剣に手を掛けた。すると、茂みから男が拍手しながら出てきた。
「ごめん、驚かせるつもりは無かったんだ。君たちも剣のクエスト受けたんだろ。僕の名前はコペル。パーティーを組んで一緒に狩らないか？」
ユウキは相手がモンスターで無いことに安心したのか俺の横に出てきた。しかし俺の方はパーティーという言葉に置いて来たクラインを思いだし、体が強張ってしまう。
それを見たコペルがなにか勘違いしたようで
「ああ、ごめん急にパーティーを組もうなんて信用出来ないよな。とりあえず見つけたら先に君たちに譲るから同行させてくれないかな？」
こうゆうクエストは数を狩れば狩るほど目的のモンスターが出やすくなる。彼はそれを知っているのだろう。ユウキの方を振り返るがユウキが何も言わないので、
「了解。とりあえずよろしくな。俺の名前はキリトだ」
「僕の名前はユウキです」
「しっかし僕より速くこのクエストを受けてた人がいるなんて驚いたよ」
「いや、俺達も今来たばっかりさ」
「少しステータス更新の確認をしたいから先に狩り始めてくれ」
コペルは一瞬怪訝そうな顔をした。それも当たり前だろう。βテスターは一度経験しているはずなので、そんなに時間がかかるはずがないのだ。俺がユウキの方を見るとコペルは何故か一瞬驚き、
「了解。じゃああっちの方で狩って来るよ」
コペルが驚いた意味があまり分からないが、きっとニュービーを連れて来ているのが原因なのだろう。気にしないでユウキにステータスの更新について説明することにした。
あれから4時間が経過し、すっかりあたりが暗くなった
「ぜんっぜん出てこないぞ」
「前の確率ならもう三個出てきてもいいぐらい狩ったよね」

「ああ、確率を本サービスで変えたんだろうな。まったく運営も要らないことするよな」
かれこれもう2百匹は狩っただろうか、これでは徹夜もあり得るかと思った時、ユウキが、
「あの頭についてるのは花？」
その方向を索敵。もう1体近くに居るな。気づかれない様に慎重に近づくと、そこには木に囲まれた少し広めの空き地があり、花付きと実付きが近くでポップしていた。
「なぁ、これどうする？」
「倒しておきたいけどあれは危険だよね」
「そうんなんだよな～」
「ねぇキリト、何が危険なの？」
「あぁ悪い、さっき実を攻撃するとネペントが集まるって言っただろ、あれ今だと１００匹以上集まるかもしれないんだよ」
「ひゃ…１００匹!?」
「ただ花付きが時間たつと実付きに変わるかもしれないんだよ」
「実を攻撃しなければ良いんでしょ。じゃあ行って来…」
駆け出そうとしたユウキの手を掴む。
「まだ行こうとするなって。このままじゃ2体が近すぎる。あの実、プレイヤーだけじゃなくて他のモブの攻撃が掠っても割れるんだ」
「じゃあ僕が実付きのタゲを取って花付きから引き離すから、君たち二人で花付きを速攻で倒してくれ」
「それが良いか…任せたぞ」
「わかった」
「ユウキ、戦闘開始だ！」

殺意

　レアモンスターなだけにさっきまで相手にしていた葉付きより少し強くなったが苦戦する程ではない。消化液をかわし、二回切りつける。横薙ぎに鞭の攻撃が来た、力を込めて剣で上に弾き

「スイッチ!」

「やあぁぁぁぁ」

　ユウキがホリゾンタルを発動させ、青い光に包まれた剣が弱点に吸い込まれていく。バァンという音と共に青いポリゴンの破片が飛び散る。

　ユウキがアイテムを拾ったのを見届け、ふとコペルの方を見ると後一本ソードスキルを打ち込めば倒せるところまで削っている。

　戦闘の邪魔にならないように少し離れて待っているとコペルが聞こえるかどうかの声で

「・・・・ごめん」

　と言った。

　コペルは何を謝ってるんだ?そう思っているとコペルの剣が薄青くひかりだす。

　その光を見てようやく気が付いた

「やめろコペル!そんなことしたら・・・」

　薄青い光はバーチカルという単発「垂直」技なのだ。つまりコペルの攻撃は・・・

　コペルの剣が上から頭の実に吸い込まれ、パァンと実が弾ける。その一撃で花付きは体をポリゴンに変え、辺りには刺激臭が漂う。

　そしてコペルは木々の間に入って行き、策敵のスキルを使っても見つけられなくなった。今さらだがコペルの狙いに気づく。コペルは俺達をモンスターに殺させてアイテムを奪う気なのだ。

　しかし、俺は不思議と怒りを感じなかった。これはもう只のゲームではない、他人を蹴落としてでも自分を強化しなければ生き残れない「デスゲーム」となったことを実感していたからだろう。

「ユウキ、まだいけるか?」

「まだ大丈夫」
危険な状況だとわかっているだろうが剣を握っている手は力強い。ユウキに背中を向け、暗闇をじっと見つめる。策敵のマップは真っ赤に染まっている。守らなければいけない相手が後ろにいるから怖がってなんかいられない。。
せめて、ユウキは守ってみせる。そう心に決めた。

木々の間にネペントの群れが見えるようになった。。半分程のネペントはこっちではなくコペルが居た方に向かっている。
「何でこっちに来てんだよ！」
少し離れた場所からコペルの声が聞こえて来た。
俺はスキルを取る時に策敵を選んだが、実はもう1つ二人の生存率を高めるスキルがある。それは隠蔽スキルといって自分や触れている仲間を敵の視覚で感じられなくするものである。
コペルはこのスキルを見たときにＰＫを思い付いたのだろう。茂みから出てくるまで気が付かなかったのはきっとこのスキルのせいだ。ユウキがニュービーだと知って驚いていたのもユウキの初心者とは思えない戦闘を見ていたからだろう。
しかし、このスキルにも欠点がある。まず1つ目に、潜伏場所を見つめられ続けると隠蔽がとけてしまうこと。２つ目に視覚で敵を捉えるモンスターにしか効果がない事だ。
コペルはきっと初めて使ったのだろう。実はネペントには目が無く、熱でプレイヤーを認識している設定だったのだ。
β時代の知識に思いを巡らせていると、ふとこの状況を切り抜けるアイデアが浮かんで来た。ストレージから水筒を3本出す。始まりの町で購入していた物だ。
「ユウキ、ちょっと我慢してくれ！」
「ちょっと、え、まっ、きゃっ」
後ろから水筒の水を一気にユウキにかける。
「ユウキ、この剣だと部が悪い、ホルンカまで戻って剣を受け取って来てくれないか？」

「それじゃあキリトは…」
「時間が無いんだ。速く！」
もうネペントの群れは目の前に来ている。
「絶対に死なないでよ」
「大丈夫さ」
ユウキはホルンカの方へ走り始めた。
ユウキがネペントに狙われずに森に入って行ったのを見届け、目の前のネペントに切りかかる。２人で死んでしまう最悪な可能性は断たれたがユウキが戻ってくる前にはもう決着がついているだろう。
「大丈夫って言ったけどなぁ」
既に剣の耐久値は残り僅か。耐久値が切れたら敵の群れに武器無しで放り込まれるという最悪な事態になってしまう。しかも攻撃しただけで耐久値は減るから全て一撃で倒さなければ俺が死ぬ。
「やってやるさ」
この状況において俺は楽しんでいた。雑念を捨てて集中中していくと徐々に音が遠ざかり、剣と一体化していく。ここにあるのは剣と敵だけ。消化液が来る。横に飛んで避ける。敵が硬直する。ホリゾンタルで倒す。鞭が横から来る。しゃがんで避け、クールタイムでホリゾンタルが使えないので今度は単発斜め切りのソードスキル、スラントで倒す。
その作業を何度も繰り返すうちに、避けきれずに掠めた鞭や消化液がじわじわと体力を削る。しかしその時は体力ゲージが安全圏の緑色から注意域の黄色に変わった事さえ気付かずに剣を振り続けた。
一方ユウキはショートカットするために道の無い、木の生い茂っているなかを何度も躓きながら一生懸命に走っていた。
その時
「あっ、キリトの体力ゲージが」
左上にあるキリトの体力ゲージが減り始めているのに気づく。
このままだとキリトが危ない！ボクの為にキリトが死ぬのは嫌だ…でも戻ってもキリトよりぼろぼろの剣じゃ足を引っ張るだけだろ

うし…。もっと速く！
全力で走っていると、スキルを見ていた時にとあるスキルがあったことを思い出す。急いでスキルの取得画面を開き
「疾走スキル…これでもっと速く走れるかも！」
取得ボタンをタップして、また道なき道を走り始めた。

残りのネペントも残り7体ほどになったとき、後ろの方からモンスターの爆散音とはまた違うカシャーンと硝子が割れる様な音がした。この音はβ時代に何度も聞いた事がある。
「コペル…、お疲れ様」
この音はプレイヤーの死亡時に流れる物だ。この瞬間、コペルというプレイヤーは現実世界でも亡くなってしまったのだろう。
その時、一瞬判断が遅れた。まずい、と思ったときにはもう遅く、消化液が身体を掠める。消化液を放った敵をスラントで倒したが、今までの集中力が
切れてしまった。
「…っ」
今まで避けられていた攻撃までもが掠り始める。2体をホリゾンタルで倒し、残り4体になった。
囲まれてない今なら…
「ってうわっ！」
後ろを向き逃げようとしたその瞬間、鞭が前から飛んできた。
コペルが相手していた奴がこっちに来たのだと気がついた時には遅く、反射的に剣でガードしてしまう。剣の峰と鞭がカァンと音をたててぶつかる。
剣の耐久値が一気に削られ、ピキッと音をたててひびが入る。そしてそのひびが剣全体に広がり…音をたてて消滅した。
剣の消失エフェクトが消えないうちに次の攻撃が来て、俺の身体に初めてのクリティカルヒットがはいった。
「うっ」

その衝撃で仰け反ってしまい、倒れて次の行動に移れなくなる。
「約束…守れなかったか」
次の一撃が放たれ自分の身体に当たる寸前、何かが飛び込んで来てその攻撃を弾いた。
驚いて飛び込んできた人を確認すると、そこにいたのは、逃がしたはずのユウキだった。
「間に合った。神様、間に合ったよ…」
「な、なんでこんなに速k…もがっ」
口にポーションを突っ込まれ、反射的に飲み干す。
「キリト、これっ！」
立ち上がると同時にユウキが攻撃してきたネペントを一体倒して腰に挿した剣を抜いて渡してくれる。
ユウキはメニュー画面を出したままにしていたようで、すぐに剣を取り出して戦いに備える。
モンスター達は急に現れたプレイヤーに戸惑っているようにみえた。
「ユウキ、ありがとな」
「大丈夫だよ、それより来るよ！」
今度はターゲットをユウキに変えて攻撃するようだ。
格好良くはないがβ時代の最初の頃に愛用していた剣の重みを感じる。久しぶりでもよく手に馴染む感覚、今ならネペントなど簡単に倒せる気がする。
「よし、もう一度勝負だ！」

１０体いたネペントはユウキが来てくれたのとアニールブレードの攻撃力によってすぐに倒しきった。
「あ～もう疲れた、眠い、腹減った」
まだ圏外だが索敵に何も引っ掛からないので、疲労に負けてその場に横になる。戦っていた時は気づかなかったが、かなり精神的にきていたようだ。
「コペルさんは？」

その問いに対して首を横に振る事しか出来なかった。
その意味を悟ったユウキはうつむくとコペルがいた場所にボロボロの剣と盾が落ちているのを見つけた。
するとユウキがその近くにしゃがみこみ、何かを拾い上げた。
「これって…胚珠だ」
コペルは花つきを倒していたらしい。
「ユウキ、もらっておけよ」
「これ、ここに置いといて良いかな？このアイテムちょっと使おうと思えなくて」
「あぁ、ユウキがそうしたいなら良いんじゃないか？基本的にアイテムは拾った奴の物だからな」
きっとユウキはコペルにお供えの意味を籠めているのだろう。剣と盾を拾って大きな木の下に胚珠と一緒に置いた。
新しい胚珠を探そうと仮想世界なのに何故か重く感じる身体に鞭打って立ち上がると、ユウキが
「じゃあ戻ろっか」
「おい、一つ落ちてないぞ」
するとアニールブレードを指しながら
「僕にはこの剣は重いや」
「そうか…良い武器だと思うんだけどな～」
渋る俺の背中をホルンカの町がある方へ押しながら
「いいから早く帰って休も？」
「…ああ、わかったよ」
どうやら心配してくれていたらしい。
「疲れてるだろうし、帰りの戦闘は任せてね」
「俺も戦闘は大丈夫だよ。まぁとりあえず…」
戻るかと言いかけた時、赤黒く染まったカーソルがすごい速さでこっちにやって来るのを索敵スキルが捉えた。

危機

そこで俺の索敵に反応があった。レベルアップしたためにネペントのカラーカーソルはピンク色に近くなっていたのだがこいつは赤黒く表記されている。

「ユウキ、ちょっとまずいかもしれない」

「え、どうしたの？」

ユウキが少し首を傾けて聞き返す。その時ドドドドとしか形容出来ないようなそんな足音が聞こえてきて地面を揺らし始めた。

「えっ、何これ？」

「逃げるぞ！」

ただならぬ様子を察したらしい。ユウキがあわてて走り出す。

「おかしい！βにはこんなの居なかったぞ！」

後ろを振り返ると大きなネペントが根っこの部分を忙しなく動かして、こちらに向かって追っかけて来るのが見えた。

「追い付かれそうだよ！」

「しょうがない、左右に別れて回り込むぞ！」

「了解」

俺が右側に、ユウキが左側に向かって走り出す。ネペントが勢い余って通り過ぎた瞬間、背中を一度切りつけてタゲを取る。

相手の情報を見ると名前がＴｈｅ　ｏｒｉｇｉｎ　ｏｆ　ｎｅｐｅｎｔｓ　となっており、ＨＰバーが二本あるのが見える。どうやらフィールドボスが実装されたらしい。

今ので一本目の体力が５％ほど削れたか

「ユウキ！俺の後ろに居ろ！」

「わかった」

唸りをあげて飛んでくる鞭をソードスキルを使ってはたき落とす。攻撃パターンは今までのネペントと変わらないみたいだ。

がら空きになった胴体に切りつける。

「ソードスキル一本！」

ユウキの剣が光り始める。ホリゾンタルが胴体の付け根に吸い込

まれる。これでネペントのヘイトがユウキに向くがもう一度切りつけて取り返す。腐食攻撃のモーションが来た。ギリギリまで引き付け横に跳ぶ。ネペント系のモンスターは腐食液の攻撃後にしばらく動けなくなる事がわかっている。

「もう一回ソードスキル！」

ユウキのソードスキルが弱点に当たり、ユウキが飛び退くと共に同じ場所にホリゾンタルを当てる。

その後　十分程戦い続け、ようやくボスの体力ゲージが赤くなった。

「よし、このまま削りきるぞ！」

その時、一瞬ネペントが動きを止めたかと思うと体を捻り始めた。奴は何をしてくる？体を捻った動きで１０層の刀使いを思い出す。体を捻った後に無茶苦茶広い範囲攻撃を仕掛けてきたのだ。

同じ武器じゃないけど…きっと横凪ぎで鞭がとんでくる！ここまでの思考をコンマ５秒で終えるとすぐにしゃがんだ。すると頭の数センチ上を鞭が音をたてて通りすぎる。範囲は3メートル程なので後ろに飛んでいたらまず間違いなく当たっていただろう。しかし、安心するにはまだ早かったようだ。背後からガキンッと音がした。

「うわぁ！」

辛うじて剣で止めたようだがソードスキルを発動させてない限り弾かれているだろう。ユウキは今日初めてログインしたのだということ、そして初見の攻撃には対応が出来ない事が頭から抜けていた。

遅れてもう一本鞭がとんで来る。今度こそ当てさせない！

「はぁっ！」

気合いを入れてスラントを放つ。ガキンッと音をたてて剣と鞭がぶつかり合う。剣に当たった鞭は動きを止めずに剣を軸にして曲がる…このままじゃ

しまったと思った時にはすでに遅くドゴッと音が鳴ってユウキは弾き飛ばされていた。

…そしてユウキが飛ばされた方向からパァンと硝子が割れたかのような音が聞こえた。

その音に気を取られたもののネペントの消化液をどうにか避ける。
ユウキが飛ばされた方を見るが、茂みの向こう側にまで飛ばされたのかそうでないのか…。暗いのもありここからじゃ何が起きたかわからない。
「ユウキ!」
返事がない!もしかしてさっきの音は…最悪の事態が頭をよぎる。
もう一度ソードスキルを叩き込もうとしたその時、ネペントの鞭が体に
なんでだ!さっき消化液を吐き出したばっかだろ!
木に叩きつけられ、転倒状態に陥ってしまい立ち上がる事が出来ない。
次の攻撃をなんとかガードしようと剣を持ち上げる。
ネペントの鞭が振るわれ、ダメージを覚悟した時後ろから
「おねーさんが助けに来てやったゾ」
という声と同時にガンッと鞭が弾かれる。
最初の街で買えるダガーを手に持ち、金髪にフード付きのマントを着た小柄な女性が俺の前に立っていた。
「助かった、ところで君は…?」
「人の名前を聞くときはまずは自分から名乗るものだヨ」
剣を杖にして立ち上がる。
「悪いな、俺の名前はキリトだ」
「じゃあキー坊だな!オレっちの名前はアルゴ。情報屋をしようと思ってるんダ。今後ともごひいきにナ」
ユウキが気になるしその呼び名は何だと突っ込みたいがとにかくこいつを倒すのが先だと決め、アルゴの隣に立つ。
その後、ネペントが倒れるまでに5分と時間はかからなかった。
「ユウキ!」
俺がネペントの消滅を確認してからユウキの方に駆け出そうとすると、アルゴに肩を捕まれた。思わず睨むと
「はぁー。焦って索敵を忘れたら危ないゾ、キー坊。それにパー

ティーメンバーの体力なら左上で見れるじゃないカ」
そう言われて視界の左上を見る。そこにはｙｕｕｋｉの名前と黄色くなったＨＰバーがあった。いろんなことが一日の間に起こりすぎて冷静に考えられてなかったようだ。ボスは体力が少なくなると狂乱状態になり、攻撃から攻撃への時間が速くなる事を忘れていた。
「そんなんじゃすぐに死ぬゾ」
アルゴは真面目な調子でそう告げたあと、
「…まぁステイクールってやつだナ」
と言って空気を弛緩させる。
この時俺は、βテストとの違いが致命的な毒となってテスター達を蝕むだろうと感じた。
「……悪い」
「ユウキって言ってたがそれがあの娘の名前なんだよナ？」
「あぁ…って見てたのか？」
「いや、戦闘音がしてるからこっちに来たらちょうどゆーちゃんが弾き飛ばされてるのが見えてナ。序盤からそんな強いモンスターが出てくるのか気になって来たわけダ。でもゆーちゃんはどうして起きて来ないんだろうナ」
周囲を警戒しながら茂みに駆け寄る。
茂みを覗くとユウキは中で眠っていた。
一先ず無事だった事に安心した。
「アルゴ、揺すってみてくれないか？」
「あいヨ」
アルゴがユウキを揺すってみても一向に起きる気配が無い。それを見て寝袋を取り出す。
「何やってるんダ？キー坊」
「寝袋に入ってたら筋力パラメータが足りなくても人を運べるんだよ」
「そーなのカ。じゃあオレっちが入れてやるヨ」
「ハラスメントコードが出たら困るしな…頼んだ」
「しっかしなぁーそんな裏ワザしってて最初の街で寝袋買うなんて

キー坊はもしかして…」
「い、いや、そのために買ったんじゃ無いって。知ってたのもたまたまだし」
「にゃハハハ、冗談だヨ。まぁ何で買ってるか気にはなっているがナ」
「街で野宿なら宿代がかからないだろ？最初に次の街に行ってれば人も居ないだろうし外でも問題ないと思ったんだ」
「…筋金入りのゲーマーなんだナ」
アルゴがユウキを寝袋に入れたので寝袋を引きずる。
「変なところに連れ込むなヨ」
「そ、そんな事しないって」
「にひひ、まぁ信じてやるヨ。ところでオレっちは商売人なんだよヨ。そのオレっちが時間を割いて助けてやったんダ。言いたいことはわかるよナ？」
「情報を寄越せって事か？」
「その通りダ。話がわかるじゃないカ」
「だけど俺もあのボスが出現した条件がわからないんだよ。こっちの剣の方なら話せるけど」
「しょうがない、そっちで我慢しといてやるヨ」
「そりゃどうも」
そうしてアルゴにアニールブレードの入手方を教える。
他にもホルンカの村への移動ルート等を教えながら歩いていると、村の門が見えてきた辺りでアルゴが
「じゃあ今日はこの辺で勘弁しといてやるから何かわかったら連絡をくれヨ」
「わかったよ…護衛までしてくれてありがとな」
「何の事かナ～オレっちは情報を聞き出していただけだゾ。まぁそーだナ、感謝してるんなら今後もオレっちの情報屋をご贔屓に頼むヨ」
「そうさせてもらうよ」
フレンド申請をお互いにしてアルゴと別れた。

過去

「結局…甘えっぱなしになっちゃったな」
門を潜り圏内に入った事を知らせる音楽が流れてきてきたため、索敵スキルを解除する。
宿の方向に歩いていくと村で一番大きな建物の前にお爺ちゃんのＮＰＣが立っていた。
「旅の冒険者様方、よくぞ戻られ…たの」
…こっちを見たとたんに一瞬言葉を詰まらせて顔がひきつったように見えたのはきっと気のせいだろう。
「お連れの方は大丈夫かね？今からベッドの用意をするからこちらにお入りなさい」
「…ありがとうございます」
こんなイベントあったか？いや、その前にこっちの様子を見て反応を変えた…？
ただのＮＰＣにそんな事出来無いと思うけど…プレイヤーが倒れたり気絶した状態で来る事も予想してプログラムを組んでいたのか？
そんな事を考えているとベッドと机、椅子が一つずつ置いてある小さな客室に着いたのでとりあえずユウキをベッドに寝かせる。
「あなたはこちらへ」
案内をしてくれたお爺さんに呼ばれて応接室らしき場所に通され、低めのテーブルを挟んで置いてあるソファーに座る。
「この度は森の主を倒していただき本当に感謝する。おかげで森での狩りも少しは安全になるというもの」
「あの…実は俺の仲間が受けた依頼なので実は何が何だかわからないんです」
すると爺さんがユウキが村で何をしたのか話してくれた。
まとめるとユウキが胚珠を持ってある女性の家の前で剣を欲しいと言っていた。しかし今は譲る相手がいるために爺さんが昔使って

いた剣を報酬にと渡そうとしたが、女性の家に有る剣じゃないとダメだとユウキが言った。
ならばとアニールブレードを胚珠を持ってきたという事で先に渡し、森のボスを討伐するように依頼した。結果、俺の受けたクエストの報酬をユウキに渡してしまった為、この剣を変わりに受け取って欲しい。約束した報酬じゃないが許して欲しい。ということだった。
ユウキが俺のクエストの報酬を受け取ったから俺の報酬が変わった？そんな事を想定してクエストを作ったなんてことあり得るのか…？とりあえず剣を見せてもらうことにする。
「報酬の剣を見せてもらっても良いですか？」
「もちろんだ、これだよ」
鞘に入った状態の剣を両手で受けとる。アニールブレードよりも軽い印象を受ける。
「抜いてみても？」
「もちろん構わんとも」
抜かれた剣はランプの光を反射してキラリと光る。細剣よりも少し太い位か。刀身の長さはアニールブレードと変わらない様に見える。
「ありがとうございます」
そう言って剣をストレージにしまう。
「この後は？」
「ユウキ…俺の仲間の様子を見てることにします。起きたときに知らない場所で一人は流石に怖いと思うので」
「そうか、ゆっくりしていってくれ」
「ありがとうございました」
ただのＮＰＣにしては色々な言葉に反応している気がしたが、考えても仕方がないと割り切りユウキの居る客室に戻ることにした。椅子に座ってユウキの様子をうかがってみる。ユウキはまだ寝ていて、悪夢でも見ているのか少しうなされていた。
「姉ちゃん…」
ユウキがそう呟いたのを聞いて、昔妹…直葉が病気になったときに

必死で看病していた事を思い出した。
両親が居ないときに直葉が高い熱を出してしまい、母さんに電話で教えてもらいながら飲み物を作って持っていったり、頭に冷えたタオルを掛けてやったりした。ようやく寝付いた直葉の様子を見ていると、寝言でお兄ちゃん…と呟いたのだ。その時、こんな俺でも直葉の兄なんだと強く実感した。
その様子がユウキと重なったらしい。妹の事を思い出した途端に現実世界に置いてきた色々な事が頭をよぎる。何年か…もしくは一生会えないかもしれない家族が恋しくなり、涙が溢れてきた。
ある時期から避けるようになっていた妹にこのゲームから帰ったらしっかり向き合おう。そして小さい頃の関係を取り戻そう。そう心に誓い、しばらく俺は椅子に座ったまま静かに泣き続けていた。
ボクはここに来る前の夢を見ていた。家族全員がＨＩＶキャリアで、病気と戦う毎日だった。
場面は１年前、パパが亡くなってから１ヶ月が過ぎた頃だった。ベッドに寝たきりの状態になっていたママに倉橋医師が話をしに来た。
「提案が有ります、木綿季さんか藍子さんをメディキュボイドの被験者にしてみてはいかがでしょうか？」
「先生、メディキュボイドとはなんですか？」
「医療用のフルダイブマシンで、ヴァーチャル…つまり電子の世界に五感の全てを接続する機械です」
「そのような物が…何で木綿季と藍子が被験者に成ったほうが良いんでしょうか？」
「メディキュボイドの被験者に成ればクリーンルームに入る事ができるのです。クリーンルームには細菌などが存在していないので日和見感染をする可能性がとても低くなります」
「その研究では何を試すんですか？」
「長時間のＶＲ世界へのフルダイブが人体にどのような影響を与えるか、また五感を完全に遮断して人体に問題が出ないかを調べる物です」

「具体的にはどれくらいの期間なんでしょう？」
「少なくとも…1年です」
「そんなに…その間はずっと会えないんですか？」
「今ではスクリーン越しで会話をする位しか出来ません。しかし今開発されている家庭用ＶＲマシン、通称ナーヴギアが製品化されればＶＲ世界で会うことが出来るようになると思います。まだ病気に感染していない今しか無いんです。どうか考えてみてください」
ゲームの世界に入れると聞いたときは面白そうだと思った。
倉橋さんが居なくなった後に姉ちゃんが話を切り出す。
「ユウはどうしたい？」
「姉ちゃんが入ったほうが良いよ」
「ふふっ遠慮なんてしなくても良いのよ。あなたがわくわくしているのなんてお見通しなんだから」
「でも、この間も病気になったから…ボク心配だよ」
「良いのよ、だって私は『お姉ちゃん』なんだから」
入った方が寿命が延びることを知っていたのにこれ以上姉ちゃんにメディキュボイドに入ることを勧めることが出来なかった。
それから一ヶ月後にメディキュボイドに入る日がやって来た。
姉ちゃんに手を握って貰っていたからメディキュボイドに入る時は少しも怖くなかった。
段々と体の感覚が無くなって行き、再び再接続される。閉じた目を開けるとそこは何の音もしないただの広い空間のみ。
説明で聞いていたけど実際に体験するとそこは人との繋がりが一切感じられない孤独な場所。ホロウィンドウを表示し、回線を外と繋ぐ。
「姉ちゃん、見えてる？」
「ちゃんと見えてるよ」
カメラ越しの姉ちゃんが少し寂しそうな、安心した顔で微笑んでいた。
それから2ヶ月が過ぎてママも亡くなった。
聞いたのはもちろんメディキュボイドの中で、タブレット越しに見

送ることしか出来なかった。いつお別れが来ても大丈夫な様に覚悟をしていたけど、やっぱり悲しくて回線が落ちた後に1人でずっと泣いていた。

ナーヴギアが開発されて姉ちゃんに会えるようになった。会えるようになったのは嬉しかったし、家族が二人だけになって不安だけど態度に出したら姉ちゃんに心配をかけると思って元気な自分を演じるようにした。不安も孤独も全部しまいこんで笑っているのはすっごく辛かったけど、思えるようになったことが1つ。

演技でも良いやって、それで笑顔でいられる時間が増えるんならそれで良いじゃないか…と。そう思えるようになってからは自分でも演技かわからなくなる位に自然と笑えるようになれた。

そんな中、一人の看護師さんがＳＡＯのβテストに当選し、ＳＡＯの世界についてたくさん話をしてくれた。今いるこの空間とは全く違う世界にワクワクが止まらず、看護師さんがボクの為にもう1つソフトを手に入れてくれたときは凄く嬉しかった。そこまで思い出して、大事なことを1つ思い出した。

ＳＡＯにダイブする直前、同じヴァーチャルエリアで姉ちゃんが言っていた言葉。

「戻ってきたらどんな感じだったか聞かせてね」

看護師さんが死んじゃって悲しいけど姉ちゃんが待っててくれている。このゲームをクリアして自分の冒険をい～っぱい話そう。そう思ったら元気わいてくる気がした。

まだ、ボクは戦えるし笑っていられる。絶対に姉ちゃんの元に帰るんだ！

ユウキが目を覚ましたのは夜が開けた頃だった。

「ここは…」

「ホルンカの村だよ」

「ボクをどうやって運んだの？」

「…聞かないほうが良いぞ」

「えー、気になる」

「それよりも大丈夫か？目を覚まさなかったから心配したぞ」

「うん、ボクはもう大丈夫だよ」
「そういえば剣を報酬で貰ったんだけど…これ使うか？」
「良いの？」
背中の剣を叩いて
「俺にはこいつが有るからな。それにこれだと重いって思ったんだろ？」
「ありがとう！大切に使うね！」
ユウキはその時、初めて顔に笑みを浮かべていた。
ユウキが貰った剣がアニールブレードを越える性能だったのだが、クエストの発生条件がはっきりしなかったためにアルゴに説明するのが大変だったのはまた別の話。

第1階層攻略戦

攻略会議

ＳＡＯの正式サービスが始まって1ヶ月が過ぎ、２０００人ものプレイヤーが死んだ。

それでも俺達はまだ1層のボス部屋にさえたどり着けていなかった。

そんな中、とあるパーティーが迷宮区でボス部屋のある階へと続く階段を見つけたことが公表された。第1回攻略会議が明日開催される。

「うわぁ…綺麗」

ホームに戻る途中、迷宮区に光る流れ星を最初に見つけたのはユウキだった。それは1人のプレイヤーが放つソードスキルの輝き。速すぎて剣先が見えない程の剣技の冴え。しかしその戦術はとても拙い物だった。

コボルドの振り回すポールアックスを鼻先3センチで3回避けてもう一度リニアーを放つ。確かに3回避ければコボルドは大きく体勢を崩すので反撃の機会が生まれるが、少しでも距離を間違えたら直撃してしまう。

しかもコボルドは最初のリニアーで瀕死だったはずでもう一度軽く突っつけば倒せるはずだった。

そのフェンサーが壁にもたれ掛かかって座る。フードを深く被っていて顔が見えず、ユウキもどんな人なのか気になっている様だ。

「ねぇキリト」

「ちょっと声をかけてみるか」

「うん！」

近付いて行くと向こうはこちらを一瞥し、再び顔を伏せた。話し掛ける言葉が見つからず

「最後の一撃はオーバーキル過ぎるよ」

最初にその一言は何なんだとかいきなり現れてアドバイスとか何

様だよと思ったが言葉を取り消すことは出来ない。
ユウキが慌ててフォローしようとしたが反応は思ってもいない物だった。
「オーバーキルだと何がいけないの？」
こちらを向いてから発されたその言葉で、俺は目の前のフェンサーが女性だということに初めて気が付いた。
「ソードスキルを放つときは集中力が要るだろ？そんな戦い方してたら消耗が大き過ぎる」
「そう、助言ありがとう」
フェンサーはそう言って立ち上がり、壁に沿って歩きだそうとした。
「待って！」
ユウキが呼び止めた。
「何まだなにか有るの？」
「もうすぐ日が暮れて危なくなるよ。一緒に町に戻らない？」
「町には戻らないから」
「戻らないって…回復アイテムの補充だったり食事もしないといけないだろ。こんなところじゃ寝ることも出来ないし」
「アイテムは攻撃を受けなければ必要ないしこの体に栄養は必要ないじゃない。それに寝る場所ならほら」
そうやって指で示したのは迷宮区に有る安全エリアだった。いくら安全エリアだと言ってもモンスターのうなり声や足音で寝られるような環境では無い。
「そんな事言わないで一緒に帰ろう？大分疲れてるように見えるよ」
「話がそれだけならもう行くわ」
そう言って立ち上がり剣を抜いて歩きだしたフェンサーは、三歩と歩かないうちに倒れてしまった。
「キリト…どうする？」
「外まで運ぶしか無いよな…」
「キリト寝袋なんか出してどうするのさ？」

「ユウキ、この人をこの中に入れてくれ」
「入れてどうするの？」
「引きずって運ぶ」
「ねぇキリト、もしかしてボクが気絶したときってさ」
「…知りたくなかっただろ」
「…うん」
迷宮区の外に出ると少し歩いた先に芝生の地面が有ったのでそこに寝かせる。
「寝袋から出しといてくれ」
「そうした方が良いね…」
それからフェンサーが起きたのは1時間程たってからだった。
「目を覚ましたよ！」
「…ここは？」
「俺達で外まで運ばせて貰った」
「余計なことを…」
そう言って迷宮区の方に歩きだしたフェンサーを呼び止めて
「君もゲームのクリアに向けて戦ってるんだろ？それなら明日に行われる1層の攻略会議には参加した方が良いんじゃないか？」
「…そういうのは早く言って」
その後最寄りの町まで一緒に行き、会議の時間と場所を告げて別れた。
攻略会議が行われる半円形の野外劇場に行くとそこには既に３０人くらいの人が集まっていた。
「うわぁ人がいっぱいいるよ」
「そうか？思ったより少ないと思うけど」
このままではレイドの上限である４８人には届いていないし、実際にβテストのときにはこの2倍以上は人がいたはずだ。
「多いよ、だってボス戦って一番危険なんでしょ？これだけの人が集まるなんて、ボク思っても無かったなぁ。これだけの人が皆のために戦うってやっぱりスゴいよ」
「そっか…そういう見方もあるんだな。でもなユウキ、ここにはそ

んな高尚な理由で来た訳じゃない奴も多いと思うぞ」
「じゃあどんな理由で集まったの？」
「恐怖さ」
「恐怖…？」
「俺みたいなゲーマーは死ぬのも怖いけど誰かが知らないところでゲームをクリアすることの方が怖いんだよ」
「ボクにはよくわかんないや」
「わからないほうが良いぞ…多分」
半円状になっている観客席の後ろの方に並んで座ると青い髪のイケメンな片手剣士が舞台に飛び乗った。
髪を青く染めるには染料が必要でこれがなかなかドロップしない舞台の高さは腰くらいまで有るから武器や防具を着けたまま飛び乗るにはかなりの筋力値が必要なはずだ。
「はーいそれじゃあそろそろ始めさせてもらいまーす。今日は俺の呼び掛けに集まってくれてありがとう。俺はディアベル。職業は気持ち的に、ナイトやってます！」
ＳＡＯにジョブシステムなんてねえだろとヤジが飛び、会場が笑いに包まれた。一連のパフォーマンスであの男が場の空気を掴んだのが感じ取れた。
ディアベルが場を静めて話し始める。
「今日、俺達のパーティーがあの塔の最上階でボスの部屋を発見した。俺達はボスを倒し第２層に到達して、このデスゲームもいつかきっとクリア出来るってことを、始まりの街で待っている皆に伝えなくちゃぁならない！それが、今この場所にいる俺達の義務なんだ！そうだろう、皆！」
集まったプレイヤーが拍手や口笛でディアベルを讃える。
「なんだか頼りになりそうだね」
「きっとああいう奴が攻略組を纏めていくんだろうな」
「それじゃあ６人組のパーティーを組んでもらいます」
その一言で慌てて周りを見渡すが大体が既に決まっていたようだ。
「…出遅れた」

「皆知り合いだったみたいだししょうがないんじゃないかなぁ…でもあそこにほら、昨日のお姉さんが居るよ」
そう言われて広場を見渡してみると昨日のフェンサーが端っこに座っているのを見つけた。
ユウキが早速声をかける。
「お姉さんもパーティー決まってないの？」
「周りが皆お仲間同士みたいだったから遠慮しただけ」
「ソロプレイヤーか…」
「じゃあボク達と組もうよ」
フェンサーが頷いたのでユウキがパーティー申請を送る。
Ａｓｕｎａ…アスナかな？
そんな事を考えていると
「パーティーはそろそろ組み終わったかな？」
「ちょー待ってんか！」
そこでトゲトゲした髪型の男が階段から舞台に飛び乗った。
「ワイはキバオウってもんや。ボスに挑む前に１つ言わせてもらいたいことがある。こんなかに今まで死んでいった２０００人に詫び入れなあかん奴がおるはずや！」
「それは元βテスターのことで良いのかな？」
「そや！βあがりどもはこんクソゲーが始まったその日にビギナーを見捨てて消えよった。奴等はボロい狩場やクエストを独占してポンポン強なって後は知らんぷりや。そいつらに溜め込んだコルやアイテムを吐き出して土下座してもらわな、パーティーメンバーとして命を預けられんし預かれん！」
会場が一気にざわめきだす。
その言葉を聞いて始まりの街に置いてきたクラインのことを思い出した。
うつむいたのを感じたのかユウキが
「キリトがボクをここまで連れてきてくれたんだよ。あのトゲトゲ頭の言う事なんて気にする必要無いんじゃないかな」
「でも、俺はクラインを…」

「出来なかった事を悔やんでもしょうがないって。キリトは堂々としてれば良いんだよ。俺は違うぞ…ってね」
「そっか…ありがとな」
少しざわめきが小さくなった頃、1人のめちゃくちゃいかついスキンヘッドの黒人プレイヤーが挙手をした
「1つ発言良いか」
そう言って舞台に上がる。
「俺の名前はエギルだ。キバオウさん、あんたの言いたい事はつまり、テスターが面倒を見なかったためにビギナーが大勢死んだ。テスターはその責任を取って謝罪、賠償しろという事だな」
「せや」
びびっているのかキバオウの声に先ほどまでの覇気が無くなっている。
「キバオウさん、あんたも街の道具屋で無料のガイドブックを貰っただろ」
そうやって掲げて見せたのは俺が５００コルで買った鼠印のガイドブックだった。
「これを配布していたのは元βテスター達だ。情報は誰でも得られたのに大勢が死んだ。今日はその事についての話し合いをするんだと思っていたんだがな」
「フンッ」
キバオウが客席に戻り、続いてエギルも元の場所に戻る。
「じゃあ会議を再開させてもらいます。先程、ガイドブックの最新版が配布された。これによるとボスの名前はイルファング・ザ・コボルドロード。武器は斧とバックラーを使い、体力が少なくなったら曲刀カテゴリノタルワールに持ち替え、取り巻きのルイン・コボルド・センチネルは最初に3体、それからは体力ゲージが減る毎に3体の、計１２体が出てくるらしい。よってパーティーをアタッカー、タンク、モブ狩りの3つに分けたいと思う」
そうして俺達のパーティーは人数が少ないことによりE隊でセンチネル担当になった。

「最後に報酬についてだけど、コルは全員で自動均等割り、アイテムはドロップした人のものとする。異論はないかな？…それじゃあこれで会議を終わります。解散！」

アスナは一人でさっさとフィールドに行ってしまったので、広場を後にした俺たちは明日に備えて軽く連携の確認をすることにした。

ボス戦

フィールドで最後の連携を確認して街に戻るとフードを深く被った人が脇道のベンチに腰かけているのを見つけた。
「ねぇキリト、あの人ってアスナかな？」
「そうみたいだな、声をかけてみるか」
側まで行って声を掛ける
「隣座っても良いかな？」
黙っているので勝手に座るとアスナが間を開けて座り直す。ユウキが間に座り、アスナが何をしていたのか覗いて見る。彼女は1コルで買える黒パンをかじっていた。
「それ、うまいよな」
そう言いながら黒パンを取り出す。
「毎日食べてるけど全然飽きないよね！」
「あなた達本気で言ってるの？」
「もちろんこのままじゃないよ～。これに一工夫するとスッゴく美味しいんだよ」
そう言ってストレージから小型の瓶を出す。
「おねーさんも使ってみなよ」
ユウキが瓶を差し出すとアスナがおそるおそる瓶に触れ、ひかりだした指をパンにつける。するとパンの上に出て来たのは
「…クリーム？」
俺とユウキもクリームをパンに塗ってをかじる。ユウキが満面の笑みを浮かべた。
「やっぱり旨いな、これ」
「美味しいよね！」
アスナもそれを見て一口かじった。フェンサーさんはクリームパンがよっぽどお気に召したらしくそのままガツガツと食べ、3秒後には手からパンが消えていた。
「1個前の街で受けられる逆襲の雌牛っていうクエストがあってそれの報酬なんだ。やるんだったらコツを教えるけど」

「いい、私は美味しいものを食べるためにここまで来た訳じゃないから」
「じゃあ何の為に…」
「私が、私でいるため。最初の街でゆっくり腐っていく位なら最後の瞬間まで自分のままでいたい」
彼女は両手を強く握りしめて
「モンスターに負けて死んだとしてもこのゲームに、この世界には負けたくない」
「死んじゃ駄目だよ。向こうで待ってる人だって居るんでしょ」
「…気を付けるわ、クリームありがとう」
そう言ってアスナが立ち上がり、明日に備えて早く寝ることにした。
翌朝1層のボス攻略隊が出発し、迷宮区に向かう道の途中でふと連携について確認していなかった事を思い出す。
「なぁ、スイッチについてなんだけど…」
「スイッチって何？」
「何か聞いたことあるな…これ」
「ねぇもしかしてずっと1人で攻略してたの？」
「ええ」
ため息をつきたくなる衝動を抑える。
「復習がてら教えてやってくれ」
若干不安になりながら生き生きとアスナに教えているユウキを眺めていた。
迷宮区に入ってからもディアベルの指揮の下、危なげ無くボス部屋の前までたどり着いた。
「俺から言う事はただ1つだ。勝とうぜ！」
ディアベルの宣言に全員で小さく雄叫びあげる。
ボス部屋の扉がゆっくりと開き、手前から明かりが灯り始める。
レイドメンバーが全員入りきったところで奥の玉座からボスの巨体が飛び上がり、30メートル程手前で着地し、咆哮する。同時に三匹のセンチネルがポップし、ボスの姿が明かりに照らされてはっきり

と見えるようになった。３メートルはある巨体で赤く太っており、涎を垂らしながらその犬のような顔でこちらを睨みつけている。
「総員、突撃！」
ディアベルの掛け声で戦いの火蓋が切って落とされた。
センチネルの振り下ろすポールアックスをソードスキルで跳ね上げる。
「スイッチ！」
「ぜやぁぁぁ！」
俺の掛け声に合わせてユウキが飛び込んできてホリゾンタルを喉にある鎧の隙間に当てる。その一撃でセンチネルは体をポリゴンに変えた。
「まずは一匹！」
「グッジョブ！ソードスキルが大分上達したな。次の奴行くぞ！」
センチネルを足止めしていたアスナと入れ替わり、再びそのポールアックスを跳ね上げる。
「スイッチ！」
今度はアスナが飛び込み、リニアーを放つとセンチネルの体力が一気に削れてレッドゾーンに入る。硬直が溶けた瞬間に今度はソードスキルではなくもう一度つついて止めを指した。
「二匹目ね」
「グッジョブ！」
その後もポップするセンチネルを倒しているとボスの体力がレッドゾーンに突入した。
「皆下がれ、俺が出る！」
ボスの動きが止まったところでディアベルが前に出た。
何故だ？ここは皆で囲むのがセオリーじゃないのか？
ふと視線をずらしてボスの姿を見ると猛烈な違和感に襲われる。βテストの時と何かが違う。何だ？何が違ってるんだ？
その答えはボスが剣を抜いた時にわかった。βテストで見たときと違い剣に反りが無い。あれはタルワールじゃない！野太刀！
ボスが体をたわめ、１０層で俺を苦しめたあのスキルを放とうとす

る。
「全力で後ろに飛べー！」
ボスが高く飛び上がり、着地と同時に周囲を薙ぎ払う。刀全範囲ソードスキル、旋車だ。
ボスを囲んでいたタンク隊が全員吹き飛ばされスタン状態になってしまった。
誰もすぐには動けない中、狙われたのは正面にいたディアベルだった。
下から掬い上げる様に切る刀単発ソードスキル、浮舟をもろにくらったディアベルの体が宙に浮く。
「うわぁーーー！」
あまりディアベルの体力は減っていないが、このソードスキルにはコンボがある。
ボスが空中に打ち上げられたディアベルに向かってソードスキルを発動する。
ディアベルもそれを見て空中でソードスキルを発動させて迎撃しようとしていたが、体勢が上手く制御出来ずソードスキルが不発に終わってしまう。
そこに刀3連撃ソードスキル、浮舟が激しい音とエフェクトを散らしてヒットし、俺達の戦っている近くに飛ばされた。
最後のセンチネルが倒されたのを確認し、ディアベルに駆け寄る。
「何であんなことを…」
ポーチからポーションを出し、頭を抱きかかえて飲ませようとするが手を押さえられた。
「お前もβテスターならわかるだろ」
「ラストアタックボーナスのレアアイテム狙いか」
ディアベルの体が徐々に薄青く出し…
「頼む、キリトさん。ボスを倒…」
パァンという音と共にディアベルの体がポリゴンへと変わった。
舞い上がっていくポリゴン片を見つめながら彼と自分の違いについて思いを馳せる。俺は自分が生き残る為にクラインを見捨てたが

ディアベルは違った。あいつは皆を纏めて戦った。最後に皆を出し抜こうとしたとはいえ、俺には出来なかった事をあいつはやったんだ。
顔を上げるとリーダーがやられて浮き足立っている戦場が見える。
ディアベルの最後の言葉は撤退でも逃げろでもなくボスを倒せだった。
とにかく前線を立て直さないと。一番近い舞台のリーダーは…キバオウか。キバオウに近づき、声をかける。
「部隊長であるお前が動揺してたらパーティーメンバーが死ぬぞ。雑魚コボがまだ湧くかも、いやきっと湧く。そいつらをボスに近づけないようにしてくれ」
「じぶんはどうするんや」
「ボスを倒しに行くのさ」
そう言ってボスと正面から向かい合うと、ユウキとアスナが横に並んだ。
「ボクも戦うよ」
「私も」
「あぁ、頼んだ」
そう言ってボスに向かって駆け出す。
「手順はセンチネルと同じだ！」
「了解！」
「わかった」
ボスの振り下ろす刀を１０層での記憶を必死に思いだしながら弾き返していく。
１人で前衛を続けるギリギリの状態。そんな綱渡りが長く続くわけもなく、崩壊するまで２分とかからなかった。
ランダムに軌道を上か下からに変えるフェイントのソードスキル、弦月。これを弾き返せずにくらってしまい、大きく吹き飛ばされる。さらに運の悪いことに弾き飛ばされた先にはアスナがおり、二人同時に倒れ込んでしまった。
ボスの刀が光を纏う。ただ見ていることしかできず剣が振り下ろ

されるのを待っていると、ボスとの間に駆け込んでくる1つの影が。
「ぜやぁぁぁぁ！」
火花が散り、ボスの体が大きく仰け反る。迫る野太刀を弾き返したのは他でもないユウキだった。
「ボクだってやればできるんだからね！」
「嬢ちゃん達が気合い見せてんだ！俺達がびびってててどうする！」
野太い声が聞こえて来たかと思うとエギルが部隊を引き連れてこっちに向かっているのが見えた。
「回復するまで俺達が支えるぜ。いつまでもあんたらにタンクやらせてたら俺らの面目が立たねぇってもんだ」
「頼んだ」

ビーター

俺の指示でエギル達のパーティーが盾や武器でガードしてダメージを極力抑えて戦い、他のパーティーが回復するのを待つ。たまにユウキが攻撃しているがダメージは微々たるものだ。

なかなか復帰してこないところを見るときっとディアベルの死がかなりの衝撃を与えたのだろう。

何十回と繰り返しボスの攻撃を受けさせていると、集中が切れた1人のプレイヤーが足をとられてよろめいてしまう。転倒する前に立て直すことができたものの足がついたのはボスの真後ろ。

ボスが囲まれた事を認識し、前衛のパーティーを一撃で総崩れにした旋車のモーションに入る。次にあれをくらったらレイドが壊滅するだろう。

残りのＨＰは7割程度で前回には程遠いが、やるしかない！

走りながら構えをとると剣が緑色に光り出す。

跳んだボスを追い、片手剣単発突進ソードスキル、ソニックリープで空中へと飛び出す。

「届けぇぇぇ！」

ボスの腹にクリティカルヒットが入り、ソードスキルがキャンセルされた。

転がって受け身をとり転倒状態にならないようにし、周りを確認する。まだレイドごと立て直すのは無理そうだ。けれどエギル達のパーティーにはもう負担をかけられないだろう。

ボスの体力は…数ドットしか残っていない。これなら！

「ユウキ！アスナ！最後の一撃を一緒に頼む！」

「オッケー！」

「わかった」

「行くぞ！」

ユウキとアスナが後ろに控えたのを感じるとボスに向かって走りだす。

ボスもこちらを認識し、刀を降り下ろして来るがソードスキルで弾

き返す。硬直しているうちに二人が前に飛び出した。
ユウキが走り抜けながらホリゾンタルで切り裂き、アスナがリニアーでボスを仰け反らせる。
仰け反ったボスに向かって止めを指すためにソードスキルを発動する。
剣はボスの体を右上から切り裂き、左下へと抜けた。ボスの体力は…後1ドット残して止まった。ダメージが足りないと悟ったのかボスの顔が笑ったような気がする。
俺はその笑みに対して、獰猛な笑みを返す。実はこのソードスキルはここで終わりじゃない。剣が慣性を無視して跳ね上がる。片手剣2連撃ソードスキル、バーチカルアーク。
「うおおおおおお！」
咆哮をあげてボスの体を左下から右上へと切り裂く。衝撃で空中に浮かされたボスの体が段々と薄くなり、バァンと音をたててポリゴン片へと変わる。
昭明が消え、ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓという文字がボス部屋の中央に浮かんだが動けないでいた。
手が触れたかと思うと上げっぱなしになっていた腕が下げられる。ふと触れられた方を見てみるとユウキの姿がある。
「もう終わったよ、キリト」
その一言でボスが倒された事が現実味を帯びる。
あちこちから歓声が上がり、中にはこちらを讃える様なものもあった。その人混みの中からエギルが現れ
「ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ、この勝利はあんたのものだ」
と称賛してくれた。アスナもフードを深く被っていて分かりにくいが口許が緩んでいる様に見える。
そんな先勝ムードを切り裂く、1つの声が上がる。
「何で、何でディアベルさんを見殺しにしたんだ！」
困惑して何も言えない。
「だってそうだろ！あいつは初めて見るはずのボスの攻撃を知っていた！それをディアベルさんに伝えてれば死なずに済んだんだ！」

続けざまに別の人がキンキン声で叫ぶ。
「俺、知ってる！こいつβテスターだ！ボスの攻撃も知ってて黙ってたんだ！」
その一言で部屋中に不穏な空気が流れた。
「こいつがβテスターなら攻略本と同じ事しか知らないはずだろ」
エギルが反論するが、男は気にも止め無い。
「鼠もグルだ！βテスターが本当の事を教えるなんてこと有るわけ無かったんだ！他にも居るんだろ！出てこいよ！」
「おい、あんたなぁ」
ディアベルが元βテスターでラストアタックボーナスをゲットしようとしたから死んだと説明するのは簡単だ。しかし、それではディアベルが望んだ結末にはならないだろう。出しっぱなしになっていたウィンドウに写されたアイテムを見つめ、あることを思い付く。
もしかしたらもうギルドやパーティーに入れてもらえなくなるかもしれない。もしそうなったら生存率が一気に下がってしまうだろう。だけど俺がやるしかない。
「ふはははは、はははは」
全員の視線がこちらを向いたのを感じる。怖がるな、堂々と胸を張りゆっくりと歩け。
そうして最初に叫んだ奴の前までくる。
こっちを睨み付てくるがここで怯んだら駄目だ。悟られないように大きくゆっくりと息を吸い、小馬鹿にしている様な表情を作る。
「βテスター？あんな低レベルな奴らと一緒にしないで欲しいな」
目の前の奴がポカンとした顔をした。ここで一気にたたみかける。
「βテストの連中に何人ゲーマーがいたと思ってる？実際殆どはレベリングのやり方も知らない初心者ばっかりだったよ。お前らの方がまだましなくらいさ。そんな連中の中で俺は誰も到達したことの無い層まで登った。ボスの攻撃を知っていたのもそこで見たからだ。それ以外にも色々知ってるぜ、それこそ情報屋なんて比べ物にならないくらいな」
「何だよ！そんなんβテスターじゃねぇチーターだ！」

その一言を皮切りにどんどん罵声を浴びせられる。気にしたら敗けだ。不遜な表情を崩さないように聞いているとあるプレイヤーがβのチーター、つまりビーターだ!と叫んだのが聞こえた。
「ビーターか、良いなその呼び名。」
ここでラストアタックボーナスであるコートオブミッドナイトを羽織る。
見るからにレアアイテムだと分かったのだろう周りが息を飲むのを感じる。
「そうだ、俺はビーターだ。これからはたかがテスターごときと一緒にしないでくれ」
なんとか笑い声をあげながら全員の前を通りすぎる。
次の層に続く階段の前で振り返り、最後の煽りを入れる。
「次の層の転移門は俺がアクティベートしておいてやる。初見のモンスターに殺される覚悟が有る奴だけついてこい」
階段を昇り、次の層に続く扉を開けると正面にテラスが有り、草原が眼下に見えた。
少しの間なら眺めていてもバチは当たらないだろう。ぼーっとしていると階段から足音が聞こえて来た。
「うわぁ、きれいな景色だね」
振り返って顔を見たらさっきの決意が揺らぐ気がして景色を眺めながら返事をする。
「ついてくるなって言ったと思うんだけどな」
「殺される覚悟が有るなら良いって言ってたよ」
「…そうだったな」
視界の端でユウキが隣で景色を眺め始めたのがわかった。
「ねぇキリト、伝言が有るんだ」
「誰からだ?」
「キバオウさんがね、今回は助けてもろたけど、じぶんのやり方は認められん。わいはわいのやり方でクリアを目指す。ってさ」
真似をしているのだろうが正直あんまり似ていなくて吹き出してしまう。

「もう、何笑ってるのさ。後エギルさんが次のボス戦もよろしくなって」
決意が鈍る前に動くべきだろう。
「伝言ありがとな。じゃあそろそろ俺は行くよ」
階段の方へ歩きだそうとした時、
「待って！」
「何だ？」
呼び止められたことで少し胸が弾む。一緒に来てくれるんじゃないかと期待している自分に気が付いた。
「最後にアスナから」
そんな訳ないか…。どうせ一緒には行かないって断らなきゃいけないしな。
そうわかっているにもかかわらず悲しい気持ちはなかなか収まらない。どうやらユウキと駆け回った1ヶ月が自分の思っていたよりも楽しかった様だ。

「ユウキをしっかりと守りなよって」
後ろを振り返るとこっちを見つめ、いたずらが成功した子供のように笑っているユウキと目が合った。
「ボクも行くよ」
「…っ駄目だ、ビーターだと思われるぞ」
「実はね、本当はここで別れるつもりだったんだよ」
その言葉に少し傷付く。
「だったら何で…」
「ああ、違うんだよ。キリトと一緒に居たのが嫌だったとかじゃなくて…ボクと一緒に居るといつか後悔するから。…ボクも、キリトも」
そう言ってうつむいた顔はとても悲しげだった。
「それは…「でもね」」
どういう意味だと続けようとしたが遮られる。

「始まりの街で一緒に来た人が死んじゃったとき、ボクを1人にしないでここまで連れてきてくれたのに…キリトが孤立しちゃう原因にボクが含まれてるから」
「ユウキは何も悪くないだろ」
「ボクはあの時キリトが情報を独占なんかしてないって主張出来た筈なんだ。攻略会議の時だって…。でも、怖くて出来なかった」
「しょうがないさ」
「しょうがなくなんて無いよ。キリトが必死に怖いのを隠してみんなの前であんな演技をしたのに、ボクは…」
「演技じゃないさ。それに怖がってなんて…」
「キリトの手、震えてたよ」
「…!ばれてたか」
「今度はボクがキリトを1人にしないよ」
「無理について来なくても良いんだぞ。自慢じゃないがソロプレイには慣れてるんでね」
「最初の日にやられかけてたじゃん」
「そ、それは意図的にＰＫされかけたせいで…」
「嫌な話だけどもう二度とされないなんて保障は無いんだよ。キリトがいつのまにか死んじゃってたら自分が許せないと思う。…それに、キリトと冒険したのはやっぱり楽しかったから。ボクが一緒に行きたいんだ」
そこまで言われたらもう断れる訳が無かった。
「ありがとな。…これからもよろしく」
パーティー申請の画面を出すとユウキがにっこりと笑う。
「こっちこそ!」
自分のでない体力ゲージが視界の左上に表示された。
これからもきっと楽しくなる予感がした。

赤鼻のトナカイ
葛藤

（キリト、遅いけどどうしたんだろ？）
下層に用事があったらしく珍しく別々に行動していたのだが、一向にキリトが帰って来ない。そんなとき、一通のメッセージが届いた。
『話したいことがあるから降りてきてくれないか？』
（今日何かあったのかな？もしかしてまた新しいクエスト見つけたとか？）
キリトのクエストやイベントをかぎつける能力はとても強く、今までいろんなクエストに挑戦してはアルゴに報告するという流れになっていた。
そんなことを考えながら部屋を出て階段を降り、一階の食堂につく。少し見渡すとキリトが二人掛けのテーブルに座ってこっちに手を挙げていた。テーブルまで歩いていき、向かい合う形で座る。
「ユウキはいつもの飲み物でいいか？」
「うん、それにするけど…それよりキリト、話したいことって何？」
少し気まずそうにキリとが話し始める。
「ああ、それなんだけどな…」
そこからの話は下層の迷宮区で危ないパーティーを助けたら感謝され、夕飯を一緒に取ることになった。その時にレベルを聞かれたので怖がられないように嘘をついたらそのパーティのギルドに入らないか誘われたというものだった。
「良いことをしたのに何でそんなに気まずそうにしてるの？」
キリトの話と態度が一致してない。だいたい何が言いたいのかはわかるけど続きを促す。
「えーっと、しばらくの間だけで良いんだけど、その月夜の黒猫団っていうギルドに入っても良いかな？」
「良いけど、どうしたのキリト。ギルド嫌ってなかったっけ？」
「良いのか？まぁ俺はギルドに入ってコルやアイテムでトラブルに

なるのが嫌なだけでギルドが嫌いなわけじゃないんだ。その辺はしっかりしてそうだったし…それに、1人気になるプレイヤーが居てな。ユウキが良ければ一緒に…」
反対されると思っていたらしくかなり驚いていたけど、キリトに仲間ができる1つの機会をボクが潰せるはずがない。それに、これはボクにとってもいい機会になるかもしれない。
なので誘いを断る。
「うーんさすがに無理かな。レベルのこともうまく隠せないと思うし」
「無理なことといって悪かったな」
「悪いなんてことないよ、ボクのことを誘ってくれたわけだし。それにギルドに入ってサポートしてあげればキリトのビーターっていう悪評もきっとなくなるんじゃないかな」
「そうだといいけどな。あと、攻略ペースは落としたくないから夜にレベリングするつもりなんだけど…」
おずおずと言い出すその姿に、はっきり言ってくれれば良いのにと思って苦笑する。
「しょうがないなぁ。良いよ、付き合ってあげる。その代わりに前衛よろしくね」
「うっ、わかりました…」
そうは言いつつ、口元は少し緩んでいた。きっと今日の提案がすべて通ったことに安堵しているのだろう。
「冗談だよ。代わりにご飯、奢ってね」
「お手柔らかにお願いします…」
キリトと部屋の入口で別れた後、自分の部屋のベットに飛び込む。寝っ転がったまま装備を解除して寝間着に着替えた。
「誰か臨時でパーティーメンバーを募集してたら良いんだけど…」
（よし、キリトがギルドの中に居場所を見つけるまで。それまでに心の準備をしよう）
キリトと別れる為の…。

それから、夜にレベリングで会うたびにキリトは楽しそうにギルドの話をしていた。キリトが他の場所に居場所を見つけるのは良いことなのに、それを聞くたびに心がズキズキと痛む。
（これは…そう、キリトと別れなきゃいけないのがつらいからだと思うけど。でも、それだけじゃないような気がする。何なんだろう、この気持ちは…）
ある日、いつものようにキリトを待っているとメッセージが届いた。
『わるい、今日はいけない。』
ただ用件のみを伝える、キリトには珍しい文章。きっとギルド関係で何かがあったのだろう。あとで教えてくれるかと思ってその時は宿に帰ることにした。
翌日、キリトに呼び出されて昼にフィールドへと出た。
「昨日はどうしたの？ギルドで何かあったみたいだけど」
「そのことに関係してくるんだけど、狩りの時間を遅らせることはできないか？」
今のままでも十分に睡眠がとれていないはずなのにさらに睡眠時間を削るその発言に疑問を抱いた。
「どうして？」
「ギルドメンバーの個人的な話に関わることだから…ごめん」
「話せるようになったら教えてよね。時間、遅くなっても大丈夫だよ」
「助かる」
そのあと少し狩りをしつつ、時間を決めて解散した。
ある日、夜にいつもの狩場についたら先にキリトが来ていた。
「悪いな、毎日つき合わせちゃって」
「全然大丈夫だよ。それよりキリト大丈夫？ちゃんと寝れてる？」
キリトはあんまり練れていないのだろう。少し疲れたような表情をしている。

「昔からゲームでの徹夜には慣れてるからな。それに少しは寝てるから大丈夫さ」
疲れが外見からじゃわからないこの世界では、念を押しておいた方が良いだろう。
「ほんとにわかってるのかなぁ～。集中力が切れたらすぐに死んじゃうんだからちゃんと休んでよね」
「わかったわかった。そういえばもうすぐギルドハウスを買えそうなんだよ」
「はぐらかされた気がするけど…まあいいや。じゃあギルドハウスが出来たらそこを拠点にするの？」
「そのことについて話しに来たんだ。その、ユウキが良いなら、だけど…」
「良いんじゃないかな。キリトと仲良くしてくれる人がいてボクは嬉しいよ」
「いや、普通に仲良い奴いるからな…。それと、ありがとう」
（そっか、キリトには居場所が出来たんだ。じゃあボクはもう、役目を果たせたのかな？ギルドホームが出来たら、その時はキリトとお別れしよう。キリトが後悔しないように…）

今朝、キリトからメッセージで今日ギルドホームを買うことを知らされた。
（フレンドを解除すればキリトがボクを見つけるのは難しくなるだろうけど…。急にフレンドを解除したら、キリト心配するかな？）
メッセージの内容ををどうしようかと悩み続けていたら、夕方になってしまった。
ようやく決まった文章をキリトに送ろうとフレンド欄を開くと、そこにあるはずの人の名前が無かった。
（キリトの名前が…無い!!）

不信

虚空に自ら身を投げ出した黒猫団のリーダー、ケイタが最後に発した言葉。

「ビーターのお前が、俺達に関わる資格なんて無かったんだ！」

その言葉が頭の中をこだまする。そして、モンスターに囲まれたダッカー、ササマル、テツオの3人が悲鳴をあげながら体をポリゴン片へと変えていく。最後にサチが右手をこちらに伸ばしながら痛いほどの信頼を瞳に浮かべ、口を動かして何かを呟くとその体をポリゴン片に変える…

そこでハッと目を覚ました。ここ最近眠ると必ずこの夢を見る。

これは大体半年前のこと。ギルドホームを買いにケイタが上の層へと転移した後、残った5人で家具代を稼ごうとなった。そして入ったのがいつもの狩場よりも1つ上の層の迷宮区。マージンは十分とっていたので狩りは順調だったのだが、そこはトラップが多く攻略組にも多数の犠牲が出た場所。

昔、ユウキと隅々まで探索した筈のダンジョンで見たことの無い隠し扉を発見し、その扉を開けると中には宝箱が。俺の静止の言葉も届かずダッカーが開けるとアラームが鳴りだした。それと同時に扉が閉まり、モンスターが大量にポップする。いわゆるアラームトラップというものだった。

さらに運の悪いことにそこはトラップの中でも最悪の部類に入るクリスタル無効空間。今まで隠していた上位ソードスキルを使ってモンスターを倒していくが、アラームを止めることが出来ずに更に大量のモンスターをポップさせてしまう。

モンスターの波に飲まれ、1人また1人と死んでいく黒猫団のメンバー。トラップ部屋を出たとき、俺の体力は半分を少し切っただけだった。

その後いつもの宿屋で鍵を持ってメンバーを待っていたケイタに事情を話すと彼は一言俺を罵った後、外周へと走っていきその身を虚空に投げ出したのだった。

俺にはその結末を回避することが出来た筈だった。たった一言、自分のレベルを言うだけで。パワーレベリングを行うだけでなく情報を分け与えることで。そもそも関わらないことで。

きっと気持ち良かっただけなのだろう。自分より弱いプレイヤーに頼りにされ、守っているという状況が。そんな俺の自己満足に、黒猫団は殺されたのだ。

プレイヤーを蘇生することが出来る。それを知ったのは約２週間前のこと。クリスマスのイブの２４時に背教者ニコラスというモンスターが現れ、プレイヤーを蘇生できるアイテムをドロップする。という情報を各層のＮＰＣがこぞって口にし始めたのだ。

この情報を知り、今日まで狩場を巡って笑い者になりながらも狂ったようにレベルを上げた。死んだ者の意識は保留エリアに移動させられ、最終的にゲームがどうなるかを待っている。そんな頼りない仮説にすがり付いて。

そうであればサチを蘇生し、最後の言葉を聞き出せる。それがどんな罵倒でも受け止めなければいけない。そして、今度は「君は死なない」ではなく「君は俺が守る」と言うのだ。

だって、そのために強くなったのだから。

そしていつものように夜に狩場で籠っていると近くにプレイヤーが現れた。

戦闘を開始したらしく雄叫びが聞こえてくる。

「ぜやぁ！おりゃ！このぉ！まだまだ！」

その声を聞いて俺は咄嗟に回れ右して駆け出そうとしたのだがその肩を誰かに捕まれる。

「おいおいそれはあんまりなんじゃねぇか、キリトよ」

「…ほっといてくれ」

振り向くと悪趣味なバンダナを着けたクラインが６～７人の仲間と一緒に立っていた。

「ちょっと話をしようぜ、キリト。お前らは先にやっててくれ。良いか、円陣を崩さずにサポートを意識するんだぞ。危なくなったら遠慮なく呼べ」

うす、おう、と返事が聞こえ、足音が段々と遠ざかっていった。
するとクラインは日本刀を外して地面に置くとどかっと俺の前に座り込んだ。
「ユウキちゃんはどうするつもりなんだよ。お前ェが消えてからずっとあんな感じでレベリングしてんだぞ。オレは正直痛々しくて見てらんねぇよ」
「関係無いだろ」
「関係ならあんだろうが。ユウキちゃんが黒猫団に入ることを薦めたんだろ。それでキリトが傷ついたのはボクのせいだって自分を責めてたんだぜ。お前ェが一言何か言ってやればそれだけで救われるんじゃねぇのか」
「あいつにかける言葉なんて無いさ。お前も無理して演技なんかしなくて良いぜ。あいつに頼まれたんだろ、ニコラスを倒す協力を取り付けることを」
「な、何を…」
「知ってるんだぜ、アルゴから俺がクリスマスイベの情報を買ったっていう情報ををお前らが買ったってことを」
「確かに俺は昔死んだダチがいてそいつの為にクリイベを攻略したいと思ってるさ。けどなぁ、ユウキちゃんは純粋にお前のことを心配してんだよ」
「そんな訳ないだろ。だって俺はもうパーティーのメンバーでも何でもない赤の他人だ。それにお前も見ただろ、あいつの連れが死ぬ所を」
クラインが数秒絶句する。その間に立ち上がって狩場を離れる準備をする。
「話は終わりだ」
後ろを向いて歩きだした俺にクラインの声が届いた。
「見損なったぞ、キリト！そんな事で命を落としてもお前ェには蘇生アイテムは使わねぇかんな！」
クリスマスイブの２３時３０分頃、俺はイベントが起こるエリアより１つ前のエリアに着いた。サチを蘇生させる為の戦いで死ぬなら、

それは俺に唯一許された死に方なのではないか。もし生きてボスを倒せれば蘇生アイテムは現実のものになるだろう。
　そんな事を考えながら最後の１０メートルを歩きだそうとすると背後で複数のプレイヤーが転移する音が聞こえてきた。思わず飛び退き、剣に手をかける。現れた集団はおよそ１０人。先頭に立つのは、クラインだった。
　赤の鎧で統一された男の集団から１人の黒ずくめのプレイヤーが前に出てきた。
「久しぶりだね、キリト」
「…つけてたのか」
「クラインさんの所に頼んで追跡をね」
「なぜ俺なんだ」
「ボクはキリトが１人でボスに挑んで死んじゃわないか心配だったから…。ねぇキリト、ソロ攻略は止めようよ。今ならクラインさんのギルド風林火山のメンバーもいるから絶対勝てるよ」
「俺だってお前を死なせたくねぇんだ。蘇生アイテムはドロップした奴の物で恨みっこ無し。それで良いじゃねえか」
「それじゃあ、意味無いんだよ…俺１人でやんなきゃ…」
　全員切るか？そんな思考が頭をよぎる。右手を震わせて剣を抜くか抜かないかのギリギリのせめぎあいを続けている俺を、クラインとユウキは悲しそうな目で見ていた。
　第３の侵入者が現れたのはまさにこの瞬間だった。しかも３０人は居るだろう。
「お前らもつけられたみたいだな」
「青竜連合かよ。あいつらレアアイテムのためならオレンジにもなるのも辞さねぇらしい」
「キリト　、行って！ここはボクが食い止めるから！クラインさんも行ってください！お願いします！」
「１人で残せるかってんだよ。行けっ、キリト！此所はオレらが食い止める！良いか、ユウキちゃんの前で死んだら絶対に許さねぇぞ！」

「…」
俺は礼の言葉を一言も言わずに、クライン達とユウキに背を向けて最後の転移を行った。
上空に有ったソリから飛び降り、雪を蹴散らして着地したそのモンスターは背丈がオレの3倍、人の形をしているが腕が異常に長く、前屈みになっているのもあって地面に擦りそうだ。せり出した額の下で赤い瞳が輝き、ネジくれた灰色のあごひげを腹部まで伸ばしている。
そんな怪物が赤と白の衣装に身を包み、右手に斧、左手に頭陀袋ぶら下げているのがなんともグロテスクだった。
そんなボスの意匠はもうどうでも良かった。イベントの口上を述べるのかニコラスが口髭を動かそうとする。
「うるせぇよ」
そう呟いて剣を抜き、一気に駆け出した。

決闘

キリトが転移したのを見届けて青竜連合の方へ向き直る。キリトが出てくるまで時間を稼ぐには…

「ここを通りたかったらボクを倒してから…って言いたいけどそっちの方が人数多いからなぁ。代表者のデュエルで決着をつけようよ」

すると青竜連合のリーダーらしき人物が前に出て発言する。

「あんたのレベルの方が高いのは知ってんだよ。最近人気の狩場に1人でいるところをよく見かけるからな。え～っと風林火山だっけ？そっちのギルマスとならやってても良いんだがな」

「おぉー良いさ、やってやろうじゃねぇか。オレ様を選んだこと、後悔させてやらぁ！」

「それじゃあクラインさんの迷惑になっちゃうから、ボクが全員を相手にするよ。1人でもボクに勝てたらここを通してあげる。ルールは半減決着、ボクはアイテムの使用を一切しない。これでどうかな？」

場の空気が一気に変わり、青竜連合のメンバーから野次が飛ぶ。それをリーダーが沈め、

「初撃をいれて後は逃げるつもりだろ？結局3、4人とだけやってビーターが出てくれば目的を達成出来るもんなぁ」

そんな指摘にクラインさんが納得したような顔をしたけど…

「あぁ～その手が有ったか。考えてなかったなぁ」

静まっていた場の空気が再び爆発した。今度はリーダーも怒りが抑えきれなくなったらしい。

「なんだと…？クソッ舐めやがって。その勝負乗ってやるよ。3分だ。3分経ったらこっちの勝ちで良いな？」

「もちろん良いよ。誰からやるのかな？」

「俺がやってやる」

そう言って出てきたメンバーにデュエルの申請を送る。

30秒のカウントダウンが始まった。相手の武装、姿勢視線に気を付けながら息を整えて深く集中していく。0になった瞬間、お互いに

駆け出した。
キリトの元には絶対に行かせない！
一年のＳＡＯプレイを通して初めてＨＰゲージが危険域の赤になった。大量に買っておいた回復アイテムはストレージから無くなり、変わりにボスからドロップしたアイテムが詰め込まれている。
ギリギリ勝ちをもぎ取ったが勝利への喜びは無く、むしろまた生き残ってしまったという失望に似たものが有るだけだった。
いろんなアイテム名がごっちゃりと列挙されてる新規入手欄を慎重にスクロールして蘇生アイテムを探す。
数秒後、それはあっさりと見つかった。＜還魂の聖昌石＞それがここ数ヵ月に渡って求め続けていたアイテムの名前だった。
やっとサチを生き返らせ、最後の言葉を聞く事が出来る。嘘をついて自己満足に浸っていた事を正直に話して「君は俺が守る」と言おう。
そして…
「サチ…サチ…」
声に出しながら宝石を一回タップし、浮かんできたメニューからヘルプを押す。
『このアイテムのポップアップメニューから使用を選ぶか、《蘇生：プレイヤー名》と発声することで、プレイヤーが死亡してから効果光が完全に消滅するまでの間（およそ１０秒間）ならばプレイヤーを蘇生することが出来ます』
およそ１０秒間。この取って付けたようなその一文がこれ以上無いほど明確に、そして冷徹にサチの魂が帰ってこれない場所へと行ってしまった現実を突きつけてくる。
サチは死ぬまでの１０秒間で何を考えたのだろう。
「うああ…ああああ…」
口から獣のような叫び声が漏れだす。宝石を実体化してそれを雪の上に叩きつけた。
絶叫しながら何度も踏みつけたが割れるどころか傷１つ付くことが無い。

これだけのことが有っても俺のアバターから涙すら出てこない。
サチが怯えるように口にしていたこと。私のような弱虫がこの世界に来た意味が有るのか？
その事に、いや、そもそも1万人のプレイヤーが閉じ込められた事自体に意味が無かった。それだけが唯一の真実だと、確信していた。

青竜連合のメンバーを全員倒しきってしばらくした後、キリトが転移してくるのが分かった。キリト1人だけが転移してきた事が少し気になったが、とりあえず声をかけてみる。
「おーいキリト。無事に勝てたようで…」
そこで言葉に詰まった。キリトの顔から生気が完全に抜けていたのだ。
キリトが何かをクラインの前に投げつける。
「クライン、それが蘇生アイテムだ。過去に死んだ奴には使えなかった」
そのまま歩き去ろうとしていくのを見て、心配と共にある感情が爆発した。具体的に言うとカッチーンときた。
「キリト、ボク達に言うべきことが有るんじゃないかなって思うんだけど？」
その声が聞こえなかったかのようにゲートへと歩いていく。もう抑えるのは限界だった。我慢なんてもうしてやらない。
「キリト、デュエルしよっか。このままだとボク、ちょっとキリトのこと許せなくなりそう。」
「何を言い出すんだよ…」
キリトにデュエルの申請を送り、首もとに剣を突き付ける。
「受けてくれないならオレンジに成るだけだけど…受けてくれるよね？」
「…ユウキ？」
「おいおい、ユウキちゃんよぅ」
「貫ったクラインさんには悪いけど蘇生アイテムも有るからね、本気だよ。キリトに教えてあげる、ボクがこの数ヵ月どんな気持ちで居

たのかを」
「…分かった。受けるよ、その勝負」
さっきまでのデュエルでもう倒れ込んで寝ちゃいたい位疲れてるけど、ここでキリトを止めないといけない気がする。だってあのキリトの目は、いきる意味を見いだせなくて悩んでいた頃の自分とそっくりだから。
受諾されたメッセージが届いたので剣を離し、１０メートルほど間を空ける。
３０秒のカウントダウンが終わったとき、動き出したのはボクだけだった。
ソードスキルがキリトの体を掠めてＨＰゲージを2割程削る。
「キリト、本気でやってよ。じゃないと…死んじゃうよっ！」
キリトの体を剣で掠めるように切っていく。６割をギリギリ越えない位まで削り、そこで大技の片手剣単発突進ソードスキル、ヴォーパル・ストライクを放つ為のモーションに入る。
剣が赤く輝き出した時、ようやくキリトの目に光が灯った。ソードスキルが発動され、剣を前に突き出した状態で一気に体が加速していく。
キリトにギリギリのところでかわされ、技後硬直で動けない所に声が掛けられた。
「こんなことして何になるんだ？さっきの一撃は避けなかったら俺が死んでたぞ。ユウキが人殺しに成るだけだろ」
半減決着の形式では体力を半分まで削られると決着が付くのだが、最後の一撃のダメージはＨＰゲージが半分を割ってもそのまま計算される。つまり最後の一撃で体力を削りきった場合、システム内では犯罪者となる事なく殺人を犯せるのだ。
「ボクが本気だって事は分かった？じゃあ、次は防げるかなっ？」
またソードスキルを放ち、それをキリトが避ける。先手を取られたキリトに出来ることは時間いっぱいまで逃げるか…
「距離を詰めてソードスキルを放つ隙を与えないようにするよね」
ここでようやくキリトが反撃を始めた。ステップを踏んでわざと

少しかするように避ける。キリトの大振りの攻撃が来たのでわざと当たって大きく後ろに飛ぶ。体力ゲージが大きく削れて大体６割程になった。

「これで条件は一緒になったね。キリト、ここからが本当の勝負だよ！」

挑発されたかのように感じたのかキリトの顔に少しだけ感情が見えるようになっていた。

本気にさせることに成功したかな？さっきまでとは全然違ってキリトの構えに隙が見つからないや。

ここからキリトに勝ってキリトの目を覚まさせてやる！

赤鼻のトナカイ

少しのダメージで決着が付くため、攻撃を貫いにいこうとしても向こうは大技しか使おうとしない。ユウキのソードスキルは恐ろしく速い。１度発動されたら避けきれる自信がないので発動させないために段々と攻撃が激しくなる。

「しっ」

レベルに物をいわせた速度重視の突きを放っても剣を弾きあげられ、逆にユウキがソードスキルを構える。

自分とここまで戦える相手は今までに会ったことが殆ど無い。そういえば最後にここまでお互いに渡り合っているデュエルをしたのはいつだっただろうか。

ソードスキルの発動をキャンセルさせるために剣を横に大きく振る。

バックステップでかわすのを予想して仕掛けようとするが、ユウキの動く気配が全く無い。そのまま剣は当たり、ユウキが弾き飛ばされた。

その光景が、今の自分の喪失感が、ある時とぴたりと重なった。それはβテストの、一番ＳＡＯを楽しんでいた時期。プレイヤーが主催したデュエルトーナメントの決勝で　、ライバルだと思っていた相手が八百長でわざと負けた時だ。

同じように攻撃が当たった事に呆然としているとｗｉｎｎｅｒ表示がでかでかと現れた。

相手の口許を見ると少し笑っていて全く悔しそうじゃない。その瞬間、相手がわざと負けたことに気が付いてしまったのだ。本気だったのは自分の方だけだったのかと思うと凄く悔しく、デュエルの余波で気分が高揚していた俺は気がついたら相手を強く責め立てていた。

しかし、その時と違うのはこれで決着が付かなかったこと、そして負けようとしているのが自分だということだ。

本気で戦っている相手にわざと負けられること。その悔しさを俺は知っている筈なのに、同じ事をユウキにしようとしていた。

もうデュエルを始めた切っ掛けなど、頭の中から吹き飛んでいた。
「これで条件は一緒だね、キリト。ここからが本当の勝負だよ！」
この一言に、本気で勝ちたいという感情が芽生えた。ユウキの姿勢、重心、目線などあらゆる情報を読み取って次の動きを考える。
合図もなしに、今度は互いに駆け出した。剣同士がぶつかり、火花が飛び散る。本気のデュエルが、今始まった。
切り下ろし。ステップで避けられる。突き。剣を跳ね上げられた。横なぎ。しゃがんで避けられる。上段からの大振りと見せかけて途中で攻撃を止めて突く。当たると思った瞬間、体術単発ソードスキルの水月で横に弾かれた。正面ががら空きになった俺にユウキが突きを放つが、それは予想していたので体をひねって避ける。手数やスピードで勝っているのに、一撃がどうしても決まらない。
何合も打ち合ううちに一発鋭いカウンターが体をかすめ、あともう一発でもかすってしまったら負けになってしまった。焦った俺は、一か八かソードスキルを放つ。
青く発光した剣がユウキに迫るが、ソードスキルで照らされたユウキの目はその剣先をしっかりと捉えていた。
しまったと思ったときにはもう遅く、ユウキの剣にソードスキルを弾かれていた。
技後硬直で動けないところに繰り出された剣は心臓を貫いたりせず、頬を掠めて決着がついた。
デュエルのｗｉｎｎｅｒ表示がでかでかと２人の頭上に表記された時、最後の瞬間まで黙って見守っていたクラインが急に立ち上がった。
「後はユウキちゃんに任せるぜ。ま、こいつは貰っていくがな。よしお前エら、蘇生アイテムゲットの祝いに宴会を開くぞ！今日は俺様が奢ってやるぜ！」
よっしゃーなどと口々に言い合いながら風林火山のメンバーが転移していく。
ニコラス戦の疲れもあって立っていられず、その場に座り込むと、

すぐ隣でユウキが座る音が聞こえた。
ふと隣を見ると、ユウキの装備が俺と同じ位ボロボロになっている。俺がニコラスと戦っていたとき、ユウキも激しい戦いをしていたのだとその時に初めて気が付いた。
見られている事に気が付いたのかユウキが顔をこっちに向ける。
目と目が合うとユウキが静かに口を開いた。
「ねぇキリト。何があってそんなに自分を責めてるの？何があったのかちょっとだけ知ってるけどキリトの口から直接聞きたいな」
動ける気がしないので逃げる事も出来ず、ぼそぼそと黒猫団を壊滅させた話をした。話している内にデュエルの高揚感は無くなり、気持ちが沈んでいく。
「俺のエゴが皆を殺したんだ。…頼みの綱だった蘇生アイテムもなんの意味もない。…俺にはもう、生きている価値なんて…」
無い。と言おうとした時、いきなり視界が塞がり、体が温かくなった。3秒ほどたってユウキに抱き締められているんだと気づく。
「キリト、それ以上はダメ」
「…ユウキ？」
「何でボクがデュエルを仕掛けたと思ってるのさ」
「…」
問いかけられても全くわからない。ユウキの胸の中で小さく首を横に振った。
「あのままだとキリト、自分で死んじゃいそうで…それだけは止めないとって思ったんだ。ああでもしないと話も聞いてくれなかったでしょ」
「俺なんかに何でそこまで…。俺は1つのギルドを壊滅させて…誰かを守る事もできず、強くなった所で誰も救えない…」
すると、頭に回されていた腕の力が少し強くなった。
「デュエルじゃ伝わらなかった？」
ユウキの手がゆっくりと頭を撫で始める。
「ボクは強くなったんだよ。今じゃもうキリトより強いんだから。

守ってもらわなくても大丈夫」
「…」
「それに、キリトが誰も救って無いなんて事はないよ」
「…？」
「ここにいるよ。あの日、無駄に命を散らす所だったボクを救ってくれたのは、キリト。君なんだから」
「それでも、俺は…」
「ようやく出来た仲間がキリトを責めるだけの人だと思ってるなら、それは死んじゃった人たちに失礼だよ」
「…」
「信じてあげなよ。キリトが自分で見つけた居場所だったんでしょ」
そこまで言われて思い出さないようにしていた黒猫団の皆で攻略していた頃を思い出す。あの時は皆で笑ってて、俺も自然と笑えてて…。思い出と共に、あれほど出てこなかった涙が頬を伝って落ちていく。
「俺は…俺はっ…何をすれば　、皆に報いれるのかな」
「ずっと忘れないで、でも前に進んで欲しい。ボクならそう思うかな」
その一言は生き残った人を慰める時によく聞くようなもの。しかし俺にはそれが、切って捨てる事の出来ない程重い言葉に聞こえた。
「そうか…そうだと良いな…」
抱き締められる形で頭を撫でられ、そのまま泣き続けた。弱くなった雪が2人を優しく包み込んでいた。
涙が止まり嗚咽も止んだ頃にゆっくりとユウキが抱擁を解いた。
「ユウキ、迷惑をかけてごめん」
「そういう時はごめんなさいよりもありがとうの方が嬉しいんだよ」
「そっか…、ありがとな」
「どーいたしまして！じゃあ宿屋に行こっか」
「そうだな」

２人で会話もせずに並んで歩く。宿をとろうとしたが１人部屋が取れず、２人部屋を借りることになった。
部屋に入りベッドに座る。歩いている内に頭が覚めて落ち着くと、だんだんと恥ずかしさが沸き上がってくる。
自分よりも年齢が下であろう女の子を本気で心配させてしまったうえに、すがり付いて泣き止むまで慰めて貰ったのである。
どう話しかけて良いのかわからず、ずっと黙っていると聞き慣れないアラーム音が耳に届いた。
ユウキの反応を見たところ気付いた素振りがないので、これは俺にシステムから届いた通知なのだろう。
ウィンドウを出して確認すると、サチとの共通タブが光っていた。そこに何かの時限起動アイテムが入っていたらしい。アイテムを取り出すと、それはメッセージ録音クリスタルだった。
「それ、どうしたの？」
「サチからのメッセージらしい」
「ボク　、席を外してようか？」
「いや、一緒に居てくれ」
明滅するクリスタルをクリックすると、懐かしいサチの声が聞こえてきた。

メリークリスマス、キリト。
君がこれを聞いているってことは、私はもう死んじゃってるんだと思います。
キリトは毎晩絶対に死なないって言ってくれたよね。だから、私が死んだときは自分を凄く責めるでしょう。だから、これを録音することにしました。
あのね…本当はキリトがどれだけ強いか知ってるんです。実は一度だけキリトが操作してるウィンドウを後ろから覗いちゃったから。
何でキリトが一緒に戦ってくれる理由はわからなかったけど、いつか自分から話してくれると思って他の皆には黙っていることにしました。

君がすっごい強いんだって知ってから、君の隣なら怖がらずに眠ることが出来たよ。
えっと…何が言いたいのかっていうと、もし私が死んじゃってもキリトは頑張って生きてねってことです。生きて、この世界が生まれた意味、こんなに弱虫な私がここに来ちゃった意味、君と私が出会ったことの意味を見つけてください。
時間余っちゃたので歌を歌おうかな。曲は《赤鼻のトナカイ》にします。何でこれかっていうと、どんな人でもきっと誰かの役に立っているってキリトに言って貰ったときに嬉しくって思い出したからです。
ふっふふふっふふっふー…
…私にとって、君は暗闇の先にある星のようでした。じゃあねキリト。君と出会えて、一緒に居られて本当に良かった。
ありがとう、さよなら。

最後の言葉が、死ぬ直前に見せたサチの口の動きとぴったり重なった。
生きて、１００階層を攻略しよう。
サチがこの世界に来た意味があったと、そう教えられるように。

黒の剣士、黒の騎士

依頼

　見たこと無い男性プレイヤーが最前線のゲート広場でプレイヤーに泣きついて頼み事をしていた。
「あの人、どうしたんだろうね？」
「ちょっと声でもかけてみるか」
近づいて声をかけてみる。
「あの…」
話しかけたとたんにコートの両端を掴まれた。
「どうか、どうか仇をとってください」
ユウキに目線で助けを訴えるが、そっぽを向かれてしまった。言い出しっぺなので何も文句は言え無いのだが、少しは助けてくれても良いと思う。
とりあえずそっと体を離す。こういう人間は時々居て、大体が攻略組の人間に相手にされずにとぼとぼホームまで帰って行く。
「一回落ち着いてくれ。君は何があって俺達にどうして欲しいんだ？」
話を聞いてもらえるとわかったからか、男が落ち着いて話し始める。
どうやら、男が立ち上げたギルド《シルバーフラグス》が、オレンジプレイヤーによって壊滅させられたらしい。
「あいつら、襲う前にタイタンズハンドって名乗ってた。ロゼリアっていう女は襲ってなかったから、きっとあいつがグルだったんだ！」
「タイタンズハンドにロゼリアか…それで？」
「あいつらを、この回廊結晶で監獄エリアに送ってくれ！有り金を全部これに使ったせいで見返りは渡せねぇ。でも、あいつらのために俺が出来るのはこれだけで…頼む、頼むよぉ…」
静かに聞いていたユウキだったが、その手は強く握りしめられてい

る。
「なあユウキ、しばらく前線から離れるか」
「ボクもそう思ってたところだよ。この世界でＰＫするなんて…絶対に許せない！」
「決まりだな。その依頼を受けるよ。もう少し詳しい…うわっ」
感激のあまりに男が抱きついてきた。
「ありがとう、ありがとう」
「なあおい、落ち着けよ。ユウキ、助けてくれ…」
「…」
ユウキが超高速でそっぽを向く。
「ありがとう、ありがとう…」
結局男が落ち着くまで３０分近く転移門前でたたずむことになった。その間、転移結晶を使いたい衝動を押さえるのが大変だったのは、ユウキにもばれていないだろう。
広場ではなんなのでレストランまで移動して話を聞き（男は本当に有り金を全部使っていたので全て俺の奢りだった）男と別れたあと、取り敢えず最後に男が襲われた階層まで移動することにした。
転移門広場に着くなりユウキが肘を引いて小さくガッツポーズをしながら。
「調査の基本は足からって言うしまずは聞き込みだね！」
「気合い入ってるなぁ。手掛かりもないし、しょうがないか」
ロゼリアの情報を得るために聞き込みをしてみると悪い評判が出るわ出るわ。ロゼリアを知る人は大体が文句を言って帰って行くような状態だった。
「これはかなり怪しくなってきたね」
「素行の悪いだけのただのプレイヤー、っていう線も無くはないけど…やっぱりロゼリアを探すのが一番だろうな」
その後も聞き込みを続けたが有力な情報を得られず、結局ホームの宿屋に向かうしかなかった。いつも通りに１階の食事処で向き合って座る。
「違う階層に行ったのは間違いなさそうだな」

「これじゃあどうしようも無いよね。当てずっぽうにいろんな階層で続けてみる？」
ユウキは疲れきっているのかのか俺から少しずれた所を見て険しい顔をしている。
「情報屋に聞くしかないと思うけど、アルゴにはあんまり関わってほしくないしなぁ」
「オレっちがどうかしたのカ？」
突然、耳元語尾に特徴のある、聞き慣れた声が聞こえてきた。
「うわぁっ」
「にゃハハハ、相変わらず良い反応をしてくれるじゃないカ」
「あはははっごめんね、キリト」
「教えてくれても良いじゃないか」
「アルゴがしーってしてきたからさ」
どうやら険しい顔をしていたのは必死に笑いを堪えようとしていた為らしい。
「それよりもどうしたんだ、キー坊。オレっちに隠し事だなんておねーさんは寂しいゾ」
「そんな事言ってるが大体事情は察してるんだろ？ここまで来たくらいなんだし」
「最前線でキー坊が男に泣きつかれているなんて情報、オレっちが聞き逃す訳ないじゃないカ」
嫌な予感がしてアルゴに尋ねる。
「なぁ、その情報ってどこまで広まってるんだ？」
「うーん、情報料をいただくところなんだが特別ダ。あるクライアントいわく、ミステリアスな最強剣士と悲劇の男。復讐を誓った男に稽古をつけて…段々と男に引かれていく最強剣士は夜にマッサージと称してあんなことやこんなことまで…。う～ん妄想が捗るわぁ。だそうダ」
「そいつのプロフィールを売ってくれ。今すぐ」
「口止め料が１００万コルなんだがキー坊は払えるのか？」
衝撃の価格に俺は諦めるしかなかった。

「何でそんなに高いんだよ…」
「中層で売れてるらしいぞ、最強剣士シリーズ全３５巻」
「それってちなみに全部ＢＬだったり…？」
アルゴが俺の席の隣にどかっと座ってにんまりとしながら指を１本立てる。
「エール一杯だナ」
即座に厨房に向けて大声を出す。
「エールを大で１つ！それで？」
「ＢＬだ」
「今持ってる装備を全部売ればそいつの情報を買えるか？いや、そいつの持ってる金が全て情報屋に渡した訳じゃないはずだ。アイテムも手放さないと…」
ぶつぶつと現実逃避を始めた俺を尻目にユウキが話を戻す。
「そこまで知ってるならロゼリアっていうプレイヤーの居場所もわかるの？」
「ロゼリアの詳しい居場所は知らないんだガ、そいつが今所属しているパーティーメンバーの１人なら知ってるゾ」
「すごいピンポイントな情報だね…情報料は？」
「レッドに関わる話だ。情報料なんかいらないサ」
「ありがとう、アルゴ。そのプレイヤー名は？」
「シリカっていうんだ。こっから先は情報屋の掟に反するから秘密だけどナ」
「そこまでで大丈夫、ボクたちで調べてみるから。ところで何でそんな情報が入ってきたの？」
「シリカって子は中層で有名でナ。シリカちゃんを愛でる会っていうファンクラブもといストーカー集団が居るんだ。そっからの情報って訳だな」
「シリカちゃんは大変だね…」
「ユーちゃんにもファンクラブあるゾ」
「えっ！」
ユウキの顔が一気に赤くなる。

「しかもこっちの口止め料は５００万コルだからナ。二人のお陰で稼がせて貰ったヨ」
「そんな～」
一転して顔が一気に真っ青になった。
それを見てアルゴは我慢が限界に達したようで笑い出した。
「にゃハハハ、冗談だヨ。キー坊はともかくユーちゃんの情報は殆ど他のプレイヤーに出回ってないからナ」
「良かったぁ。それなら、取り敢えずシリカって子を探せば良いんだね」
「そーゆー事だナ。じゃあキー坊、ごちそうさまダ。ユーちゃんもまたナ」
「じゃあね、アルゴ」
「あ、ああ。またな」
まだ落ち込んでいる俺をユウキが慰めようとする。
「キリト、元気出しなよ。小説になるだけなら嫌われるよりかは良いんじゃないかな？」
「だってＢＬだぞ」
「さっきから言ってたＢＬってなに？」
思わず立ち上がってユウキの肩を掴む。
「ユウキ、そのまま腐らないで居てくれ」
「えっ？腐る？アバターが腐ることなんてないと思うけど…」
「知らないなら良いんだ。それより今日はもう寝た方が良いぞ。明日は早く出ないとお目当てのパーティーと遭遇できないかも知れないからな」
このままだと危険だと判断し、話を無理矢理変えて逃げるように部屋の前に移動する。
「取り敢えずまた明日な」
「うん、また明日ね」
後日、自分がどのように書かれているのか気になって１巻を買ってみたところ、無駄にクオリティの高い文面に濃厚な絡みが書かれていたため、現実逃避から帰ってくるのに一晩かかった事は内緒である。

ユウキが腐っていなくて良かった…。

追跡

早朝に出発し、シリカというプレイヤーが居る階層まで移動する。
シリカの名前を出すと、パーティーを見つけるのはかなり簡単だった。
「ここまで簡単にいくと怖くなってくるね…」
「取り敢えずアルゴに感謝だな」
物陰からパーティーを見てみると女性が２人。片方は見るからにもふもふとしていそうな羽毛を生やした小さな竜を連れている少女で、もう片方は赤髪で背の高い女性だった。
これからフィールドに出る様なので取り敢えず広場のベンチに並んで腰かける。
「あの背の高い方がロゼリアって人で間違いないかな？」
「そうじゃないか？あの男が言ってた特徴にも一致してるしな」
「これからどうしよっか？」
まだ１番怪しい人物にたどり着いただけで本当に彼女が犯人と決まったわけではない。
「う～ん、マナー違反だけど昼夜ずっと張り付いて誰かと接触するのを待つしか無い…と思う。取り敢えずフィールドから帰ってくるまでは町で待機かな」
「じゃあ食べ物とか買わないとね！」
「ユウキって食べるの好きだよな」
「この世界での唯一の娯楽みたいな物だし、楽しまないと損だよ。そういうキリトだってこの間大量に買い食いしてたじゃん」
「まあ俺も食べ歩きは好きだけどな。どうせ夕方までは帰ってこないだろうし、店巡りでもするか」
現在、中層と呼ばれている３０～５０層辺りはサクサクと攻略されてしまい、観光など殆ど出来ていない。
「だったらさっきの通りに有ったお店に行こうよ！」
「りょーかい。そこから回ってみようか」

２人で並んで町へ歩きだした。
ひととおり町を巡りきると日がだいぶ傾いてきたので、フィールドと町の境目にある門の前まで移動する。２０分ほど食べた料理について話し合ってるとシリカのパーティーが町に入ってくるのが見えた。
「よし、追いかけるぞ」
「スパイみたいでちょっとわくわくしてきちゃった」
「モンスター相手にさんざんスニーキングしてきただろ。それに相手に気づかれた時に万一があるんだから気を引き締めてくれ」
よっぽどのことが無い限り俺もユウキもやられることは無いが、相手はＰＫかもしれない。気を付けるに越したことはない。
１０分ほど歩いた食事処でアイテムの分配をするらしい。
「中に入っちゃったね、ボクたちも入る？」
「うーん、あんまり顔を見られたくないんだよな。よし、あっちの空き家に入ろうか」
そう言って食事処の反対側にある無人の家を指差す。アインクラッドでは、基本的に無人の家はただのオブジェクト扱いとなっていて、鍵などがかけられない代わりに誰でも入れるようになっている。
ユウキがうなずいたので早速家に入り、食事処の出口が見える部屋を陣取る。
「それじゃあさ、さっき買ったあれ早速食べてみようよ！」
「さっきまでずっと食べてたろ…まあ食べてみるか」
そう言って
「なんだかんだ言ってキリトも気になってるんじゃん」
大通りからかなり外れた位置にポツンと屋台が置かれていて、中を覗くとおでんに似た何かが売られていたのだ。
取り敢えずおでんを取り出す。
「じゃあ、ボク大根みたいな奴貰う！」
「じゃあ、卵を貰うかな」
まだ熱いそれを一口齧ってみる。口の中に広がる味は…
「うん、あれだな」

「うん、そうだね」
その一言で伝わったらしい。どうやら思った事は同じな様だ。
「「醤油が足りない」」
「やっぱりそうだったか。美味しかったら有名になってるはずだもんなぁ」
「あの店よりは美味しいけど、やっぱり物足りないなぁ…」
実は上の層にラーメン屋の暖簾を発見した俺達は早速食べに入ってみたのだが、そこで出されたラーメンの味が醤油を抜いた醤油ラーメンみたいな物だったのだ。
２人で渋々おでんを食べきると、店での話し合いが終わった様で店からシリカ達が出てきた。
どうやら拠点の宿はバラバラらしく、店の前で解散となったらしい。
「ロゼリアの後を追うぞ」
「わかった」
空き家を出て慎重に後をつける。隠蔽、索敵は両方とも俺の方が高いので前を歩いている。歩き始めて２０分ほどたった頃、突然ロゼリアが立ち止まって辺りを見回し始めた。
すぐさま近くの木にユウキを押し付けて隠蔽スキルを発動する。
「ねぇキリト、キリトってば」
小声でユウキが話しかけてくるが、会話が漏れると隠蔽がとけるかもしれないので静かにするようにジェスチャーで伝える。
まだ何か言いたそうだったが我慢して貰う。
ロゼリアはどうやらただの空き家に入っていった様だ。
「何しに入ったんだ？」
思考をめぐらせていると
「キリト、そろそろ離れても大丈夫じゃないかな？」
すぐ近くで声が聞こえて、ユウキをずっといわゆる壁ドンの姿勢で木に押し付けていた事に気づく。
「え、ご、ごめん」
「咄嗟の事だったみたいだから良いけど…、何しに入ったんだろ？」

「圏外に居る奴らへの連絡役があの家の中に居るって可能性はあるけど…」
「連絡役…？」
ユウキが小首を傾げていて、よくわかっていない様なので説明する。
「拠点がダンジョン内に有ったらメッセージが使えないだろ？ロゼリアと連絡できないから1人が拠点と圏内を行ったり来たりしてるんだろうな」
そこまで聞いてユウキがはっとした顔になる。
「じゃああの家から誰かが出てきたら…」
「そいつをつけてけば拠点の場所がわかるだろうな。まぁ、まだそうと決まった訳じゃないけど…」
「てことは…」
「また張り込みだな」
ユウキが少しうんざりしたような顔になる。
「一応宿の場所は知っときたいから、ロゼリアが出てきたらそいつの後をつけてくれないか？」
「キリトはどうするの？」
「俺は他に出てくる奴がいないか見張って後をつけてみるよ」
俺が退かない事がわかっているのだろう。ユウキが渋々といった感じで頷く。
「絶対に無理はしないでね」
「わかってるさ」
そうして見張ること１０分ほど。ロゼリアが出てきたのでユウキが後を追いかけていった。
少し寂しい気持ちになるが、そんな事は言ってられないと気を引き締める。それから5分たった頃、男が1人家から出てきた。
「どうやら当たりみたいかな」
そう呟いて後をつける。男に見つからないように索敵スキルの範囲ギリギリを保ってついていくと、洞窟形のダンジョンについた。
カーソルがオレンジ色になっているプレイヤーが見張りをしてい

るのが見えたので情報としては充分証拠になるだろう。中に入るのは危険なのでマップにマーキングをして宿へと戻ることにした。
宿に戻るとユウキが1階の食堂に居たので向かい側に座る。
「ユウキはどうだった？」
「宿の場所がわかったよ。ここの宿に泊まってるみたい」
ユウキがマップを可視化して1つの宿を指差す。
「そっちはどうだったの？」
「ああ、拠点を見つけた。ここだな」
「乗り込んで捕まえる？」
「そうしたいけど、それじゃあロゼリアや連絡役の奴までは捕まえられないだろうな。関係がないって言い張られて終わりだ。だから次に襲撃が行われた時に全員捕まえよう」
俺の発言にユウキが固まる。
「ということは…」
「また明日からシリカが居るパーティーの見張りをすることになるな」
心底疲れた顔でユウキが机に倒れ込んだ。
「うう…、もう追跡はもうこりごりだよ…」
それは非常に同意なのだが、言い出しっぺの俺がそんなんではいけないだろう。
「後もう一踏ん張りだ。頑張ろうな、ユウキ」
「うん…。これ以上殺人が起こらない様にしないとだもんね」
その後は明日の予定を軽く打ち合わせして解散となった。

竜使いの少女

パーティーをの後をつけ始めてから2日目、ロゼリアを含むパーティーは迷いの森と呼ばれるマップに入っていった。
「迷いの森か…。地図は持ってきたけど追跡は厳しそうだな」
迷いの森は数百ものエリアに分けられていて、1分毎に隣のエリアが入れ替わるために地図を見ながらでないと迷ってしまう。
マップが切り替わる前に同じエリアに入らなければならないのだが、そこまで近づいたら気づかれてしまうだろう。
「今日襲撃されるかもよ？」
「うーん、迷いの森で遭遇できる確率ってかなり低いし逃げるのも簡単だろうから大丈夫…と思う」
「じゃあどうしよっか？1回前線に戻る？」
確かに一度前線の様子を見ておきたいが…万が一を警戒した方が良いだろう。
「それでも良いけど敵の視察をしておこうぜ。万が一レベルが高かったら俺達でも危ないかもしれないからな」
「そっか、偵察しておくに越したことはないもんね」
2人で並んで圏外の洞窟へと歩きだした。
「うーん、出てこないな」
「見張りの人しかわからないね」
実際に洞窟まで来たものの、まわりでも中でも活動が行われている様には見えない。
「目立たない様に夜に活動してるのか…。大体のレベルは把握しときたいんだけどな」
「ここで待っててもしょうがないけど…」
この層では特にやることがないのでこれからどうするか悩んでいると、目の前をモンスターが通りすぎて行った。
「あ、良いことを思いついた」
ユウキがジト目でこちらを見ている。
「キリト、ろくなこと考えてないでしょ」

「まあ、少し待っててくれ」
そう言って森のなかへ入っていった。
1分後、洞窟の前では戦闘が始まっていた。
「もしやって思ってたけど、モンスター擦り付けるのはあんまり良くないんじゃないかな…」
「このエリアでもそんなに強くない奴だし死にはしないだろ」
俺が連れてきたのは狼系のモンスター。相手が追ってこれるギリギリを走り、洞窟が近くなったら一気に加速してターゲットを切りハイディングスキルを発動。後は気取られないようにユウキのところまで戻って来たところで見張りが仲間を呼んで戦闘を始めたというのがここまでの流れである。
「あんまりレベルが高い訳じゃない…かな？」
狼相手にソードスキルを放っているが3割程しか削れていない。何をメインで上げているかによるが、レベルとしては大体４５～５０位だろう。
「そこまで警戒する必要はなさそうだな」
「多分だけど、１０人越えてもバトルヒーリングスキルで回復しきれるんじゃない？」
「そうなると気をつけるのは毒とか麻痺だけど…アクセ付け替えれば完封できそうだ」
狼を倒しきり、男達が洞窟に入りだしたので1度町に戻ることにした。
夕方になり、夕焼けが出始めたところでロゼリアのいるパーティーが帰って来た。
しかしそこにはシリカの姿がみられない。近づいて話している事に聞き耳をたてる。
どうやらロゼリアとシリカが喧嘩をし、シリカがメンバーを抜けて1人で行動を始めたらしい。
「ねぇ、迷いの森で1人って事は…」
「地図を持ってたのはあのリーダーだけだろうから、今頃迷子になってるだろうな」

「あの森ってドランクエイプが出てくるよね。２～３体出てきたら危ないんじゃないかな」
「確かに…。このまま帰ってこなかったら寝覚めが悪いし探しに行くか」
「そうだね。地図は２枚有ったっけ？」
「ユウキの方がＡＧＩが高いし、これを渡すから先に行っててくれ。俺は地図買ってから別のところ探してみる」
地図をオブジェクト化してユウキに渡す。
「了解！見つけたらメッセージ入れるね」
「わかった」
迷いの森へとユウキが走り出したのを見てから地図を売っているＮＰＣの元へと駆け出した。
すっかり暗くなり、木の根っこに気を付けながら森を走り回っていると、マップの切り替わりと共にポリゴンが砕け散った時の音が聞こえて来た。
急いで向かうと３体のドランクエイプが棍棒を振り上げて、今にも誰かを攻撃しようとしているところだった。
背後から近づいてホリゾンタルを放つ。それだけで３体いたドランクエイプのＨＰが０になった。
ドランクエイプと戦っていたのはシリカだった。
目が合うなり１歩後退りされて少し傷つくが、さっきまで苦戦していたモンスターを一撃で倒すプレイヤーは怖いのかもしれない。
シリカちゃんの側にいつもいた仔竜がいない。最初に聞こえてきた音は仔竜が死亡した時の音だった　みたいだ。
「ごめんね、君の友達を助けてあげられなかった」
少し緊張が解けたら、今度は悲しくなってきたみたいで形見であろう長い羽根を胸元に持ってきて泣き出してしまった。
取り敢えずキリトにメッセージを送り、シリカの使い魔が死んでしまっていた事を伝える。
帰ってきたメッセージを読んでびっくりする。
（ボクが蘇生を手伝おうとするってよくわかったね。それにプネウ

マの花の事覚えてたんだ。うろ覚えだったから助かるなぁ）
第４７階層フローリア。その層にある思い出の丘という場所で、プネウマの花という使い魔蘇生用のアイテムが採取できる。
「そのアイテムの名前を教えてくれる？」
「ピナの、心って書いてあります」
「最近わかった事なんだけど、心っていうアイテムが残っていたら４７層に咲いてるプネウマの花っていうアイテムで蘇生できたはずだよ」
「本当ですか！…４７層に…」
一瞬上がった顔は希望に満ちていたが、再びうつむいてしまう。今いる層は３５層。きっとレベルが足りていないのだろう。
「代わりにボクが行ってきても良いんだけど、使い魔が死んじゃったビーストテイマーがいないと花が咲かないらしいんだよね」
こっそりキリトからのメールを見ながら答える。
「いえ、蘇生できるっていう情報だけでもとってもありがたいです。頑張ってレベルを上げればいつかは…」
「１番の問題は、３日以内じゃないとアイテム名の心が形見に変わっちゃって蘇生できなくなっちゃうみたいなんだよね」
時間制限。ボクが手伝いたいと思ったのはこのためだ。
「そんな…」
メニューを開いてトレードウィンドウを出し、結局使わなかった装備品を次々に放り込む。
「これがあったら５、６レベルは底上げできるかな。ボクも一緒に行くからきっとなんとかなるよ」
「えっ…」
あからさまに警戒した表情で見つめられる。
「なんで、そこまでしてくれるんですか…？」
「うーん、救える命は全部救いたいって思ってるから…かな？」
「でも、ピナはモンスターですよ？」
ボクが助けたいと思う理由か…。
「プレイヤーはもちろんだけど、モンスターだってＮＰＣだってＨ

Ｐが消えたら死んじゃうでしょ」
「モンスターを倒すのに、ですか？」
「うっ、そ、それは…」
返事に困っているとシリカが吹きだした。
「ぷっ、ふふふ、面白いことを言うんですね」
「ボクは本気でそう思ってるんだけどなぁ…」
笑ったことで警戒が解けたようだ。肩から力が抜けているのがわかる。
「よろしくお願いします。助けてもらったのに、その上こんなことまで…。こんなんじゃ全然足りないと思いますけど」
中層プレイヤーにとってはかなりの額であろうコルがトレードウィンドウに表示される。シリカが持っている全財産かもしれない。
「いや、お金はいいよ。それってボクが結局着なかった物だし」
お金を受け取らないでＯＫボタンを押す。
「すみません、何からなにまで…。あの、あたし、シリカって言います」
知ってるよなんて言えるわけもなく、あたかも初めて聞いたかのように返事をする。
「ボクはユウキ。しばらくの間だけど、よろしくね！」
キリトに合流するのは難易度が高いので別々に町へと向かうことにした。

悪意

待ち合わせ場所の連絡をとってから町に戻ると、シリカがフリーになったことを聞き付けた男性プレイヤー達がシリカを勧誘し始めた。

どう反応すればいいかわからないのでシリカに任せる。

「お話はありがたいんですけど…」

そう言ってシリカがボクの腕をとる。

「今はこの人とパーティーを組んでいるので…」

「シリカちゃんは前から僕たちが…」

ぐいっと向けられた男達の顔が嫉妬や不信感から驚愕に変わり、…デレデレし始めた。

「狙ってたんだけど、どうせなら2人で僕たちのパーティーに入らない？」

「ボク達が行くの47層だけど…レベルは足りてる？」

「「えっ…？」」

「じゃあそういう事なので…」

男達がポカンとしている間にシリカがユウキを引っ張って離脱する。

「シリカさんって人気があるんだね」

人気がある事は知っていたが、ここまでとは思っていなかった。

「シリカで良いですよ。そんな事無いです。マスコット代わりに誘われてるだけなんです、きっと。それよりもユウキさんって強くてかわいいですし、結構な人気があるんじゃないですか？」

「ボクもユウキで良いよ。うーん、人気とかはあんまり気にした事無かったなー。普段はペアで活動してあんまり人前に出ないからね。たぶん人気がある訳じゃないと思うよ」

「ユウキさ…に手伝いを頼んでペアの人に迷惑とかかかってないですか？」

心配になったのかおずおずと聞いてくる。

「大丈夫大丈夫、実際今は休暇？みたいな物だからね」

そんな事を話していると、突然横から声をかけられた。
「あら、シリカじゃない」
「…どうも」
シリカの元気が見るからに無くなっているので、性格が悪いのは本当の事らしい。
「あら、あのとかげはどうしたの？あらら、居ないってことは…？」
使い魔は主人であるプレイヤーから離れることがない。言わなくてもわかるだろうに、ロゼリアがわざとらしく言葉を重ねた。
「ピナは死にました…」
シリカは自分の失敗を悔いているのだろうか。１瞬俯いてしまうが、すぐに顔をあげて言い返した。
「でも、ピナは絶対に生き返らせます！」
「そう、てことは、思い出の丘に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの？」
シリカが可哀想なので前に出て反論する。
「あそこはそんなに難しい場所じゃないよ」
すると、ロゼリアがこっちを値踏みするかの様にじろじろと見つめ、嘲る様な笑みを浮かべた。
「そっちのあんたはみたとこ強そうじゃないけど、ヒーローごっこでもしてるつもり？」
シリカが俯いて震え出していたので、取り敢えずこの場所から離脱することにする。
「シリカ、行こうか」
肩に手を置いて歩き始める。
「まあ、精々頑張ることね」
ロゼリアの笑いを含んだ声に、シリカの肩がピクッと震える。肩においた手に力が入ってないか心配だった。
十分に遠ざかってから話を切り出す。
「あそこのお店に入ろっか」
「…はい」
指を指した先にあるのはキリトとの待ち合わせ場所である風見鶏

亭。いろんな店に入ったときに時間が無くて断念した場所だ。
中に入ってキリトを探すと、４人席に座ってるのを見つけた。
「おーい、キリト。紹介するね。この人がボクのパートナーのキリト。こっちがシリカね」
「よろしくな、シリカさん」
「あ、あの、ユウキさん、これはどういうことでしょう？」
あれ、シリカが困惑している？えーっと、そうか！
「ボク、キリトのこと説明してなかったや」
キリトがあきれた顔になる。
「ユウキよりも俺の方が花について詳しいから説明しようと思ってたんだけど…今時間は大丈夫かな？」
シリカもようやく状況を把握したらしい。
「も、問題ないです。それと、シリカでお願いします」
「了解、でもまずは飯にしようか。さあ座って」
「は、はい…そ、そうだ！ここってチーズケーキが美味しいんですよ」
「へー、じゃあボクも頼んでみようかな？」
ＮＰＣに注文をして食事が始まった。
「なんで、あんな意地悪言うのかな…」
夕飯を食べ終え一息ついた頃、シリカが俯いてポツリと言葉を溢した。
「あんな意地悪…？」
キリトにロゼリアと会ったときの話をする。
キリトが真面目な顔になって手に持っていたカップを机に置く。
「シリカは、ＭＭＯはＳＡＯが…？」
「初めてです」
「そうか。どんなオンラインゲームでも、善人悪人と性格が変わる奴って多いんだ。今まではロールプレイっていう言葉ですませられたけど…俺はＳＡＯの場合は違うんだと思う」
一瞬キリトの目が鋭くなった。
「全員で協力して攻略しようってするのが難しいのはわかってるん

だ。こんな状況だしな。でも、他人の不幸を喜ぶ奴、アイテムを盗む奴、…ころ「キリト」」
キリトの目が段々と怖くなっていき、シリカを怖がらせそうだったので止めた。
キリトも自分の顔がこわばっている事に気づいた様で長く息を吐いて落ち着こうとしている。
「すまない」
「思い出の丘の攻略について話そうよ。そのために集まったんだし」
「そうですね、そうしましょう」
キリトが軽くうなずいてアイテムを取り出し、出てきたメニューを操作すると円形のホログラフィックがアイテムの上に出現した。
「うわぁ…！」
「これ、ミラージュスフィアっていうんだけど、スッゴい綺麗だよね！ボクもこれ見るの大好きなんだ」
ミラージュスフィアはアインクラッドの1階層分を丸々表示でき、マップとは違って木や町が立体的に描写できる。
２人でそれを眺めていると、ＮＰＣの人がデザートを持ってやって来た。それを皮切りにキリトが話を始める。
「お楽しみのところ悪いんだけど、食いながらでいいから４７層について説明させてくれ。まずはここが主街区でこっちが思い出の丘の入り口。…」
キリトがすらすらと説明をしていると店の入り口が開き、男が中に入ってきた。そのプレイヤーはボクたちの声が聞こえるか聞こえないかくらいの位置に座る。
「キリト、ちょっと耳かして」
「で、この辺の…どうした？」
男がＮＰＣに注文をしている隙にテーブルから身を乗り出してキリトに耳打ちする。
「さっき入ってきてあのテーブルに座ったのって…？」
キリトがその男の方を見て頷いた。きっとあのプレイヤーが連絡

役なのだろう。
「あの～、どうかしましたか？」
いきなり耳打ちをしたので話から置いてかれたシリカが不思議そうな顔をしてこちらを見つめている。
「なんでもないよ。それよりも続き、聞こ？」
露骨すぎる話の切り替えだったけど、シリカは何も聞かないでいてくれるみたいだ。
「えーっとどこまで話したっけ…。あ、そうそう、ここのモンスターについてだよな。ここのモンス…」
キリトが一通り話し終わったのを見計らって、明日の予定について相談することにした。
「ボクは何時でも良いけど…シリカは朝からでも大丈夫？」
「はい、何時でも大丈夫です」
「キリトは…」
キリトが申し訳なさそうに頭をかく。
「俺は、ちょっと用事が出来たから明日は厳しいかな…ユウキがいれば大丈夫だと思うから2人で行ってきてくれ」
用事と言ってるが多分ボクたちの安全のために動いてくれるのだろう。
「絶対にピナを生き返らせようね！」
「…はい！」
具体的な時間を決めてそのまま上にある宿屋の部屋をとって解散となった。
部屋着に着替えてベッドに座っていると部屋の扉がノックされる。
「どうぞー」
「夜中に悪いな」
キリトが苦笑いをしながら入ってくる。隣を叩いてベッドに座ってもらった。
「大丈夫、来ると思ってたから」
「そっか。ならわかってると思うけど、明日は洞窟からタイタンズハンドの連中をつける事にするよ」

「りょーかい！シリカのことは任せてよ」
２人で頷きあい、拳を合わせる。
「頼んだ。襲撃場所とかはメッセで送っとくから、付近に着いたら注意しといてくれ。シリカには絶対に転移結晶を持たせて…」
突然、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。
「すいませーん、あの、その…少しお話ししても良いですか？」
「どうぞー」
シリカが扉を開けて…
「ぱ、パートナーですもんね。お邪魔しました…」
扉を閉めた。
「ご、誤解だー！」
キリトに頼まれてシリカの誤解を解くはめになった。

フラワーガーデン

「うわー、綺麗ですねー」

４７層に転移した瞬間、目の前に広がる花園にシリカが歓声をあげる。

通称、フラワーガーデンと呼ばれるこの層は町やフィールドのいたるところに花が咲き誇っている。

シリカが小走りで花の前に行き、花をつついたりして見とれ始めた。

邪魔するのも悪いので後ろから見守っているとシリカが気まずそうにこちらに戻ってきた。

「こんなこと、してる場合じゃ無かったですよね。早くピナを生き返らせないと」

「じゃあ出発しようか。転移結晶の準備は大丈夫？」

「はい」

…ボクが脱出って言ったらすぐに脱出してね」

「でも…」

シリカが心配そうな表情でこちらを見つめる。

「大丈夫、ボクはシリカよりもレベルが高いからね。この辺なら１人になっても問題ないよ。じゃあ行こっか」

「はい！」

それでもやっぱり町のいたるところに咲いている花が気になるのか、シリカがキョロキョロしている。

「気になるんだったらもう少し花を見てても良いんだよ？」

「あ、いえ、そうじゃなくてですね。…ここってカップルの人が多いなぁって」

「ＳＡＯの中でもあんまりない観光がメインの層だからね。時間があったら色んな場所に案内してあげられたんだけどなぁ」

キリトが花に興味無かったし、出てくるモンスターが厄介だったからさっさと次の層の攻略を始めちゃったんだっけ。

実はボクもちょっと観光してみたい。

「それはまたのお楽しみにしておきます。それでなんですけど、2人でここに来たりとかするんですか？」
2人とはボクとキリトのことだろうか。きっとシリカはボク達が付き合ってると思っているのだろう。
「あー…ボクとキリトはそういう関係じゃないよ」
ボクとキリトはそういう関係じゃない。…そういう関係になっちゃいけないんだ。
「そうなんですか？お二人共凄く仲が良さそうでしたけど」
「1層からの付き合いだからね」
「最初からずっと一緒なのって素敵ですね」
ずーっとじゃないけどねとは言わずに、そうだねと返しておく。
それから話題はキリトへと移っていった。
キリトのことを話しながらフィールドに出る。
フィールドは広い草原になっていて、ピクニックでもしたら気持ち良さそうに見えるけど…圏外なので当然モンスターが出る。
「そこでキリトがビックリして落っこち…。シリカ！そっちにモンスター！」
ヴうシリカがいる方向に敵の反応があった。
そこから出てきたのは歩く花。もっとも花といっても可愛らしいものではない。
太い茎は下で何本にも枝分かれした地面を踏みしめながらうねうね動き、茎のてっぺんに乗ったひまわりの花のような部分には牙を生やした口がぱっくりと開いてピンクがかった赤を晒している。
…そう、見た目が気持ち悪いのである。
「やだってばー…」
そう言ってシリカが目をつぶりながら短剣をブンブン振り回しているので取り敢えず落ち着かせようとする。
「大丈夫、そのモンスターは花の下にある白い部分を攻撃すればすぐに倒せるよ」
「だ、だって気持ち悪いんですぅぅぅ…」
「あはは…、それはまだましな方だよ。奥に行くにつれてうねうね

ネバネバぬるぬるって感じですっごく気持ち悪くなるんだ」
想像してしまったのかシリカの体が一瞬強ばって…ソードスキルを放った。
勿論距離が遠くて当たらないが、技後硬直に陥る。隙をさらしたその瞬間、モンスターから伸びた2本の蔓がシリカに巻き付き逆さまに吊り上げた。
初めて見るその行動にポカンとしてしまう。
シリカが咄嗟にスカートを押さえつけると、そのモンスターはまるで楽しむかの様にシリカをぶら下げたまま左右にゆらゆら揺らし始めた。
「シリカ!着地してね!」
さすがに見ていられないのでソードスキルを放って助け出す。
シリカはうまく着地したものの、スカートを押さえつつ恥ずかしそうにこちらを伺う。
「見えてました…?」
励ますには、えーっと…。
「…大丈夫だったと思うよ!」
「見えてたんですね…」
「えーっと、その、モンスターしか居なかったしね?」
「ううっ、でもこんなんでへこたれてたらピナを蘇生できないし…。切り替えていきます!」
シリカが立ち直ってくれた事に安堵し、もう少し索敵に気を付けようと思った。
それからは複数体現れた敵は1体になるまでボクが倒し、残った奴をシリカが倒す形で少しだけレベリングをかねた実戦を行ってもらう。
もしも次に花が必要になったときでも、戦闘の経験があればボク達が居なくても大丈夫だろうと思う。
道は途中から林に変わり、次々と出てくるモンスターを倒して進むと木々の無い開けた場所に出た。
「うわぁ…!」

そこには色とりどりの花が一面に咲いていて、空中の花畑と言われている理由がよく分かる。
「ここに、花が…？」
「えーっと、確か真ん中にある岩のてっぺんに…」
シリカはそれを聞くなり、中央で白く輝いてる岩の元へ駆け寄ってってっぺんを覗く。
「ない…ないよ、ユウキさん！」
剣を納めて白い岩の元に着くと、シリカが振り返り涙目になりながら叫んだ。
「え、キリトが間違え…いや、芽が出てきてるよ！」
２人で見つめている中、その芽は伸びて葉を開き、先端にぷっくりとした蕾をつけた。
内側から光を放つ蕾の、その先端が段々と綻んでいき…光の粒を宙に撒きながら開いた。
２人でしばらく眺めていたが、シリカがこっちを見てきたので安心させるようにゆっくりと頷く。
ゆっくりと差し出された手に花が触れた瞬間、茎が消えて白い花だけが残った。
「これで、ピナを生き返らせられるんですね」
「中に溜まっている蜜を心アイテムに垂らせば良いんだって。でもこの辺はまだ強いモンスターが多いし、蘇生は町に帰ってからの方がいいかな」
シリカがうずうずしているので、早めに帰った方が良いだろう。
「よーし、じゃあ急いで町に帰ろっか！」
「はい！」
帰り道は運が良いことにあんまり敵と遭遇しなかったので、行きの倍近くのペースで丘を降りられた。
帰る途中でキリトから受け取ったメッセージによると、途中にある橋で待ち伏せが行われているらしい。
橋についたので少しだけ集中して索敵をしてみると、数カ所が一瞬揺らいだ。その隙に襲撃者の大体の位置を把握しておく。

「そこに隠れてる人、出てきなよ」
1番後ろに1人で隠れている人が居たので、ロゼリアだとあたりをつけてそこをじっと見つめ続ける。すると木の輪郭が揺らいでいき1人の女性の形をとった。
「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、侮ってたかしら？」
キリトは…あ、ロゼリアのすぐ後ろに隠れてるのか。
ロゼリアがシリカの方に視線を移す。
「その様子だと、首尾よくプネウマの花をゲットできたみたいね。…じゃあ、さっそくその花を渡してちょうだい」
「な、何を言ってるの…!?」
驚いているシリカに、ロゼリアの正体を明かす。
「そうはさせないよ。ロゼリアさん、ううん、オレンジギルド、タイタンズハンドのリーダーさん」
「でも、ロゼリアさんのカーソルはグリーン…」
この世界では犯罪を犯したプレイヤーのカーソルはオレンジ色に染まり、そんなプレイヤーの集まりをオレンジギルドと呼んでいる。
「オレンジギルドでも全員がオレンジじゃないことが多いんだよ。グリーンの人が町で獲物を見繕ったり、パーティーに入って待ち伏せしているポイントに誘導したり…レストランで聞き耳をたてるとかかな？」
「じゃ、じゃあロゼリアさんが居たのは…」
そんなシリカの問いに、ロゼリアが笑みを浮かべながら答える。
「パーティーの実力を見ながら狩り時になるのを待ってたのよ。1番の楽しみだったあんたが抜けた時はどうしようと思ったけど、プネウマの花を取りに行くって言うじゃない？あれ、旬だから結構良い値で売れるのよねぇ。それよりそこの剣士さん、そこまでわかっていてその子に付いていくなんて、馬鹿？」
「馬鹿でもなんでもないよ。だって、ボクたちはあなたを探していたんだから」
そこまで言うと、ロゼリアの顔が少しだけ険しくなった。

黒の騎士

「どういうことかしら？」
「１０日位前にシルバーフラグスっていうギルドを襲ったよね？メンバー４人が殺されちゃって、リーダーだけが逃げられた」
「ああ、あの貧乏な連中ね」
「リーダーだった人はね、最前線の転移門広場で泣きながら仇討ちをしてくれる人を探してたんだ。しかも、話を聞いたボクたちにそいつを殺してくれなんて一言も言わないで、監獄に閉じ込めてくれって言ってたんだよ。あなたにはこの人の気持ちがわかる？」
その問いに、ロゼリアが面倒臭そうに答える。
「わかんないわよ、マジんなっちゃって馬鹿みたい。私、嫌いなのよね。そうやってこの世界に法律とか持ち込んでくる人。この世界で人を殺したって現実で裁かれる訳ないじゃない。それにその人が本当に死ぬのかなんてわかんないんだし」
殺人を何とも思っていないその態度に怒りがわいてくるが、全員を捕まえるチャンスが来るまで我慢しないといけない。握り締めた拳に更に力が入る。
「餌に釣られたのは癪だけど、２人だけでどうするつもりなの？」
ロゼリアが片手を上げて２回揺らすと、道の脇に生えている木々の裏からカーソルをオレンジ色に染めた男達がぞろぞろと表れた。
その数、１０。
じゃらじゃらと色んなアクセサリーやサブ装備やらを身体中につけ、粘つくような視線でボクとシリカを見つめてくる。
「ゆ、ユウキさん…数が多すぎます、早く脱出しないと…」
少し後ろに立っていたシリカがボクの袖を引っ張って提案してくれているけど、正直この人達のレベルじゃあソードスキルを使われても全然ＨＰを持っていかれないだろう。
「大丈夫だよ、シリカ。ボクが脱出してって言うまではそこで転移結晶を持って待っててね」
安心させるように言うと、ボクは剣も抜かないで橋を渡りきる。

「ユウキさん！」
ボクを心配してくれるのはありがたいけど、今は少しだけまずい。
「ユウキ…？」
盗賊の1人が何かを思い出そうとする。
「その服装に盾無しの片手剣。それに僕っ子…。もしかして黒の騎士か？」
５０層のボス攻略で何人かの死人が出てレイドが崩壊しそうになった時、我慢できずに咄嗟に飛び出してキリトの制止も聞かずにボスのタゲを取ってしまった。
その時、血盟騎士団団長であるヒースクリフと2人でその後もターゲットを取り続けて前線を支えていたら、ヒースクリフの騎士っぽいキャラメイクに引っ張られたのかヒースクリフが白の騎士、ボクが黒の騎士と呼ばれる様になった。
ちなみに、キリトはその時にアタッカーをしていて、黒の剣士なんて呼ばれている。
殆ど2人で活動してるとはいえ、ボス攻略等には参加するため新聞の様なものに顔や格好が載る事がある。この男もそれで知ったのだろう。
「や、やばいよロゼリアさん。こいつ、いつもビーターと一緒に居るっていう、こ、攻略組だ」
盗賊達が一斉にどよめき始める。
一斉に転移結晶を使われたら全員を捕まえるのが難しいし、逃げられて潜伏されるとこの世界では見つけるのが難しくなる。
フレンドリストから追跡出来るかもだけど、最近はその事を気にしてフレンドにすらならない犯罪者が多い。
「こ、攻略組がこんなところに居るわけ無いじゃない！どうせ名前を借りたコスプレに決まってる。それに、攻略組でも1人くらいこの人数なら余裕だわよ」
「そうだ、それに攻略組ならレアなアイテムもコルも沢山持ってるに違いない！」
ハラハラして見ていたが、向こうは戦闘を選んだようだ。ボクとし

てはこれが1番都合が良い。
男達がそれぞれの武器を抜き、短い橋をドタドタと駆け抜けてボクを半円状に囲む。
ニヤニヤとした顔が気持ち悪いので、目を合わせないように視線を下げていると、それを諦めと取ったのか盗賊達の威勢が良くなる。
「死ねやぁぁ！」
「くたばれぇぇ！」
男達が口汚く罵りながら武器を振る。
体を通り抜ける刃物の嫌な感覚を味わいながらその場で攻撃を受け続ける。
「いやぁーーー！やめて、やめてよ！ユウキさんが、…し、死んじゃう！」
シリカが後ろで叫んでいるが、男達がそれで攻撃を止めるわけがない。
ＨＰバーを見ていると、攻撃を受けても少ししたら全部回復できてるのがわかる。
しばらく攻撃が続いたけど、一向に倒れないボクに男達が動揺し始めた。
それはロゼリアにも伝わったようで
「お前達、何をやってるんだい！さっさと仕留めな！」
再び攻撃が来るが、ボクのＨＰを減らすことはできていない。
攻撃が止み、盗賊達が動揺している今がチャンスだろう。キリトの1層で見せた不敵な笑みを意識して作る。
「無駄だよ。君たちの攻撃じゃいくら攻撃してもボクは倒せない。ボクのバトルヒーリングスキルで回復しきれちゃうからね。倒せるか試してみる？何時間でも付き合ってあげるよ」
やけくそになったかのように武器を振るい続けた男達だったが、一向にボクが倒れないのでさっきの言葉が本当だとわかったのだろう。
力の差を思い知ってもらうためにやったけど、ここまでうまく行くとは思っていなかった。
「ボクがその気になれば全員を相手にしても大丈夫だけど、降参し

て投降してくれるとありがたいかな。…レベル差がありすぎて加減できないかもしれないしね」
男達が諦めて項垂れる。しかし、そこでまだ諦めていない人が1人いた。
ロゼリアが転移結晶を掲げてどこかの町へ転移しようとする。
「転移！…っ?!」
掲げられた結晶にピックが突き刺さり、手から落ちる。地面にぶつかった結晶は効果を発揮することなくポリゴン片となって宙に消えた。
これはボクがやった事じゃないので、キリトがやったのだろう。ロゼリアがピックの飛んできた方向を凝視する。
「逃げられると思ったか?」
木の輪郭が揺らいでキリトが現れた。
「なっ…いつから!」
キリトがロゼリアの前に歩み寄る。
「ここに俺達の依頼主が全財産をはたいて買った回廊結晶がある。これでお前達には監獄まで飛んでもらうぞ」
まだ逃げる余地が有ると思っているのか、ロゼリアがその顔に再び笑みを浮かべる。
「もし、嫌だと言ったら?」
「全員殺す」
ロゼリアの笑みが凍りつく。
「と言いたいところだけどな。仕方ない、その場合はこれを使うさ」
キリトが取り出したのは毒を塗った短剣。
「レベル5の麻痺毒だから10分は動けないぞ。その間に放り込まれるか自分から入るか…好きな方を選べ」
ある男がこちらを見てきたので同じ短剣を見せつける。
「コリドー・オープン!」
キリトが短剣を仕舞うと回廊結晶を掲げて叫んだ。結晶が砕け散り、その前の空間に青い光の渦が出現する。
「畜生…」

男達が次々にその中に入っていき、光の中へ消えていった。
後に残ったのはボクとキリト、シリカと…地面に胡座をかいて座るロゼリアだけになった。
「やりたきゃやってみなよ。グリーンの私を傷つけたら今度はあんたがオレンジに…」
ロゼリアが発した言葉は最後まで続けられなかった。
キリトがロゼリアの襟首を掴み上げる。キリトがかなり怒っているのがわかってたから剣を取り出さないか心配だったけど、ただの杞憂に終わったようだ。
「言っておくが俺はコンビでギルドに入ってる訳じゃない。1日2日オレンジになっても、まあ大したことじゃないぞ」
キリトがこっちを見てきたので、頷いて肯定しておく。
襟首を掴み上げられて尚抵抗しようとするロゼリア。
「やめろ!やめろっての!…そ、そうだ、あんた達アタシと組まないかい?あんた達の腕ならどんな獲物だって…」
しかし、ロゼリアが言えたのはそこまでだった。
キリトが渦巻きの中にロゼリアを放り込むと共に渦が消え、また元の景色へと戻った。
そこで橋で待機してもらっていたシリカの事を思い出す。
「ごめんね、シリカ。本当は全部話したかったんだけどどこで聞かれてるかわからないから隠してたんだ。それに…怖がられるかもって思ってね」
シリカが首をブンブン首を振っていて、その様子だと許してくれたと思う。
やっぱり怖がられたみたいでシリカは言葉が出ないようだけど、まだモンスターが出現するフィールドなので町までは送っていかないと危ない。
「ボクが町まで送るね。キリトは先に戻ってるらしいから」
シリカにそう言って歩きだす。するとシリカがボクに声をかけた。
「あ、足が動かないんです」
振り替えって顔を良く見るとその表情に怯えた色は見えなくて、少

し嬉しくなって笑みがこぼれる。
手を貸して立たせてあげると、シリカも少しだけ笑ってくれた。
シリカを３５層の風見鶏亭まで送る道中、２人の間に会話は無かった。
ボクの部屋まで来ると、シリカが震えた声で話しかけてきた。
「ユウキさん…行っちゃうんですか…？」
襲われた直後で不安なのはわかるし、ボクたちが居れば大体の敵には対処できる。
でも、ここに留まってしまうと現実世界に帰るまでの時間が長くなってしまう。そうなったらボクと姉ちゃんがもう一度会うことが難しくなるだろう。
ボクたちが前線に戻った後不安が残らないよう、徹底的に組織を潰すためだけにあんな芝居までしたのだ。
「…５日も前線を離れちゃったからね」
「…そう…ですよね。あ…あたし…」
シリカが急に泣き出してしまい、慌てる。
怖いから引き留めたんじゃない。ボクたちと一緒に行きたくて、でもレベル差のせいでどうしようもない。
そんな風に感じているのかな。
「この世界の強さなんてしょせん幻想でしかないんだよ。そんなものよりもずっと大事なものがある。だから、ボクが現実世界に戻れたら…」
ボクにとっての現実世界に戻ることはＳＡＯのクリアとイコールではない。
病気が治ってメディキュボイドの外に出られる時。そんな望みの薄いことだけど、今はこう言うのが正解な気がする。
「その時は友達になろう」
「…っ！はい！」
シリカもようやく落ち着いたのか、今は笑みを浮かべている。
「じゃあ、蘇生してあげようか。その花の蜜を羽根にかけてみて」
「わかりました」

シリカが花を傾け、蜜を羽根に垂らした。すると一瞬眩い光が視界を覆い尽くし、シリカの膝の上にふわふわの羽根が生えた小さな竜が現れた。

ピナと呼びながら竜に抱きつくシリカを見て、さっき交わした約束を思い出す。

死ぬために生まれてきたボクだけど、もう少しだけ前向きに生きてみようかな。

そう、思うことが出来た。

圏内事件
昼寝

　攻略に必要そうなものをある程度買って店から出るとぽかぽかとした気温に柔らかく日が差し、いがらっぽくも湿っぽくもないそよ風が吹いていた。
　こんなに気象条件が揃う日は年に５日も無いのでじめじめとした迷宮区に入るモチベーションがだだ下がりとなっているのだが、ユウキはそんな事無いのだろうか？
　芝生の広場で昼寝でもしたらさぞ気持ちがいいだろう。
　それに、ユウキに休んでもらう良い機会にもなるだろうしな。
「今日は攻略を休んで、昼寝でもしないか？」
「うーん、攻略をお休みするのは申し訳ないよ。それに、あれも早く使えるようになりたいし」
　あれとはユウキに発現した、おそらくユニークスキルとなる二刀流のことだ。
　５０層のボスを倒した翌日にドロップ品をチェックしていたら見つけたらしい。アルゴにも聞いてみたがそのようなスキルが見つかった事は無いようで、やっかみなどが起こらないように情報は伏せてもらっている。
「ここんところ休んでないだろ？オフにした日もスキル上げしてるの、知ってるからな」
　ユウキが気まずそうに頬を掻く。
「クラインさんから聞いたの？」
　心当たりが有ったらしい。
「まぁな。１人でいたからどうしたのか気になってたみたいだぞ」
　見捨てて行ったにも関わらず俺の事を気にしてくれているようで、ありがたい反面申し訳なくなる。
「あはは、ばれちゃってたか」
「ＳＡＯじゃ何があるからわからないんだから体調をちゃんと整え

ておこうぜ。昼寝でもしてリラックスしてさ」
ユウキはユニークスキルを得た時からどこか焦っている気がする。ユニークスキルを得た責任を感じているのか、それとも別の理由か…。
俺が譲らないことを確信したらしい。ユウキが渋々といったようで首を縦に振る。
「良さそうな広場があるからそこに行こうぜ」
「しょうがないなぁ…」
２人で広場へ歩きだした。
広場に生えている木の元まで行き、芝生の上に寝っ転がる。
索敵のアラーム機能をセットしたので後は昼寝を楽しむだけ。なんだかんだいってユウキも横になるなりすぐに寝息を立てていた。
俺も寝ようとうつらうつらしていると、ザシッとブーツが芝生を踏みつける音が耳元から聞こえてきた。それと同時に鋭いお叱りの声が上から降ってくる。
「あなたたちは皆が必死に迷宮区に挑んでるのに、何をのんびり昼寝しているの！」
目を開けるのも辛いのでまぶたを閉じたまま適当なことを言って誤魔化すことにする。
「ユウキが起きるからもう少し静かにしてくれ。それに今日は年間を通して最良の気候なんだ。これを堪能しないでどうするんだよ」
「天候なんて毎日一緒でしょ」
もう説明もめんどくさいので話を打ち切る。
「お前も隣に寝てみればわかるさ。じゃあ俺はもう寝るから」
アスナが何か言ってるが、ぽかぽかとした陽気に意識を拐われ、そのまま眠りに落ちた。
３０分程うたた寝したあとはっと目を覚ます。
左ではユウキが未だに寝ていたのだが…何を考えたのかアスナが俺の右側で眠っているではないか。
ＳＡＯの中で５本の指に入る（と俺が勝手に思っている）２人の間に挟まれて寝るのはさすがに気まずい。

１度大きく伸びをしてから立ち上がり、近くにあったちょうど良い高さの瓦礫の上に座り込む。
時刻は昼前。最前線の街で呑気に昼寝しているプレイヤーは目立つ。
あるものは俺たちとアスナが一緒にいることに驚き、あるものは笑いながら通りすぎていく。
帰りたくなってきた…が、それはできない。
２人がハラスメント行為を受けるかもしれないし、場合によってはＰＫ行為が行われる可能性まである。
圏内では基本的に体力が減らないようになっているのだが、それにも抜け道がある。
昔俺が２人にした様に寝袋に入れてしまえば圏外へと人を動かせるし、眠っている人の手を勝手に操作してデュエルを申し込むといった方法だ。
暇潰しにボックスの整理をしているのだが、一向に起きる気がしない。
きっと、疲れてるんだろうな。ユウキはユニークスキルの熟練度上げをしながら、アスナはＫｏＢメンバーのレベリングを手伝いながら攻略のペースを一切落としていない。
ユウキは俺と一緒にやっているからある程度は休憩してるだろうがアスナは睡眠時間を削って深夜にｍｏｂ狩りでもしているのだろう。
その辛さは身に覚えがある。あの頃の俺も１度眠ったら数時間は絶対に起きられなかった。
寝ろと言ったのは自分なので起きるまで付き合う責任があるだろう。ストレージから飲み物を取り出して長期戦に備えることにした。
すっかり日も傾き夕方になった頃、アスナが小さなくしゃみと共に起きた。
時間を見てみるとたっぷり８時間程爆睡していた計算になる。せっかく待ったのでどんな面白い寝起きが見られるか楽しみにさせてもらおう。

「…うにゅ…」
謎の呻き声を出しながらアスナが体を起こす。ぽけーっとしたまま辺りを見回して状況を確認し、俺と目が合うと一瞬ビクッとしてから固まった。
アスナの表情が驚愕、苦慮、そして激怒と目まぐるしく変化する。
「な…アン…どう…」
謎言語を発したアスナに、最大級の笑顔を向ける。
「おはよう、良く眠れた？」
アスナはすぐさま立ち上がり、右手をレイピアの柄に当てた。剣を抜くか抜かないか葛藤している様にしか見えず、緊迫した空気が流れる。
しかし、そんな空気を壊すのんびりとした声が２人の足下から聞こえてきた。
「ふわぁー」
ユウキが回りを見て状況を確認する。
「あれ、ボク何で外に？って何があったの!?」
第３者の登場でアスナも正気に戻ったらしく、剣の柄から手が離れる。
「は～～。ご飯何でも幾らでも１回奢る。それでチャラ。どう？」
この一瞬で俺が何で寝かせたのかまで理解したようだ。このような直截さは嫌いではない。今度は本心からニヤリと笑う。
「だそうだ、ユウキ。じゃあ５７層に結構いけるＮＰＣレストランがあるからそこに行こうぜ」
「えっ？えっ？どういうこと？」
説明もそこそこに転移門へと向かった。
レストランに着いて着席した後、ＮＰＣを呼んで注文をとってもらう。早速来た食前酒で口を潤していると、アスナがギリギリ聞こえるくらいの声で囁く。
「まあ、何て言うか…今日は…ありがとう」
「へっ？」
驚愕した俺をジロッと見てもう一度囁いた。

「ありがとうって言ったの。ガードしてくれて」
「ま、まあユウキのついでだったしな。大したことじゃないさ」
そこで隣に座るユウキに視線を向ける。
「それより、あんなに寝てたってことはそれだけ疲れが貯まってたってことだろ。もっとしっかり休んどけよ」
「うっ…わかったよ」
そんなやり取りをみてアスナがニヤリと笑う。
「それ、君が言えた事なの？ユウキが居ない時変なことしてるでしょ。わざわざ下の層まで行ってかかし相手になにやってたの？」
「な、なぜそれを」
ユウキの視線が刺さる。
「1回用事があって下の層に降りた時に君の姿を見かけてね。広場から出てきたからそうなんじゃないかなぁって」
嵌められた！いや、でも何をやっていたかは見られていない様だしセーフだろう。
「い、いや、あれは遊びだからノーカン…」
「そのわりには大分消耗してたみたいだけどね」
「…キリト？」
ユウキの視線が俺の顔に穴が開くんじゃないかという位までに鋭い。
「じゃあ…これからは一緒にやるか」
この答えはギリギリ及第点だったらしい。ユウキの視線が柔らかくなる。
「そうだね。じゃあ今度の休みに一緒に特訓しよっか」
「それ、休みになるのか…？」
皆がプッと吹き出した、その瞬間だった。
「…きゃぁぁぁぁ！」
どこからか、紛れもない恐怖の悲鳴が聞こえてきた。

結成

「ユウキ、行くぞ！」

「うんっ！」

急いで立ち上がり店を出る。悲鳴が聞こえてきた方に向かって走ると、全身をフルプレートアーマーで武装した男が広場の教会らしき塔から首を縄で吊るされていた。しかし、ＳＡＯの中では窒息によって死ぬことはない。それだけではただのその胸には黒い短槍が刺さり、赤いダメージエフェクトを放出している。

「早く剣を抜け！」

恐怖で手が動かないのか剣を抜こうとしても中々抜けないでいる。

ピックを投げてロープを切ることは可能だが、万が一にも外れたピックが男に当たり、それが残った僅かなＨＰを削り切ってしまったら…？

そんな思考を巡らせていると、１つの人影が後ろから俺たちを追い越して塔の中に入っていった。

「君たちは下で受け止めて！」

どうやらアスナは階段を上って直接ロープを切ろうとしているようだ。

「「わかった」よ！」

男の元へダッシュして後半分くらいまで来たとき、男の目が空中のある１点を凝視した。

そこに有るのは恐らく男のＨＰバー。

「あっ…ダメだよ。そんな…なんで…」

後ろからユウキの声が聞こえた瞬間、男は青いポリゴン片となって宙に消えた。

男に刺さっていた剣が地面に落ち、広場に様々なプレイヤーの悲鳴が響き渡った。

「デュエルのウィナー表示を探してくれ！」

意図を理解したプレイヤーが即座に辺りを見回しはじめたのを確認して自分でも探す。

デュエルでは対戦者２人の間に必ず勝利者と試合時間がでかでかと表示されるため、それを見つけられれば誰がやったのかがわかる。
表示される時間は３０秒。周りにそれらしきものは見つからない。外に無いなら教会の中か？アスナが教会の男が吊り下げられていた窓から顔を出した。
「アスナ！ウィナー表示は有ったか!?」
「無いわ！システム窓もないし、誰も居ない！」
おかしい、圏内でプレイヤーのＨＰを無くすにはデュエルを全損決着で申し込み、受諾されないといけないはずだ。
タイムリミットは後１５秒も無い。数秒後、誰かが呟いた。
「…ダメだ、３０秒経った…」
いつもより暗い表情のユウキと一緒に教会に入る。２５層のボス攻略戦の時以来か。
教会の小部屋をひとつひとつ見て回るが索敵にも探知にも反応が無かった。ユウキが見た部屋も同じだったようで、視線を向けると少しうつむいて首を横に振った。
小窓の有った部屋に入るとアスナが眉間を強張らせて立っている。
「教会の中には、他に誰も居ない」
「隠蔽効果付きのマントで隠れている可能性は？」
「多分その可能性は無いよ。ボクたちの索敵スキルを誤魔化せるほどの装備なんて最前線でも見たことないしね」
「後、出口にはプレイヤーに隙間なく立って貰ってるし窓はこの部屋だけみたいだしな」
アスナも一応確認しただけだったのかそれ以上は言及してこない。
「ん…わかった。これを見て」
そこに有るのは座標が固定されていて動かせない机と、その足に結ばれた頑丈そうなロープ。ロープは男が吊り下げられていた窓から外に出ている。
「…どういうことだ、こりゃ？」
「普通に考えれば…あのプレイヤーのデュエルの相手がこのロープを結んで剣を胸に突き刺した上で窓から突き落とした…ってことに

なるのかしら」
ユウキも首をかしげて考え込んでいる。
「見せしめのつもりか…いや、それ以前に」
「ウィナー表示が無い、だよね。広場にいる数十人の人たちで見つけられなかったのはおかしいよ」
「でも…あり得ないわ！圏内でＨＰにダメージを入れるにはデュエルを申し込んで、承諾されるしかないのはあなた達だって知ってるでしょう！」
「ああ…」
「うん…」
３人で向かい合ったまま沈黙する。絶対にあり得ないことが目の前で起きたのに、誰が、何故、どうやって、その全てに見当がつかない。
沈黙を破ったのはユウキだった。
「このまま放置するのは良くないと思うんだ。圏内でＰＫ出来る方法なんてものが広まったら…」
「対抗手段を早く発表しないと大変なことになるわね」
「俺も同意見だ」
「じゃあ決まりね。あなた達には解決まで協力してもらうわよ。言っとくけど、昼寝の時間はありませんから」
「あはは…」
「昼寝したのはそっちじゃないか…」
第１層以来組まれる事の無かった３人組がここに復活した。

鑑定

「すまない、さっきの1件を最初から見ていた人、いたら話を聞かせてほしい」

広場にいる人達に呼び掛けると、数秒経ってから1人の女性がおずおずと進み出てきた。

不本意にも俺に少し怯えている様子だったのでアスナが代わりに対応する。

「ごめんね、怖い思いをしたばっかりなのに。あなた、お名前は？」

「あ、あの…私、ヨルコっていいます」

「じゃあ…最初の悲鳴も、君が？」

「は…、はい」

声が似ていると思ったがあっていたようだ。

「私、さっき殺された人と、友達だったんです。今日は、一緒にご飯食べに来て、でもこの広場ではぐれちゃって…それで…そしたら…」

もうこれ以上は言葉に出来ないといったように両手で口許を覆う。

「大丈夫？無理して話そうとしなくても良いんだよ」

ユウキが駆け寄って長椅子まで誘導する。腰を掛けさせ、ユウキとアスナが背中をさすっていると少し落ち着いたらしい。ぽつり、ぽつりと喋り始めた。

「あの人…名前はカインズといって…昔、おんなじギルドに所属していたんです。それで一緒に食事に来てたんですが…広場で見失って」

1度ぎゅっと目を瞑ってから震える声で続ける。

「周りを見渡したらいきなり協会の窓からカインズが落ちてきて、宙吊りに…しかも、胸に、槍が…」

「その時、誰かを見かけなかった？」

アスナの問いにヨルコは一瞬固まった後、ゆっくりと首を縦にふった。

「一瞬なんですが…カインズの後ろに誰か立っていた気がします」

「その人影に見覚えは？」

今度はわからないといったように首を横にふる。
「失礼だけど…カインズさんが狙われる理由に心当たりは？」
友人を失くしたばかりの人に聞くのは酷だろうがこれは聞かないわけにはいかない。
ヨルコは目に見えて体を硬くした後、そっと首を横にふった。
「そうか、ごめん」
ヒントが無かったことに少しばかりの落胆を抱いた。これでＳＡＯにいる数百人のオレンジ、レッドプレイヤーが捜査の対象になったといえる。ユウキは気づいてないようだが、おなじ結論に至ったのであろうアスナは力なく息を吐いていた。
１人で帰りたくないと言ったヨルコを宿まで送った後、広場で報告を待っていたプレイヤー達に圏内でも注意するよう伝える。
解散したのを尻目にどうやって犯人を絞り出すか考える。
「これからどうしよっか？」
ユウキが訪ねるとアスナがすぐに答えた。
「手持ちの情報を検証しましょう。出所がわかればそこから犯人を追えるかもしれない」
「うーん、そうなると鑑定スキルが必要だよね？アスナは上げてたりしない？」
「あげてないわ。君たちもよね？」
女子二人の会話に割ってはいる度胸など無く、ただ眺めている。
「今が１番忙しい時間だし、リズには今すぐ頼めないからなぁ」
「そうよねぇ」
武器や防具、アイテムの発注はふたりのプレイスタイルの差もあって別々に行っている。リズはきっと俺の知らない生産職のプレイヤーなのだろう。
話が詰まったところでようやく口を開く。
「だったら俺の知り合いの雑貨屋斧戦士に頼むとしよう」
アスナがすかさず口を挟む。
「エギルさんよね…雑貨屋も今の時間は忙しいと思うけど…？」
「しらん」

アスナの言葉を気にも留めず、容赦なくメッセージの送信ボタンを押した。
５０層に転移し、いつものように猥雑な通りを歩く。小汚ないこの町に白い騎士服を纏ったアスナは目立ち過ぎる。
俺としてはとっとと目的を果たしたいのだが、さっきお預けを食らったせいかユウキが食べ物の屋台に興味深々だった。匂いを嗅いだりして世話しなくキョロキョロしている。
「しょうがない…あそこで良いか？」
「やったー！行こ、アスナ！」
「え、ちょっとユウキ！」
なるべく混んでいない屋台を指差すと、ユウキがアスナの腕を引っ張って買いに行く。
串焼きを買い、食べながらこっちに戻ってきた。よっぽどお腹が空いていたのか満面の笑みである。
「うん、これ結構美味しいよ！はい、これキリトの分！」
差し出された串焼きを齧りつつ歩き、丁度無くなった頃雑貨屋の前に着いた。
店に入り、こちらに背を向けているエギルに声をかける。
「うーっす。来たぞー」
「…客じゃない奴にいらっしゃいませは言わん」
ムクレ声でそう告げると店のなかにいた客を謝罪しながら追い出した。
閉店の操作を行ってからようやくこちらを向く。
「エギルさん久しぶりー」
「久しぶりです、エギルさん。どうしても火急にお力を貸して頂きたくて」
ムクレていた顔がすぐさま崩れ、任せてくださいと胸を叩いた。
２階で事件のあらましを聞いたエギルは事の重大さを認識したようで両目を鋭く細めた。
「圏内でＨＰが０になっただとぉ？…デュエルじゃない、というのは確かなのか？」

「ウィナー表示をあの人数で見逃すとは思えないし、夕食を食べる前にデュエルを、しかも全損決短着モードで受けるなんてあり得ないよ」
「ヨルコさんと直前まで歩いてたから睡眠ＰＫの線も無いしね」
出されたお茶菓子を摘まみながらユウキが補足する。
「突発的にしては手口が複雑だと思うし…事前に計画されていたＰＫで間違い無いと思うのそれで…」
アスナがこちらを見て頷いたので現場から回収していた縄を取り出す。
「これを鑑定して欲しい」
男がぶら下がっていた側がまだ大きな輪になっているロープを見て、エギルが嫌そうに鼻を鳴らした後鑑定を行った。
「残念だがこれはＮＰＣショップの汎用品だ。ランクもそう高くない」
ロープの耐久値は男を吊り下げる一瞬だけもてば良かったのだろう。
「まぁそっちには期待してないさ。本命はこっちだ」
長さは1メートル半、柄にはびっしりと逆刺が生えている。突き刺さったときに抜けにくいようにしてあるのだろう。
ぶつけないようにエギルに渡し鑑定してもらう。
対した手がかりは得られないかもしれないと思っていた矢先、エギルが驚くべき事を口にした。
「ＰＣメイドだ」
俺、アスナ、ユウキに3人が体をガバッと起こす。
「本当か！」
プレイヤーメイドの武器には必ず鍛治師の銘が記録される。作ったプレイヤーに聞けば誰が発注、購入したのかがわかるはずだ。
「誰ですか、制作者は？」
アスナの声も切迫したものになっている。
「グリムロック…聞いたことねぇな。少なくとも、一線級の刀匠じゃねぇ。それに武器自体も特別なものって訳じゃなさそうだ」

返された短槍を受け取り、眺めてみる。鑑定結果では何の変哲もない武器のようだがどうなのか。エギルの鑑定スキルでは読み取れない効果があるのかもしれない。
短槍を逆手に持ち、自分の手に突き刺そうと振りかぶる。
振り下ろされた槍は、刺さる直前で止まっていた。
ユウキが少し涙目になりながら手首を掴んでいた。
「キリト！死んじゃうかも知れないんだよ！ボク、キリトにまで死なれたら…」
泣いて訴えてくるユウキを見たら、流石にもう検証をしようとは思えなかった。
「わるかったよ…もうしないから」
「…ほんとに？」
口だけでは許してくれなさそうだ。そっぽを向いてしまっている。
「わかった。疑うならこれを預かっててくれ」
未だに手に持っていた短槍をユウキに渡すと、ようやく少しだけこっちを見た。
「何が起こるかわからないんだから！そういう無茶はやめなさい！」
俺が何をしようとしたのか気づいたアスナが遅れて声をあげる。
女性人２人の反対もあって検証するのは無しとなり、話し合った結果ヨルコさんにグリムロックを知っているか聞くと決めた所でその日は解散となった。

黄金林檎

翌日、始まりの街に転移すると、転移門の四隅にあるオブジェに軽く寄りかかり、私服に身を包んだアスナがすでに待っていた。
「おはよう！アスナ」
ユウキが近づくとアスナがメニューから目を離し、体を起こす。
「おはよう、ユウキ」
「待たせたか？」
「大丈夫よ。それじゃあ…確認しに行きましょうか」
ゆっくりとかぶりを振って否定した後、少し声のトーンを下げてアスナが答えた。
「ああ…」
転移門広場の後方にそびえ立つ黒鉄宮へと向き、小さくため息を漏らした。
本来ではプレイヤーがリスポーンしてくる筈だったその場所には全プレイヤーの名前が記された石板があり、死亡したプレイヤーの場所には死亡した日時と原因が記されている。
ヨルコに教えてもらっていたカインズのスペルを確認しながら名前が書かれている場所を探していると、アルファベット順に並べられているためその名前はすぐに見つかった。
「日付は昨日で時間は同じ…死亡原因も貫通継続ダメージによるものってなってるな…」
「じゃあ…」
「圏内でＰＫが出来たって事になるわね。この事件、解決しないと大変だわ」
「それじゃあ、ヨルコさんにもう一回話を聞きに行くか」
「それしか無さそうだね。じゃあ行こっか」
圏内でＰＫが起きて人が死んだという事実が３人に衝撃を与え、転移門広場につくまで誰も喋りだす事が出来なかった。
ヨルコの泊まっている宿がある層まで転移してくると、ユウキが沈黙に耐えかねたようにアスナに話しかけた。

「そういえばアスナのその服可愛いね。どこで買ったの？」
話しかけられたアスナが服の裾を少し引っ張りながら答える。
「この服？アシュリーさんっていうお針子さんに注文したんだけど…そういうユウキは戦闘用以外に服は無いの？」
アスナに逆に問いかけられてユウキが一瞬固まった。
「あはは…実はこれと寝間着くらいしか持ってなくて…」
アスナの目が見開かれ、同時にこちらを向いた。服を買う時間くらい作りなさいといった幻聴が聞こえてくる。
「休日はとってるぞ…一応…」
「君達の事だから買い食いしかしてないんでしょ」
アスナの目が少し怖い。流石攻略の鬼と呼ばれるだけのことはあるなと失礼な事を考えていると、アスナの追求の矛先がユウキに移った。
「…はぁ、それにユウキもユウキなんだからね！この人につれ回されてるからといって全身黒ずくめになんてしなくて良いのに。身だしなみはちゃんとしなきゃ」
休日の食べ歩きに誘うのは6：4位でユウキの方が多いんだけど…とか良いじゃん黒。カッコいいじゃん…などと言ったところでやぶ蛇になるだけなのはわかっている。ここは2人の会話を見守ることにしておこう。
「今度の休みはいつなの？」
「5日後の予定だったけど…今前線離れちゃってるしなぁ」
「5日後ね。時間を開けておいて。服、買いに行くから」
「う、うん。わかった」
勢いに飲まれ、断りきれずにユウキが頷く。
ユウキと並んで話していたアスナが俺の前に出てきて振り返る。
「君も良いよね？」
「5日後は休日にします…」
気がついたら首を縦に降っていた。まぁ、ユウキの格好について気にしてるところが無いとは言えなかったし別に良いのだが。
「よろしい」

少し満足げなアスナの後ろ姿に、ユウキが着せ替え人形にされてへとへとになっている様子が目に浮かんだ。
そうこうしているうちに待ち合わせをしていたレストランに到着した。
レストランには既にヨルコが来ており、同じテーブルに1度黙礼をしてから座る。
全員が着席した後、アスナが話を切り出した。
「ねえ、ヨルコさん。あなた、グリムロックっていう名前に聞き覚えある？」
ヨルコがいぶかしむように小さく頷いた。
「はい。昔、私とカインズが所属していたギルドのメンバーです」
「実はカインズさんに刺さっていた黒い槍、その武器を作った人がグリムロックさんだったんだ」
ヨルコの目が見開かれた。
「何か思い当たることはある？」
ユウキが訪ねると、ヨルコは顔を伏せながら話し始めた。
「昨日話せなくてすみません。忘れたい、思い出したくない話しだったので。昔、ある事件が起こりました。そのせいで、私達のギルドは消滅したんです。ギルドの名前は黄金林檎って言いました」
事件は半年前の事。ダンジョンの探索中に敏捷を２０も上げる事が出来る指輪がドロップし、その指輪を売却するかそのまま使うかで意見が割れた。多数決の結果５：３で売却に決まり、競売にかけるためリーダーのグリセルダという女性が最前線の街に1泊する予定で出掛けたが帰ってこなかったのだという。
「後になって、私達はグリセルダさんが死んだことを知りました。誰が殺したのかは、いまだにわかりません」
「そんなアイテムを持ったまま圏外に出るはずがないよな。睡眠ＰＫか…」
「半年前なら、まだ手口が広まる直前だわ」
「偶然…ってことはないだろうな…」
そこまで言うとユウキがまさかといった様子で口を開いた。

「それじゃあ、指輪の事を知っていたギルドの人がやったってこと？どうしてそんな事を…」
ユウキの手が強く握りしめられているのに気がついたが、今は事件について情報を聞き出さなければならない。
「指輪の売却に反対した3人が怪しいって事か。それでグリムロックさんっていうのは？」
「グリムロックさんはグリセルダさんと結婚してたんです。いつもニコニコ笑っていたグリムロックさんと強くて綺麗なグリセルダさんはとてもお似合いで、仲の良い夫婦でした。もし昨日の事件の犯人がグリムロックさんだったら、あの人は指輪の売却に反対した3人を狙っているんでしょうね。指輪の売却に反対した内の2人はカインズと私なんです」
衝撃の告白に3人が息を飲む。
「じゃあもう1人は？」
「シュミットというタンクです。今は、攻略組の青連合というところに所属していると聞きました」
「シュミット…聞いたこと有るな」
あとちょっとで顔と名前が一致しないでいるとみかねたアスナが補足をしてくれた。
「青龍連合のディフェンス隊のリーダーよ。でっかいランス使いの人」
「あー、あいつか」
俺もユウキも顔が思い出せた所でヨルコが少し食い気味に話しかけてきた。
「シュミットを知っているのですか？」
「ボスを攻略する時に時々顔をあわせる、って位だけどね」
「シュミットに会わせてもらうことはできないでしょうか。彼はまだ今回の事件の事を知らないかも。だとしたら、彼も…もしかして、カインズのように…」
「シュミットさんを呼んでみましょう。青竜連合に知り合いがいるから、本部に行けばなんとかなると思うわ」

そこでユウキが立ち上がった。
「それじゃあ急いだ方が良いよね？アスナはカインズさんを呼びに行って。ボクたちはヨルコさんを宿に送って行くよ。宿に着いたらすぐに合流するね。…何が起きるかわからないから」
「わかったわ」
「それで行くか」
２人で索敵スキルを全開にして宿にヨルコさんを届ける。
「ボクたちが戻るまで絶対に部屋から出ないでね」
「わかりました」
しっかりと釘を刺してから宿を出る。アスナの方は呼び出すまでに３０分ほど時間がかかるようだ。
「時間があるなら、１つ検証したいことがあるんだけど…」
「…何がやりたいの？」
昨日の事を思い出したのか少し声のトーンが低い。
「その、貫通継続ダメージって圏外から圏内に入っても続くのかなって。ピックで手を刺すぐらいだし、危険は無いと思うんだけど…」
ユウキが仕方ないといったようにため息をつく。
「それくらいなら良いけど…」
２人でフィールドに出る。圏外になった瞬間ユウキが呼び止めた。
「ここでやろうよ。ここなら何が来ても圏内に逃げ込めるし」
右手に握られた回復結晶を見て大袈裟だなぁと感じるが自分を心配してくれているのに変わりはない。
グローブの耐久値を減らすのも勿体ないので外してからピックを構える。
スキルが発動し、振り下ろされたピックは手の甲に刺さった。
「思ったよりもダメージが入ったな…」
「一昨日ピックを新調してたじゃん。えーっとＨＰは減り続けてるね。よし、じゃあ圏内に入って」
ユウキが俺の体を圏内に向かって押す。圏内に入ったとたんに俺のＨＰは減少を止めていた。

「ＨＰの現象は止まったけど…感覚は残るんだな。町で武器を刺して歩くやつが出ないようにするためか…？」
すぐさまピックを抜くが手の中に金属があるという違和感がなかなか消えてくれない。
感覚を誤魔化す為に手をぷらぷらさせているとユウキがその手を両手で掴んで胸の前へと持っていく。
「ぎゅーー。これで嫌な感覚も消えたでしょ」
得意気に笑う姿に少しドキッとした。
これは女の子に手を握られたからであってユウキだからじゃない。…じゃないはずだ。

幻の復讐者

シュミットをアスナが無事に呼び出せたようなので青竜連合の本部に向かう。

「ユウキ、今回のＰＫってどうやったとおもう？」

黙っているとさっきの事を思い出して落ち着かないので質問を投げ掛けたところ、意外な答えが帰って来た。

「うーん、どうやってっていうのはわからないけど１つだけ違和感…？が有るかな」

「どの辺りにだ？」

「昨日カインズさんが死んじゃった時に何かが違った気がするんだよね。具体的にどこが違うかはわからないけど…。そういうキリトはどうなの？」

ユウキに言われて昨日の事を思い返してみるがよくわからない。取り敢えず考えていた案を出す。

「大まかに3通りだな。１つ目は正当なデュエルによるもの。２つ目は既知の手段のかけあわせによるシステム上の抜け道。３つ目は圏内の効果を無効化する未知のアイテムやスキルによるもの。…だけど３つ目は無いだろうな」

そこまで言うとユウキが首を傾げた。

「確かに3つ目だと犯人を捕まえるしか無くなっちゃうし違う方がいいけど…。どうしてそう言いきれるの？」

この理由については茅場明彦に憧れただけに確信が持てる。

「フェアじゃないからだな。認めるのはちょっと業腹だけど、ＳＡＯのルールは基本的にフェアネスを貫いてる。圏内殺人なんてこのゲームが認める筈が無いんだ」

「うーん、言われてみれば確かにそうかも？」

ユウキも確信とまでは行かないが言ってる事はわかったらしい。

どんな検証をしなければいけないか話し合っていると、青竜連合の本部に着いた。

正門に居た人に部屋まで案内してもらうと、中ではアスナがシュ

ミットに事件の概要を丁度話し終わったところだった。
「それでは行きましょうか。私達が護衛します」
「あ、あぁ」
明らかに体の強張っているシュミットを連れてヨルコの宿に向かう。幸いシュミットが襲われることもなく、無事に宿屋に入ることが出来た。
ヨルコが泊まっている部屋の中に入ると、そこには服を何枚も着こみ小さくなって椅子に座っているヨルコが居た。
話し合いが出来るように机を挟んだ反対側に椅子にシュミットを座らせ、自分は入り口の横の壁際に立ち、万が一誰かが入ってきたときに対応出来るようにしておく。
座ってからもそわそわとして落ち着かないシュミットが話を切り出した。
「グリムロックの武器でカインズが殺されたってのは本当なのか？」
ヨルコは小さく頷いて答える。
「本当よ」
感情を抑えきれないといった様子でシュミットが勢いよく立ち上がる。
「何で今さらカインズが殺されるんだ。あいつが…あいつが指輪を奪ったのか…？グリセルダを殺したのはあいつだったのか？はぁ…グリムロックは売却に反対した3人を全員殺す気なのか？俺やお前も狙われているのか？」
途中から声の勢いを無くし、そのまま座り込んでしまった。一方ヨルコの方もいかにも元気がないようで小さな声で話す。
「グリムロックさんに武器を作ってもらった別のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたらグリセルダさん本人の復讐なのかもしれない」
そこでシュミットが息を呑むのがわかった。
「だって圏内で人を殺すなんて事、幽霊でもない限り不可能だわ」
そこまで言うとヨルコはおもむろに立ち上がった。顔を両手で覆

い、ポツポツと喋り始める。
「私、夕べ寝ないで考えた。結局のところ、グリセルダさんを殺したのはメンバー全員のせいでもあるのよ！あの指輪がドロップした時投票なんかしないでグリセルダさんの指示に従えば良かったんだわ!!」
かなり精神的に追い詰められているようで段々と声が大きくなっていき、最後には絶叫となっていた。
しかしそこまで言うととたんに力が抜けたかのようにフラフラと窓際へと後退っていく。力なく窓枠に腰掛けると再び話し始めた。
「…ただ1人、グリムロックさんだけは、グリセルダさんに任せると言っていた…。だから、あの人には私達全員に復讐してグリセルダさんの敵討ちをする権利が有るんだわ」
シュミットがわなわなと震えながら頭を抱える。
「冗談じゃない…冗談じゃないぞ。…今さら、半年も経ってから何を今さら！」
俯いたままのヨルコに再び椅子から立ち上がって言い寄る。
「お前はこんな訳のわからない方法で殺されて良いのか！」
その時だった。ヨルコの方から何かが刺さる音がし、何かが飛んで来たかのようにヨルコが少し仰け反る。
襲撃者を確認しようと後ろを向いたヨルコの背中には黒いスローイングダガー。ふらりと倒れていき、窓から落下していく。すぐさま駆け寄り手を伸ばすが届かない。窓枠から下を見る。地面にぶつかり、パシャッとささやかな音をたててポリゴン片へと変わったのが見えた。
あり得ない！あんな小さなスローイングダガーが一瞬で中層プレイヤーのＨＰを削り切れる筈がないし、システム的に保護されている宿屋に物を投げ込むなんて事出来る訳がない！
とにかく襲撃者を捕まえなければ。窓の外を見渡すと屋根の上に人影が見えた。隣の家までは５ｍ。窓から飛び出そうとした時、背中を誰かに掴まれた。
「離せ！犯人を捕まえられるのは今しか無いだろ！」

「キリト！」
振り向くとそこには涙目になっているユウキが居た。
「無茶しないって約束したじゃん！キリトでもあのダガーが刺さったら死んじゃうかもしれないんだよ！無茶…しないでよ…」
ユウキの手は力なく震えていて、両膝をつき、すがりつくように背中を掴んでいる。その手を振り払うことなんて俺には出来なかった。
その間に襲撃者は転移で逃げていってしまったようだ。
部屋に残されたシュミットのフルプレートメイルが鳴らす、カチャカチャという音しか部屋には無かった。
背中を掴んでいた手をゆっくりとほどいてしゃがみ、俯いているユウキの頭に手を乗せる。
「止めてくれてありがとな、ユウキ。もうあんな無茶はしないから。許して…くれるか？」
ゆっくりと手を動かすと、その下でユウキの頭が小さく頷いたのがわかった。
手を離して立ち上がると、シュミットが不意に呟いた。
「…違う」
「違うって…何が？」
質問したアスナの方も向かず、椅子の上に縮こまって答える。
「違うんだ。あれは…グリムロックじゃない。グリムロックはもっと背が高かった。それに、それに…」
続けられた言葉は俺たちに大きな衝撃を与えた。
「あのローブはグリセルダの物だ。彼女が、俺たち全員に復讐しに来たんだ！」
そこまで言うとタガが外れたかのように笑いだした。
「ははは…幽霊だったら圏内でＰＫすることなんて余裕だよな。ははははは…」
弾かれたように上体を仰け反らせているシュミットに、抑えた声を投げ掛ける。
「幽霊なんかじゃない。２件の圏内殺人には何かシステム的なロジックがあるはずだ…絶対に…」

しかし、笑いが収まったシュミットは幽霊に怯えきっており、ただただ頭を抱え込んでいた。
「とにかく…俺を青竜連合の本部まで送ってくれ…」
シュミットを臆病だと笑うことが出来る者は誰1人としていなかった。
シュミットを送り届ける途中、グリムロックの背格好や特徴、お気に入りで殆ど毎日かよっていたという酒場を教えてもらった。
酒場の前の家に入り張り込みをしているが、それっぽい特徴の男は見つからない。
すっかり日も落ちきり、お腹が空いてきた。何か買ってこようかと提案しようとした時、俺とアスナの間に座っていたユウキが先に口を開いた。
「ボク、実はご飯用意してきたんだけど…食べる？」
ユウキって料理スキル取ってたか？そんな疑問をよそに、ユウキが取り出したのは3つの黒パンだった。
「…何で黒パン？」
首を傾げる俺とアスナに黒パンを渡すと、ユウキが更に何かを取り出した。
「じゃーん！クリーム！せっかく3人が揃ったし、また一緒に食べたいって思ってたんだぁ」
1層での事を思い出したのか、アスナの顔が少し赤くなっているのだが構わずに話し続ける。
「はいアスナ。使って使って」
「あ、ありがとう。ユウキ」
アスナがクリームを使ってユウキに返す。
「はい、キリト」
「よくまだ持ってたな…」
差し出されたクリームを使いユウキに返すと　、ユウキがワクワクしながらクリームを使い始めた。
黒パンに少しクリームを塗ったその時、クリームを入れた小さな壺がパシャというささやかな音と共にポリゴン片となって消えていっ

た。
「あーーーー!」
壺を持っていた手を見つめたまま、ユウキが絶叫がする。
「ユウキ、その、良かったら俺のと交換するか?」
「クリームはまだ有るから大丈夫」
なぜ絶叫を上げたのかがわからず再び首をかしげていると、顔を上げたユウキの顔は喜びに溢れていた。
「ボク、圏内事件のトリックがわかっちゃったかも」

黒幕

「ほ、本当か？」

思わず詰め寄ると、ユウキがどや顔でのたまった。

「圏内でＰＫすることなんてできないんだよ！」

「…？でもさっき事件のトリックがわかったって言ってたでしょ」

ユウキが気づく直前に見ていたのは耐久値の無くなった壺。それはプレイヤーが死亡する時と同じように消滅して…いや、１つだけ違う。

「そうか！俺たちが見てたのはポリゴン片と共にプレイヤーのアバターが消える現象だったということか」

「だ、だから、それがこの世界における死でしょ？」

未だに混乱しているアスナにユウキがメニューを可視化して見せる。

「ほら、フレンド欄のところ。ヨルコさんの欄がグレーになってないでしょ？」

アスナが自分のフレンド欄も開いてヨルコが生きている事を確認する。

「本当だわ…。でも、どうして死んでないってわかったの？」

「ボク、カインズさんが消滅するときに何かがおかしいなって感じてたんだ。死んじゃった人はなんにも残さずに消滅したっけ？」

アスナが顎に手を当てて考える。

「確かに、アクセサリーはその場にドロップするけど…。そうね、確かに圏内でフルプレートアーマーを着けたままの人が一切アクセサリーを着けてないなんてことは考えにくいわ。でもそれだけだったらポリゴン片と一緒に消滅した方法はわからないじゃない」

「人がアイテムと一緒に消滅する方法は…これだよ」

喋りながらメニューを弄っていたユウキが取り出したものは…

「転移結晶？それならポリゴン片はどうして出たのよ」

「実はシュミットを待っている間に実験してたんだけど、圏外で体に刺した武器は圏内に入っても体に刺さったままだったんだ。圏内

に入ったとたん俺、つまりプレイヤーのＨＰは保護されたんだけど…」
「アイテムの耐久値は保護されない…。成る程、私達が見てたポリゴン片はフルプレートアーマーのものだったってわけね」
流石の頭の回転の速さで俺達と同じ結論に達した。
「圏外でアーマーごと自分を刺して目立たないように回廊結晶で教会に移動。その後ロープで首を結んで窓から自分で飛び降りたんだろうな。アーマーの耐久値がきれると同時にテレポートすればポリゴン片と一緒にプレイヤーが消滅するっていう死亡エフェクトにそっくりな現象が起きるってわけだ」
ユウキも同じ意見のようでしきりに頷いている。
「それならヨルコさんは？圏内なら武器を刺すどころか体に触れることも出来ないはずだわ」
「刺さってたんだ、最初から。思い出してみろよ。俺達が部屋に入ってから事件が起こるまで彼女、１度もこっちに背中を向けてないぜ」
「窓から落ちたのは転移の時にコマンドを聞かれないようにするためだったのね。…てことはあの襲撃者は…」
「カインズだったんだろうな」
いつの間にか話の流れから完全に置いていかれていたユウキがそこで話を遮った。
「そこまではわかったんだけど、どうしてそんな事したのかがわからないんだよね。結局シュミットさんが追い詰められただけでしょ？」
言われてみれば確かにそうだ。逆にシュミットを追い詰めることが目的だったら、追い詰められたシュミットは何をする…？
「指輪の件について自白させることが目的、かしら。圏内どころか自分の部屋ですら安全じゃない。そうなったらお墓に行って洗いざらい全部話してグリセルダさんに許しを請うしかない。って思うでしょうし」
「そう…だな…」

唸っているとアスナが答えを出した。墓標があるなら俺でもそうするだろう。今でも時々、彼らがホームにしていた宿屋の木の下にお酒や食べ物を供えに行っているのだから。
黒猫団の事を思い出して少し気分が落ち込んでいるのを感じたのか、ユウキが勢いよく立ち上がった。
「事件も解決したし、これ食べたら打ち上げしようよ！アスナも良いよね？」
「もちろんよ」
アスナが笑顔で答えると、ユウキが再び二人の間に座ってクリームを取り出した。
「いっただっきまーす」
ずっと持っていた黒パンにクリームを塗ってかぶりつくユウキはとても楽しそうで、沈んでいた気持ちも少しだけ晴れた。
久しぶりに食べる黒パンは甘く、自然と俺も笑顔になっていた。
「今日はボクたちが奢るよ。久しぶりに一緒に食べれて楽しかったしね」
レストランでの打ち上げも終わり、席を立つ前にユウキが会計を済ませようとする。
「私が払うわ。昨日の護衛のお礼、まだしていないし。そういえば昨日からユウキがご飯代を払ってるけど、どうして君は払わないの？もしかして全部ユウキに払わせたりなんてしてないでしょうね？」
ニコニコしていたアスナが半目になってこちらを睨む。
「き、聞いてくれ。実は1週間に1回程飯代を2人で稼ぎに行ってて、その時の儲けをユウキに預けてるんだ」
険しい表情をしていたアスナが途端に呆れた表情になった。
「週に1度ご飯代を稼ぎに行くってどれだけ食べ歩いてるのよ…。でも稼ぎを共有してるってなんだか2人、結婚してるみたいね」
「へ？け、結婚？」
「ボクたちがけ、結婚してるみたいってどういうこと？」
慌てる俺達を見てアスナがニヤリと笑った。
「知らないの？結婚するとアイテム・ストレージが共通化されるの

よ。今まで隠せていた物が隠せなくなる。それって凄くプラグマチックなシステムだけど、同時にとってもロマンチックだと私は思うわ」
その言葉がどこかで引っ掛かった。
「お前、結婚してたことあるの？」
何も考えずに発した言葉に対する返答は底冷えする殺気と中腰で構えられた攻撃姿勢だった。隣でユウキもそれは無いよと言いたげな表情をしている。
「違うんだ、そうじゃなくて。さっき言ってただろ？ほら、ロマンチックだとかプラスチックだとか…」
コードが発動するギリギリの強さで脛を蹴ってから俺の記憶を補正する。
「だれもそんなこと言ってないわよ！ロマンチックでプラグマチックだって言ったの。プラグマチックっていうのは実際的っていう意味ですけどね、念のため！」
「実際的…ＳＡＯでの結婚が？」
アスナも怒りが収まったのか普通に答えてくれた。
「そうよ。だってある意味身も蓋も無いでしょ、ストレージ共通化なんて」
ストレージの共通化。その言葉がどうにも引っ掛かる。その時、ある発想が頭に浮かんだ。
「なあ、結婚相手が死別した時って共通化されてたストレージに入ってたアイテムはどうなる？」
ユウキとアスナが一瞬遅れてはっとした。
すぐさまＳＡＯのシステムに詳しいであろうアルゴにメールを送る。約１分後に帰って来たメールには、最悪の内容が書かれていた。
「死別の場合、ストレージに入っていたアイテムは全部結婚相手の物になるって書いてあるね…ということは…」
ユウキが返信メールを読むうちに青い顔になっていく。完全に途切れてしまった言葉をアスナが引き継いだ。
「指輪は…奪われて、いなかった…？」

小さな声に、俺はすぐには答えられなかい。１度、大きく息を吐いてから呟く。
「いや、そうじゃない…。奪われた、と言うべきだ。グリムロックは自分のストレージに存在する指輪を奪ったんだよ。彼は、幻の圏内事件の犯人じゃない。半年前の、指輪事件の黒幕だったんだ！」
衝撃の事実に３人とも愕然としていたが、ユウキが不意に気になった様子で言葉を発した。
「それなら、どうして圏内事件に協力したのかな？協力して犯人じゃないって思わせるため？」
ユウキの考えもあながち外れでは無いだろうが、事件のことが第３者に知られるリスクの方が大きい。それよりも大きな利点は何だ？今、恐らくカインズとヨルコはグリセルダが死んだ場所に居るだろう。未だに指輪事件の事を掘り返し、犯人を見つけようとしている２人が。もし、そこにシュミットが現れたのならば。もしも、シュミットが何らかの形で事件に関わっていたとするならば…。
「事件の関係者をまとめて始末できる…。まずい！もしかするとレッドが出てくるかもしれない！今、ヨルコさんは何処に居る？」
アスナがすぐさまフレンド欄を開いた。
「今、１９層のフィールドに居るわ」
「行くぞ、ユウキ！」
「わかったよ！」
すぐさま立ち上がり、店を出る。
「ちょっと待ちなさいよ！」
遅れて出てきたアスナが後ろから呼び止めているが止まっている暇はない。
「俺達は先に行くから、アスナは応援を呼んでくれ！」
間に合ってくれと願いながらひたすらに走り続けた。

解決

ユウキにフレンド欄からヨルコの追跡をしてもらう。
転移して目的の階に着いたら真っ直ぐ目的のエリアに向かう…のではなく門を出てすぐに曲がる。
「キリト、そっちじゃないよ！」
「いや、こっちで良いんだ。とにかく付いてきてくれ」
いぶかしみながらもついてくるユウキ。全力で走って３０秒もしない内に見えてきたのは、柵に囲まれた草原とその側にたてられた横に長い建物。
「…牧場？」
「ああ、そこの厩舎に用が有るんだ」
益々怪訝な顔になるユウキだがこれは説明するよりも実際に見た方が速い。
厩舎に入ると中にはお爺さんが１人で馬の世話をしていた。
「馬を１頭貸してくれ。２人乗りだ」
話しながら入り口に備え付けられた箱に手を置き、レンタル代のコルを支払う。
「そうじゃなあ…こいつを連れて行くと良い」
コルが支払われたのを確認し、鞍と手綱を持ってお爺さんが外に出る。口笛を鳴らすと１頭の大きな黒馬が走ってきた。お爺さんが馬の腹を数回叩くと鞍と手綱が勝手に装着される。
「ボク、馬に乗ったこと無いんだけど…」
「鞍にしがみついててくれれば大丈夫…だと思う。馬に乗ってる間は余裕がないからナビは頼んだ」
「う、うん」
先に馬に乗り、ユウキに手を差し出して引っ張り上げて前に座らせる。
「対毒ポーション持ってるか？とにかく今のうちに飲んどけ」
対毒ポーションを取り出し飲んでおく。ユウキも飲み終わったのを確認し、ユウキの両脇から手綱を握り、馬の腹をかかとで軽く蹴り

発進させた。
「うわぁ、結構揺れるね。でも、これなら走った方が速くない？」
「ＳＡＯの馬はこんなもんじゃないぜ。よし、スピード上げるぞ！」
「わわっ」
馬の腹を先程よりも強く蹴ると馬が走り始める。前に乗ったのが実はβテストの時。その時よりも上層に居るせいかスピードが段違いに速く、今にも制御を失いそうなのだが言わない方が良いだろう。
夜になり薄暗い森に突っ込む。ユウキがマップを見ながらナビをしてくれるのを聞き、木々の間を駆け抜け倒木を飛び越えていく。
途中何度も落ちかけながらもほぼ直線に走ること４分。目的の場所に着いた。そこは森の中にある小さな丘で中心にはねじくれた枯れ木。揺れる視界の中よく見てみるとその木の下でシュミットと思われるフルプレートアーマーに身を包んだ男が倒れており、首に肉切り包丁を当てられていた。
あんな趣味の悪い武器を使っているのはただ１人。レッドギルド、ラフィンコフィンのリーダーであるＰｏＨ。
「だめーーー!!」
「お、おい！大声だしたらっ」
ＰｏＨが警戒して飛び退くのを尻目に慌てて手綱を引っ張るがすでに遅い。馬が完全にパニックへと陥り制御を失った。急に止まったと思ったら後ろ足で立ち上がり俺達を振り落とす。
ユウキは俺の前に乗っていたわけで、後ろに振り落とされるということは…
「ふぐっ」
「ご、ごめん！」
ユウキがお腹の上に落下してきた。すぐさま立ち上がり一言謝るが、その目はラフコフのメンバーから離していない。飛び退いたＰｏＨの横に立つ男は２人。俺も立ち上がり索敵スキルを発動するが、ラフコフの１人に剣を突きつけられているヨルコとカインズ以外に他のプレイヤーは居ないようだ。
「ギリギリ間に合ったの…かな」

近くで止まっていた馬の尻を叩いてレンタルを解除する。解放された馬は厩舎の方に走っていった。
「よう、ＰｏＨ。久しぶりだな。まだその趣味悪い格好してるのか」
「…貴様に言われたくねぇな」
俺とユウキなら負けることはないと思うのだが奴らを拘束する手段がない。このまま引いてくれれば良いのだが…。
「俺達を相手にするか？１０分もすれば援軍が駆けつけるぞ。俺たちだけでも十分だとは思うけどな」
暫しの静寂。それを破ったのは小さな舌打ちだった。ＰｏＨが巨大な肉切り包丁を下ろして振り替える。
「行くぞ」
取り巻きの２人もそれぞれが持っていた武器を下ろし、薄暗い森の中へと消えていった。
ＰｏＨ達が完全に索敵スキルに引っ掛からなくなったので構えていた武器をしまう。俺が武器をしまったのを確認してユウキも武器をしまった。
アスナにＰＫが去った事をメールで伝え、ついでに伝言を残しつつヨルコの方に向き直る。
「ヨルコさん、無事で良かった！あの時、ものすっごくビックリしたんだから」
「全部終わったら、きちんとお詫びに伺う予定だったんです。といっても、信じてもらえないでしょうけど」
ヨルコが申し訳なさそうに苦笑した。
シュミットを信用して良いのかわからなかったのでヨルコにシュミットが関わっていたかを聞くと、指輪の代金の半分で回廊結晶の出口をグリセルダが泊まっている部屋に設定していた事がわかった。
嘘はついていない様だし、睡眠ＰＫが流行る前ならリーダーがＰＫされるとは考えていなかっただろう。手持ちの解毒ポーションをシュミットに渡して飲ませる。２０秒もしないうちに麻痺もとれたようでシュミットが鎧をガシャガシャ言わせて立ち上がり、喋れるようになったとたんにこちらに質問を投げかけてきた。

「助けてくれたのには礼を言うが、どうしてわかったんだ？」
「わかったって訳じゃない。あり得るって思ったんだ。おかしいと思ったのは３０分前…」
結婚のシステムを説明し、指輪事件について俺達が辿り着いた真相について話す。
話が終盤に差し掛かった頃、アスナからメールが届いた。
「メールを送って確認したんだけど…っとアスナからだ、ちょっと代わってくれ」
ユウキに説明を代わってもらいながら届いたメッセージを確認したところ、グリムロックを捕まえたと書いてある。
「嘘よ、グリムロックさんが…何で？それに、私たちを…始末しようと…」
返信を打ち終わるとユウキが指輪事件の犯人が誰なのかを言った所らしく、事件の当事者３人が目を丸していた。
その時、オンにしていた索敵スキルに２人のプレイヤーが引っ掛かった。
「詳しい事は、直接本人に聞こうか」
木々の間から長身の男性プレイヤーとアスナが現れた。
連行するときにアスナのカーソルがオレンジになっているかもしれないと思っていた俺は未だグリーンであるカーソルを見て安堵する。
はっきりと２人の人相が見えるところまで来た時、ヨルコ達が息を飲むのがわかった。どうやらグリムロックで間違い無さそうだ。
「なんでなの、グリムロック。なんでリーダーを…奥さんを殺してまで指輪をお金にする必要があったの」
涙ながらの絶叫に、しかしグリムロックはかすれた声でく、く、と笑う。
「…金？金だって？」
グリムロックがウィンドウを操作し始め、アスナ、ユウキ、俺の３人は咄嗟に剣の柄に手を伸ばした。
身構える俺たちの前で取り出されたのは、金貨の入った袋。落ちた

ときの音でかなりの金額が入っていると予想できる。
「これは、あの指輪を処分した金の半分だ。金貨1枚だって減っちゃいない」
「え…？」
困惑する俺たちを一通り見ると、グリムロックは乾いた声で言った。
「金のためではない。私は…私は、彼女をどうしても殺さなければいけなかった。彼女がまだ、私の妻である間に。…グリムロック、グリセルダ。頭の音が同じなのは偶然ではない。何故なら、彼女は現実世界でも私の妻だったからだ」
その独白はこの場に居る全員に大きなショックを与えた。ユウキとアスナが鋭く息をのみ、俺は小さく口を開けた。
「このデスゲームに囚われてから、可愛らしく従順であった彼女は変わってしまった。彼女のどこにそんな才能があったのだろうか。戦闘や状況の判断において彼女は私よりも遥かに優れていた。それだけではない。私の反対を押しきってギルドを設立し、メンバーを鍛え始めた。現実世界に居たときよりも生き生きとし、充実した様子で…。それを見て確信したのだ。私の愛したユウコは消えてしまったのだと」
不気味に笑う男のおぞましい独白はまだ続く。
「もし、現実世界で別れを切り出されるなんて事があったら、私はその屈辱に耐えきれない。それならば、合法的殺人が可能な今の間に永遠の思い出に閉じ込めたいと願った私を誰が責められるだろう…？」
あまりにも身勝手な理由に誰もが沈黙しているなか、1人ユウキが声を出した。
「屈辱…？自分を好きでいてくれて、これからだって一緒に生きていける…そんな人を…自分の言うことを聞いてくれなくなったから？そんな理由で殺しちゃうなんて…命を、何だと思ってるんだ！」
ユウキを見ると服の裾をギュッと握りしめ、涙を湛えた目でグリムロックを睨み付けている。もしかすると、ユウキがこの世界で初めて見せたかもしれない激情。その怒りは、しかしグリムロックには届か

なかったようだ。
「そんな理由？違うな、充分すぎる理由だ。君にもいつかわかるさ、探偵さん。愛情を手に入れ、それが失われようとしたときにね」
その瞬間、ユウキの表情に陰りが見えた。俺の右手が背中の剣に走りそうになり左手で咄嗟に押さえる。
「ボクは絶対に…そんな事にはならないから…」
先程の勢いを失い、途端に弱々しくなったユウキをアスナが背後から抱き締める。
「大丈夫、ユウキがそんな人じゃないってわかってるわ。それよりもグリムロックさん、間違っているのはあなたよ」
ユウキがそんな人じゃないのは俺にもわかる。だからこそ、ここで弱々しくなってしまった理由がわからない。困惑する俺を置いて状況は進んでいく。
「あなたがグリセルダさんに抱いてたのは愛情じゃない。ただの所有欲だわ。グリセルダさんが殺されるときまで決して外そうとしなかった指輪を、貴方はもう捨ててしまったのでしょう」
グリムロックが左手の手袋を脱ごうとしない以上そういうことなのだろう。
動かなくなったグリムロックに対し、ヨルコ達が処遇を任せてくれと言っていたので任せる。
3人が礼を告げつつグリムロックを確保して丘から立ち去っていくのを見送り続けた。
そうして丘に残されたのはオレとアスナ、そしてどことなく元気がなさそうなユウキだった。
暫くそうして立ち尽くしていたのだが、最初に沈黙を破ったのはアスナだった。
「…ねぇ、君は。もし仮に誰かと結婚した後に相手の人の隠れた一面に気がついたとき、君ならどう思う？」
ユウキの事を考えていたところに全く予想していない質問が飛んできた。自分なりに考えてみるも、出てきた答えは凄く浅いものだった。

「ラッキーだったって思うかな。だって結婚してるんだから今までの面は好きなわけだろ。だから、新しい面にも気がついてそこも好きになればに…2倍じゃないですか」
小学生のような理論だったが、アスナは一瞬眉を細めたあと首を傾け、小さく微笑んだ。
「ふうん、変なの」
「変なのってお前…」
微笑んでいた顔が急にムッとする。
「そのお前っていうのやめてくれない？普通にアスナって呼びなさいよ。代わりに私もキリトくんって呼ばせてもらうから」
「りょ、了解」
一気に捲し立てられ、俺は首を上下に振ることしかできなかった。
「また今度打ち上げでもしましょう。そうね、ユウキの買い物が終わった後にキリトくんに来てもらうのが良いかな」
そう言ってアスナが丘を降りていくので付いていこうとすると、ユウキが袖を掴んで止める。
何だと思って振り替えると、少し離れた丘の北側。木の根本にぽつんと立つ、薄い金色に輝く半ば透き通った1人の女性プレイヤーが見えた。
細身の身体を最低限の鎧で包み、細身の長剣と盾を装備した女性がこちらに微笑んでいる。髪は短く顔立ちは美しいが、その目には自分の剣でこのデスゲームを終わらせるという強い意志が秘められていた。
「あなたの意思は、俺達が引き継ぐよ。いつか必ず、このデスゲームをクリアしてみせる」
「うん、約束するよ。だから見守ってて欲しいな。…グリセルダさん」
「2人とも、行かないの？」
俺達が付いてきていない事に気が付いたアスナが戻って来た様だ。

一瞬アスナの方を見てから視線を戻すと、そこにはもうグリセルダさんの姿は無かった。ユウキと顔を合わせて、それから振り向く。

「今行くよ」

「明日から、また頑張らなきゃね」

そう言って笑うユウキの笑顔はいつもと同じように見えたのだが、何故か俺の胸に小さな刺を残すのだった。

2人の未来へ
システム外スキル

　圏内事件が解決してから5日後、今日はユウキがアスナに連れていかれてしまったので今日は1人。
　最近思い付いたシステム外スキルの練習をする事に決め、少し朝早いが宿屋を出る。本当はフィールドに出たい所だが前に1人で出たところユウキに怒られてしまったので辞めておいた方が良いだろう。
　広場に設置された案山子に向かって抜刀し、そのままスラント、バーチカル、ホリゾンタルと単発系ソードスキルを重ねて打つ。
（単発ならフルでブーストできるな、次）
　バーチカルアーク、ホリゾンタルアーク、スネークバイト。
（切り返しがやっぱり遅れるな…次）
　シャープネイル、サベージフルクラム、バーチカルスクエア、ホリゾンタルスクエア、デッドリーシ…
　やばいと思ったときにはもう遅く、案山子を切りつけるはずだった剣は案山子の土台を叩いていた。
　案山子のうち人形部分はシステム的に圏内でも攻撃できるのだが土台は破壊不可のオブジェクトに含まれる。ようするに…
「いだっ！」
　紫色の障壁が出現し、ズガァンと大きな音が鳴ると共に剣が大きく弾かれた。予期せぬ衝撃に剣がすっぽ抜け、手の感覚が無くなる。
（4連撃からはブーストされてないし、7連撃はブーストどこらかそもそも失敗か…実用性有るのか不安になってくるな）
　手をプラプラと振って痺れを取っていると、突然索敵スキルが反応し広場にプレイヤーが居ることを伝える。
　慌てて振り替えるとそこには見慣れたフードを被った女性がこちらに手を振っていた。
「悪いナ、驚かせるつもりはなかったんだヨ。たまたま近くを通りかかったら凄い音がしただロ？もしかして事件か？と思って様子を

見に来たんダ」
「ああ、悪いな…。それじゃあ俺はもう少しここに居るから…」
話を切り上げ、練習に戻ろうとした俺の肩をアルゴが掴み…にんまりと笑った。これは何かお宝な情報があると嗅ぎ付けた時の顔。
・キリト　は　逃げ出した。
・しかし、まわりこまれてしまった。
アルゴが逃がさないとばかりに俺の肩をがっちり掴む。
「ところでキー坊、どうして左手でソードスキルを打ってたんダ？」
「たまたまそんな気分だっただけだよ…」
俺の口から出たのはそんな誤魔化しの言葉。もちろんアルゴに通用するはずが無い。
「ふ～ん、左手でソードスキルを打っていたことは否定しないんだナ」
「あっ」
「とっとと何を検証してるのか言ってくれないとお前さんの恥ずかしい過去をユーちゃんにばらしちゃうゾ。例えば…そうだナ、昔むさ苦しい男性プレイヤーと1つのマントにく…」
「わかった！わかったから!!」
1人で練習していたのは他のプレイヤーに知られたくない…というか完成するまではばれたく無かったためなのだが、アルゴに見つかった時点で左手でソードスキルを打っていた事はばれるだろう。それなら情報を開示して口止めした方が良い。
「今のはシステム外スキル。スキルコネクトの練習だよ」
「ああ、体術スキルでソードスキルの隙を埋められるって奴カ。それならなんで左手で剣を振る必要があるんだヨ」
「そうじゃなくて、片手剣のソードスキルを繋げるんだ。うーん、説明するより見せた方が速いな。まあ見ててくれ」
メニューを開いて可視化してクイックチェンジで剣を右手に装備。そのまま左手の指でメニューを保持し、準備完了。
始めに3連撃ソードスキル、サベージフルクラムを発動。水平切りで案山子に埋まった剣が垂直に跳ね上がり、2連撃。最後の振り下ろ

しを決める寸前、意識を左手へと持っていく。
自分の右側と左側が別々に動く違和感をこらえ、メニューを保持したまま左手を後ろへと引き絞る。ソードスキルが終わった瞬間にクイックチェンジを発動すると、バーチカルスクエアの発動モーションが出来上がる。
左手に表れた剣を掴み、バーチカルスクエアを発動。本来ならサベージフルクラムの技後硬直で動けない所をバーチカルスクエアが無理やり身体を動かしていく。
垂直の４連撃が決まった所でソードスキルが終わり、今度こそ技後硬直に襲われる。
「これが片手剣のスキルコネクトだよ。現状２種類までしか繋げないし、左手でソードスキルを打っても自分で調節できないから…ってどうした？」
硬直が解けたので振り向くと、そこにはポカンと口を開けたアルゴがただ立ち尽くしていた。
「オレっちはとんでもない爆弾を拾っちまったみたいだナ…」
深々とため息をつくアルゴに言いたい事が無いわけではないが、グッと押さえて感想を聞くことにする。
「アルゴから見てどう思う？実用性があるのか微妙なところなんだよな」
「実用性の固まりじゃないカ！考えてもみロ。味方のソードスキルが終わった後の硬直時間を１人で、しかも攻撃しながら埋められるんだゾ。２発目のソードスキルを低位のにすれば硬直時間も短いだろうし、モブ１体なら２人でソードスキル乱発して勝てるんじゃないカ？」
「なるほど…参考になったよ」
硬直時間を稼ぐならダメージの量ではなく連撃数の多い技で繋がるものを探した方が良さそうだ。
「それよりもこれ、公開して大丈夫カ？結構な爆弾情報だと思うんだガ」
「うーん、絡まれるのもめんどくさいし情報元さえ出さないでくれ

たら良いよ」
「本来なら口止め料を貰うところだがこっちが情報を開示させた訳だしナ。りょーかい、その点は守るヨ。ところで適正な情報料はいくらだろうナ、これ…」
アルゴがうんうん唸っているが、これに関しては前から決めていた事がある。
「無料で良いよ。使えそうだったら公表するつもりだったしな。まぁ、公表の仕方は考えるつもりだったけど」
「良いのカ？オレっちとしてはありがたいが、数十万コル位の価値があると思うゾ」
アルゴが言うからにはそれくらいの価値があるのだろうが、実はこれが結構な疫ネタになりかねないのだ。
「実はそこまで価値が無いと思うんだよな」
「どうしてダ？」
「ソードスキル中に全く関係ない挙動をするのってかなり難しいんだぞ？ソードスキルをキャンセルしない範囲で動かさなきゃだし。それにクイックチェンジを使うタイミングがソードスキルが終わった直後じゃないといけないんだ。体感コンマ1秒以内」
アルゴも俺が何を言いたいのか察したのだろう。
「そんな曲芸みたいなこと戦闘中にとなると現実的じゃないナ。それに…あの感じだとミスったら結構ヤバイんじゃないカ？」
「実戦でミスると隙だらけになるし、最悪バランス崩して転ぶ」
「妙に実感がこもってるじゃないカ。…ユーちゃんの苦労が目に見えるヨ」
「ははは…」
二刀流の訓練の時はこっちがカバーしているのでトントンなのだが、まぁ言わない方が良いだろう。
「ソードスキル中に逆側でソードスキルの構えをとる。クイックチェンジで武器を左右入れ換えればソードスキルが発動する…って事で良いカ？」
「それであってるよ」

アルゴがメモ用紙を取り出して何行か書き込む。
「取り敢えずこれで良いカ。クエストもあるしオレっちはこれで失礼するヨ。この礼はまたいつかナ」
「期待して待ってるよ」
駆け出していくアルゴを見送り、ソードスキルの練習を再開した。

打ち上げ

夕方になりユウキとアスナが決めた夕食の時間に近づいてきたので、アルゲードの市場を冷やかすのは辞めて俺とユウキが1番気に入っているレストランへと向かう。

アルゲードはとても入り組んでいる上に景色が単調。目印になるようなものもなく何度か訪れても道に迷いかねないので1度広間に出てから再び路地に入る。

そのレストランを見つけたときにマップに付けておいたマーカーを確認しながら両サイドを塀や家で囲まれた路地を進む。15分ほど歩いていると少し場違いな、カフェのような外見の店が表れた。

「ようアスナ」

店の横に立っていたのはアスナ1人。

「こんばんは、キリトくん」

ユウキは?と思ったのを見透かされたようで質問する前にアスナが口を開いた。

「ユウキならちょっと遅れてくるから、先に入りましょ」

「あれ、今日はずっと一緒じゃなかったのか?」

「最後に連れていったお店がプレイヤーがやってる服屋さんだったんだけど、ユウキが私服を持ってないって言ったら色々と作り始めてね…。もう少しで作り終わりそうだったから、あと5分も経てば来るんじゃないかしら」

「そ、そうだったのか」

ユウキがおしゃれとは無縁だったのはほぼ俺のせいだと思うので申し訳なさを感じつつも、着せ替え人形にされたであろうユウキに黙祷を捧げる。

ドアを開けるとカランカランと音がなり、綺麗な内装が目に入る。

「ありがとう」

そのままドアを押さえていると俺の意図を察したアスナが先に店に入った。

「こんな場所にこんな店があったのね」

「かなり場違いだもんな」
キョロキョロと店内を見渡しているアスナを見てユウキも同じだったなぁと思いつつ、1番奥にある4人席に座る。
「それにしてもこんなところよく見つけたわね」
「食への飽くなき探求心が…というのは冗談でクエストで来たんだよ。それにしてもよく1人で来れたな」
冗談を言うと一瞬本気で呆れた目をしていたので慌てて本当の事を伝える。
「ユウキからマップデータを貰えばそう迷うような道じゃなかったわよ」
「そうだったか」
2回目に行こうとしたとき、ユウキは全然違う道を進もうとしていたのだが、アスナは大丈夫だったようだ。
「それよりもここのマップ殆ど埋まってるのね。マップデータを売ったら多くのプレイヤーに感謝されるんじゃない？」
「結構アルゴに世話になってるしマップデータを提供してたんだけど、公開しないように頼んだ」
「どうして？」
「この店の場所がばれたくない」
「あなたたち…」
食い意地の張った問題児だと思われている気が…いや、間違いなく思われてるな。しかし、これに関しては言い訳がある。
「あのアルゴが秘匿に賛成したくらいだぜ。それに関してはまあ、後でわかるさ」
「アルゴさんが？あの人、売れる情報は全部売ってるんだと思ってたわ」
確かにアルゴは情報を何でも売ってくれるイメージがあるが、情報元の要望は結構聞いてくれてる気がする。
「自分から情報を流さないって言ってるだけだけどな。ここの店をピンポイントで指定されたら情報を売るんじゃないか？店の名前知ってるならこの店の場所もわかってるだろうから、そんな事はまず

起きないと思うけど」
「そういうことだったの。…アルゴさんが隠すレストランならかなり期待出来そうね」
「まぁ食べてからのお楽しみってことで」
そこまで言うと入り口からカランカランと音が聞こえ、誰かの入店を告げる。
「来たみたいね。ちょっと目を瞑っていて貰っても良い？」
「あ、あぁ」
目を瞑っていると、席に近づいてくる足音が聞こえてくる。
「やっほー、アスナ。さっきぶり…ってどうしたの？」
「ユウキ、ここまで走ってきたでしょ。髪が乱れてるじゃない…これでよし！キリトくん、もう目を開けて良いわよ」
アスナに言われて目を開けると、そこにいたユウキは今までとは全くの別人だった。
「ど、どうかな？」
首もとに赤いリボンが付いた白いブラウスの上に紺色の上着を重ね、下はショートパンツに黒のニーハイソックス。そして最も異なるのが髪。ショートカットだった髪は腰の辺りまで伸び、暗めの紫色に染められていた。
ユウキの活発な感じが全面に出されつつ髪型やリボンなどで女の子らしさが見えるその装いは、ユウキにとても似合っていた。
「似合わない…よね…」
見とれて数秒固まっていたのを見て勘違いしたのか、少し落ち込んだ様子で首もとのリボンを弄り始めたので、慌てて言葉をかける。
「そ、そんな事はないぞ。よく似合ってる」
「えへへ、そう言って貰えると嬉しいな」
一瞬で表情を変え、ニコッと笑ったユウキに俺の心臓がドキリと高鳴った。
「注文まだだよね？早く決めちゃお！どれにしようかな～？」
俺の横に座ると、ワクワクした様子で机に広げられたメニューを眺め始めた。

「私、邪魔だったんじゃないかしら」
「何か言ったか？」
「何でもないわ。あなた達が秘密にしておきたい理由も知りたいし早く注文しましょう…ってここのメニュー、本物のカフェみたいね」
見慣れたメニューのはずなのに、少しの間内容が頭に入ってこなかった。
心を落ち着かせていると、２人共早々に注文を決めてしまったようだ。
ユウキがハンバーグでアスナがオムライスと…なら今日はカツカレーにしようかな。
「よし、俺も決めたぞ」
「じゃあ店員さんを呼ぶね。注文お願いしまーす」
ユウキが大きな声で呼ぶと、カウンターの裏から店員が出てきた。
「ハンバーグとオムライスとカツカレー。食後にパフェと紅茶を３つお願いします」
「かしこまりました」
ペコリとお辞儀をしてカウンターへと戻っていった店員を見届けた後アスナが口を開いた。
「パフェがこのお店を隠しておきたい理由なの？」
「そうとも言えるしそうじゃないとも言える」
「どうゆうこと？」
アスナが首をかしげたところでユウキが変わって答える。
「パフェ自体は限定品っていう訳じゃいなんだけどすっごく美味しいんだよ。値段もそこまで高くないし、毎日食べたいくらいには」
「それは楽しみね。でもそれだけだったら隠す必要は無いんじゃない？」
「このお店、少し狭いでしょ。お客さんがいっぱい来て入れなくなったら嫌だなって」
店内には４人席が２つとカウンター席が４つしかなく最高で１２人までしか入れないし、カフェは客の滞在時間が比較的長い。
客が増えると確実に混むだろう。

「ここってアクセスが良い訳じゃないし、そんなに人が来るかしら？」
「食べ始めればわかる」
そんな話をしていたら丁度料理が運ばれてきた。
「それじゃあ、県内事件の解決及び指輪事件の真犯人逮捕を祝して…かんぱーい！」
「「かんぱーい」」
いつの間にかユウキが注いでいた水で乾杯し、打ち上げが始まった。
始めにアスナがオムライスを口にし、目の色を変えた。
「これ、むこうの味とほとんど変わらないわね…」
「でしょ？ボクも初めて食べたときビックリしちゃった」
でも、それだけじゃない？と怪訝そうにしているアスナに気づかず、ユウキはハンバーグをぱくりと食べ、美味しそうに笑顔を浮かべる。
「わかっただろ？隠しておきたい理由が」
そう言いながらユウキの方をちらっと見ると、アスナは何が言いたいのかわかったようだ。
「これはアルゴさんも隠すのに賛成するでしょうね」
ユウキが食事するときはいつも嬉しそうなのだが、現実の世界での味に思い入れがあるのかここでは一段と嬉しそうに食べる。
たくさん客が来るかはわからなかったが、向こうと同じ味の食事ができるだけで少なくとも一時的には話題になるだろう。流石のアルゴもこの笑顔を曇らせる可能性がある中で情報を売る気は無くなったようだった。
ユウキが教えてあげようと強く推してくるので紹介したのだが、前もって釘を刺す形になってしまったことに本人は気付いていない。
食事をした後こっそり「あの笑顔は反則だロ…」と文句を言われたが返す言葉もなかった。

異変

デザートまで食べて一息ついたので気になっていたことを尋ねる。
「その髪どうしたんだ？」
長髪にまだ馴れていないのか髪の毛の先をいじりながらユウキが答える。
「ああ、これ？昔は髪長かったんだってアスナに話したらじゃあ伸ばしてみたら？って言われてね」
「せっかくどんな髪型にでもできるのよ？色々試さないと損じゃない」
「髪が長かったら戦闘の邪魔には…まぁアスナをみてれば大丈夫か」
余計なことを言うなと向けられた視線に慌てて言葉を取り下げる。
「キリトくんも伸ばしてみたら？顔も中性的だし結構似合ったりして」
「あ、それボクも見てみたいかも！」
「いや、伸ばさないからな」
詰め寄ってきたユウキの肩を押して座り直させる。
「色はどうして変えたんだ？」
「ええっと、それは…」
ユウキが言いにくそうにしていると、アスナが変わりに答えた。
「女の子の２つ名が黒の騎士なんて可哀想じゃない。髪の色を変えたら全身真っ黒にはならないし、２つ名も変わるかなって」
黒の騎士ってちょっとカッコいいと思っていたのだが、確かに女の子につける物では無いかもしれない。それに、ユウキの反応を見るにあんまり嬉しくない２つ名だったのだろう。俺がつけたわけでは無いとはいえ、黒ずくめだったのは俺のせいな部分が大きいので反省する。
「これからなんて呼ばれるんだろうな？紫の騎士ってゴロ悪いし」
「…別に２つ名なんて恥ずかしいだけじゃない。呼ばれないのが一

番よ」
「それもそうだな…って、ん？」
腕に軽い衝撃が来たのでそちらをみると、ユウキがもたれ掛かって寝息をたてていた。
「おーい、大丈夫か？」
肩を軽く揺するが少し身じろぎしただけで目を覚まさなかった。
「いろんなところに連れ回し過ぎちゃったかな」
「うーん、一回寝ちゃうとなかなか起きないからな…。今日は解散でも良いか？」
「それは構わないけど、ユウキはどうするの？」
「おぶって帰るよ。何でかはわからないけど俺が触ってもハラスメントコードが出ないらしいし。接触回数とかが関係してるんじゃないかってみてるけど」
「ふーん、そうなの」
会計を済ませて店を出る。転移門前広場まで行く途中で、アスナが一向に起きる気配の無いユウキを心配するように尋ねた。
「最近ちゃんと寝てる？私が言うのもなんだけど2日前線を離れたからって攻略のペース上げすぎじゃない？」
「いや、最近はペース落としてるくらいだし…。おかしいと思うか？」
眠りに落ちるのが急すぎる。省略した部分はアスナも感じていた様だ。
「私みたいに倒れた感じじゃなかったからそういう体質？ってこともあると思うけど」
「５０層突破した辺りから時々こう急に寝るようになってさ。だから元々の体質では無い筈なんだけど」
心当たりはある。
丁度５０層を越えたタイミングでユウキが見つけた二刀流。実際に試そうとなり両手に剣を持って敵に向かっていった彼女だったが、５分もしないうちに剣を投げ出していた。
真似してわかった事だが、右手と左手で左右バラバラに攻撃するの

はかなり難しい。どちらかに意識が行きすぎるともう片方が全く機能しなくなるし、両手で攻撃するのに意識しすぎると踏み込みやからだ運びが適当な弱々しい攻撃しか出せなくなる。
ここのところ近くに誰もいない時は二刀流を積極的に使用しているため、精神的な疲労が溜まっているのだとは思う。
その分休憩は多めにとっているし敵が1体ずつしか出ないような場所を選んでレベル上げをするといった対策をとっていたのだが、その程度では足りなかったのだろうか。
そこでアスナの呟きが思考を遮った。
「まるで眠らされてるみたいね」
「眠らされるってそんな事ゲームマスターだったとしてもできないよ。せいぜい…」
そこまで言ってあり得ない話ではないことに気づく。眠らされるといってもシステムによる物ではなく、現実の体の話だ。現実の体を眠らされるとしたらどんな時だろうか。
「そんなに考え込まなくても大丈夫でしょ。ほら、ユウキだってこんなに気持ち良さそうに寝てるんだし」
考え込んでいたのがばれ、アスナがおぶられているユウキの頭を撫でながら明るく笑う。耳元から聞こえてくる寝息も規則正しく、苦しそうではない。
「そうだな」
顔を上げるといつの間にか転移門広場についていた。
「ユウキに今日は楽しかったって伝えといてね。じゃあ、次のボス戦で、かな？次も多分私が指揮を取るから。サボらないように」
「ああ、その時はお手柔らかに頼むよ」
宿まで戻り、ユウキをベッドに寝かしつける。窓から差す月光を浴びたその寝顔は髪型が変わったせいか物語に出てくるような、どこか現実離れした存在に思えてしまう。目を離したら夢のように消えてしまうかもしれない。そんな思いがふとよぎり、気がついたらユウキの手を握っていた。脈は無いものの温かく、緩く握り返してくるその手はユウキがしっかりと生きていることを伝えてくれる。

今までも何度か同じ事が起きてその翌日にはケロッとしていたので今日も大丈夫だろう。
「考えすぎ、だよな」
悪い方へ悪い方へと向かっていく思考を無理やり中断し、部屋から出る。
明日からもう少しユウキの体調に気を配ろうと誓い、その日は寝ることにした。
翌日、俺は強い後悔の念に駆られていた。その可能性にどうして気づかなかったのか。それが目に飛び込んだのは朝食をとろうとユウキを呼びに行った時だった。
『黒の剣士が寝ている美少女を宿にお持ち帰りしている所を目撃!!』
ユウキの部屋をノックしたら何故かアルゴが出てきた。まず、それはいい。だが、その突き出された右手に持っている紙が問題だ。
思わぬ事態に脳の処理が追い付かず硬直していると、アルゴがニヤニヤしながら肩を叩いてきた。
「とうとう嫌われものからお尋ね者になっちまったナ」
「……はぁぁぁぁ!?」
１０分後、そこには爆笑しながら昨日の成り行きを説明しているアルゴがいた。
「感謝するんだぞ、キー坊。オレっちが気づいて止めなかったら今頃攻略組にこいつが流れてたんだからナ」
そう言って紙をピラピラさせているアルゴの言葉で最悪の事態にはなっていない事がわかり安心する。
「心臓に悪いからやめてくれ…」
どうやら昨日、アルゴの知り合いの情報屋が転移門広場で少女をおぶっている俺を見て追跡していたらしい。その情報が攻略組の情報を買っていたアルゴに流れ、流出するのを防いでくれたらしい。
「いやー、前からかわいいとは思っていたガ、服と髪型を変えるだけでユーちゃんがこんなに可愛くなるなんてナ。十中八九ユーちゃんの事だと思ってたけど、外見の話を聞いたときにちょっと不安になっ

ちまったヨ」
「えへへ、その、ありがとう」
照れているユウキから特に体調が悪そうには感じなかった。仲良さげにしている2人を見ていると急にアルゴが振り向き、口許にニヤリと笑みを浮かべた。
「それよりキー坊。オレっちお腹すいちゃったナー。どっかの誰かさんの為に動いてたせいで朝飯もまだ食ってないんだよナー」
「…好きなだけお食べください」
結局そのまま朝食を取りに行くこととなり、朝食からフルコースを頼むアルゴを所持金の心配をしながら眺めることになったのだった。

夜景

アスナと夕食をとってから5日後。今日は５６層にある火山エリアへと足を運んでいた。目の前ではユウキが剣を2本握り、体が黒曜石でできたゴーレムと戦っている。

最前線を離れここに来たのはユウキが二刀流の特訓をしたいと言い出したからだが、ここを選んだのにはちゃんと理由がある。

１つ目はこのゴーレム。打撃以外の攻撃への耐性がものすごく高い代わりに動きが遅め。そのため二刀流で放つ高威力のソードスキルを数発耐えてくれ、もしユウキが失敗したとしてもカバーがしやすかった。

２つ目はここの不人気さ。暑すぎるせいで地形ダメージが発生し、タンク職等のアジリティの低いプレイヤーは地形ダメージが発生するエリアを通る度に頻繁に回復しなくてはならない。一方軽装備のプレイヤーではどうかと言うと、ゴーレムを素早く倒すには攻撃力が足りず、1戦辺りの地形ダメージがかさんでしまいこれまた頻繁に回復が必要となる。

となると囲んで一気に倒したいが、ゴーレムの大きさはせいぜい2メートル。武器を振り回しがちな打撃武器では味方が邪魔になるといったようにとにかく戦いにくいのだ。

モブのレベルが高いわけでも無いため苦労に見合った経験値も貰えず、殆ど人の来ない過疎ダンジョンとなったのだった。

「やぁっ！」

ユウキが気合いと共に剣を振るう。打撃以外の攻撃が通らないと言ってもそれは適正レベルでの話。１，２発目はレベル差もありゴーレムの体力をいい感じに削っていたのだが、ゴーレムの反撃が始まるとそれを避けるのに意識を割くためか目に見えてダメージが減っていた。

振り回される腕を屈んで避け、膝のバネを使った両手での切り上げ。右手側の剣はしっかりとゴーレムを捉え大きなダメージとなったが、左手側の剣には力が殆ど入っておらずゴーレムに当たって弾か

れてしまった。上に振り抜かれた右手と下に弾かれた左手。敵の前で両手を広げ、隙だらけとなったユウキにゴーレムの腕が振り下ろされ…

「ここまでにしとくか」

るまえにソードスキルを放ち残りの体力を消し飛ばす。

「ありがとー、キリト。うぅ…うまくいかないや」

「段々うまくなってるって。ソードスキル無しで８割削ったの初めてだろ？」

「そうだけどさぁ…。キリト、倒してたじゃん」

それは昨日の事。なかなかゴーレムを倒せず行き詰まった時、ユウキにやってみてと言われたので休憩にもなると思い剣を２本持ってみた。すると片手剣による擬似的な二刀流の練習の成果が出たのか善戦。ユウキよりもＳＴＲを高く振っているのもあり、２０体目程で体力を削りきれたのだった。

その後、俺の動きを真似し始めたユウキは確かにＤＰＳが増えたのだが、さっきみたいな隙を見せることも増えてしまったように思える。

あっさりとという訳ではなかったのだが、出来てしまったことは事実。非常に気まずいので話を逸らしにかかる。

「今でもソードスキル主体にできれば最前線でも使えるんじゃないか？」

「…できないの知ってるくせに」

「ああ、…確かに流石にその剣と同格ってなるとなぁ」

じとっと睨み付けてくるユウキをみて話の逸らし方に失敗したと思いつつも、ソードスキル主体で立ち回る方法が無いか考える。

二刀流のソードスキルは極めて強力だが装備している２本の剣に攻撃力の差がある時、弱い方の耐久値が削られてしまうといったデメリットがあった。

ユウキが装備している剣はアニールブレードから始まり、歴代の武器を真材として引き継いできた物。今使っている剣はその中でも特別で、出来上がった時点で無数の戦闘を経験した武器と似たような輝

きを放っていた。
この剣と同格かそれ以上の武器となると、未だに装備できずストレージに眠っているエリュシデータ位しか思い付かない。
「また出てきたぞ」
索敵スキルに反応が有ったため再び話を逸らしにかかる。ユウキも本気で非難してたわけではないらしく、切り替えて再び切りかかっていった。
2分後、そこにはポリゴン片となって消えていくゴーレムとうなだれているユウキが居た。
「またダメだったぁ…」
「今日はここまでにしておこうぜ。そろそろ戻らないと日が落ちるし」
「もうちょっとで何かがわかりそうなんだけどなぁ。ねぇ、あの場所で一泊するのはダメ…かな？」
ユウキの言うあの場所とはこのダンジョンの行き止まり。火口湖の湖面よりも少し高いところにある、黒曜石で出来た体育館程ある大きな空間。初めて来たときは一風変わった様子に期待をしたのだが、一通り探ってみても宝箱はおろか動くものが何一つないただただ殺風景なエリアだった。それがわかってからはモンスターの湧かないいわゆるセーフエリアとして使っている。
ちなみに眼下に広がる火口湖は風がないため鏡のように風景をそのまま写して綺麗なのだが、入るとダメージを受けるトラップだったのは相当質が悪いと思う。
「確かにここのところ2日で敵ｍｏｂは見てないけどな…」
どうにも何かありそうな場所に長居する気にはなれないが、この階層の敵なら問題無いとも思う。恐らくだが階層ボスとまではいかなくともフィールドボスなら1人で対処できるだろう。
悩んでいる俺を見て、ユウキも無茶を言ったと思ったのだろう。
「ごめんごめん。じゃあ帰ろっか」
明るく気にしていないように振る舞っているが、1年以上近くにいたらそれが本音じゃないこともわかる。

それに彼女がわがままを言ったことは今まで1度もない。初めて聞く相棒のわがままが特訓のためというのもどうかと思うが、できるだけ叶えてあげたいと思った。
ダンジョンの出口の方へ歩いていこうとしたユウキの肩手を乗せ呼び止める。
「わかった。その代わり明後日1日休みを取るぞ」
「ありがとう、キリト！」
振り返ったユウキは嬉しそうに笑っていたが、その目が焦りを告げていた。
「ゆっくりでもいいんだぞ、二刀流が無くても今のところ攻略はどうにかなってるんだからな」
気づかれてないとでも思っていたのだろうか。ユウキがはっと顔をあげて目を見開く。
「あはは…ばれちゃってたかぁ」
困ったようにポリポリと頭をかいて、それから下を向いた。
「…うん、そうだね」
そう告げるユウキが顔をあげていないことに嫌な予感がしていたのだった。
「っこれで！とどめだぁぁぁ！」
大きく振り抜かれた右手の剣がゴーレムを切り裂き、ポリゴン片へと変える。
「やった～！やったよ、キリト！」
ダンジョンで1泊することを決めてから2時間後、ようやくユウキが1体目のゴーレムを倒すことに成功した。
「おめでとう、ユウキ」
右手をあげ、ユウキとハイタッチを決める。
「ありがとう！よーし、感覚を忘れないうちにもういっちょいくよー！」
「夜の見張りもあるから程々にな」
「はーい」
テンションが上がりすぎて失敗しても大丈夫なように剣を抜いて

軽く構えるのだった。
そこから１０回ほど戦闘したが倒せた回数は3。さらに連続でゴーレムを倒せた回数は1回も無いため実践で使うには不安定さが怖い。
今日のところはここまでにして引き上げ、泊まる予定の場所に向かうことにした。
洞窟の中は溶岩で明るく照らされていたのだが、夜となった今黒曜石のみでできた空間は飲み込まれそうなほど真っ暗。松明で照らされた範囲以外何も見えないため壁づたいにゆっくりと奥に進んでいく。横穴が開いている場所が見えると、そこだけは月光が射し込み少し明るかった。
「あそこならギリギリ戦闘もできそうか。しっかし、まさかここまで暗いとはな」
「ここまで暗いと何かいても気づけなそうだよね」
「索敵に反応ないし大丈夫だろ。それよりも早く夜営の準備して飯にしようぜ」
「ごめんね、遅くまで付き合わせちゃって。その代わりっていったらなんだけど夕飯はボクに任せて！」
そんな話をしているうちに横穴についたのだが、少し前を歩いていたユウキが横穴の外をみた瞬間に動きを止めた。
不思議に思って後ろから覗き込むと、ユウキが足を止めた理由がわかった。
夜空一面に輝く星。それが湖に反射することで、まるで星の海に飛び込んだかのような光景が広がっていたのだ。
ユウキと並んでその景色を眺める。
「うわぁ～。綺麗だね」
「何にもないと思ってたけど、まさか観光スポットだったとはな」
「昼でも綺麗だったよ？たぶん他にも似たような景色があったから印象に残らなかっただけで」
「ああ、そう言われれば確か２０層あたりに湖がたくさんある場所があったっけか」

「昼はあっちの方が綺麗だけど夜は断然こっちだね。星空をこうやって眺めるのなんていつぶりだろうなぁ」

キラキラした瞳で景色を眺めているユウキの邪魔をしてはいけないと思い、こっそりと離れて夕食の準備をする。ユウキが動き出したのはスープが煮立ち、ハーブのいい臭いを漂わせ始めた時だった。

黒曜石の剣

大穴の側に座り簡素なスープとパンを食べきると、流石に疲れが出たのかユウキがうつらうつらとしていた。

「何かあったら起こすから先に寝とけ」

「あー。うん、わかった。ありがとね」

ユウキがヘビーゲーマーでは無さそうだったのでそこまで多くはないが、フィールドが広かったり複雑だと圏外で一夜を過ごすこともあった。最初の方は先に休むことに抵抗が有ったようだが体調が万全ではない人に見張りを任せられないと何度か説得したことで今ではすんなりと受け入れている。

申し訳なさそうに寝袋に入ったユウキだったが５分後には寝息をたてていた。

なんとなく眠るようすをまじまじと見ていたが、寝ている女性を観察しているのは変態じゃないかと思い顔を背ける。

すると真っ黒な床の一部が光を反射して輝いているのに気がついた。近づいてみるとどうやら少し濡れているようで湖から一本の線のように洞窟へと続いている。

昼に来たときは濡れていなかったはず。まるで濡れている何かを引きずったような…。

何かいないか確認するためにさっき山程獲得したゴーレムのドロップ品（恐らく体を構築していた黒曜石のような掌サイズの石。使い道がないくせに重量が大きいので厄介）を投げてみる。３回程投げたとき、暗闇からズルズルと何かを引きずる音が聞こえてきた。寝ているユウキに気づかれないように少し距離を放しながらもう１つ投げつけると、暗闇から２つの光る目が。右手に剣を構え直し、左手に石を持っておく。鱗に覆われた頭部には切れ長な目と人を１人丸飲みにしても余裕がありそうな程大きく裂けた口。足はなく、ズルズルと体をくねらせてやって来たそれは全長１０～２０メートルはありそうな白い大蛇だった。

攻撃されるのを警戒していたが４メートル程離れた場所で頭をく

ねらせてこちらを観察するだけで攻撃してこない。更に１０秒程経ち、ようやく注視しても頭の上にモンスターの名前やＨＰゲージが表示されていないことに気付く。

「お前、クリッターだったのか」

クリッターとはいわゆる環境モブとも呼ばれ、主に背景として設定されている攻撃的な行動をとらない動物。大蛇がクリッターに設定されているのは初めて見たが、ドラゴンでさえクリッターとして登場しているのだからそんなこともあるのだろう。

取り敢えず危険は無さそうなので剣をしまってみると、大蛇が更に近づいてきて左手をつつき始めた。チロチロと出し入れされる舌がくすぐったい。

左手を拡げると蛇は器用に石を咥えてそれを飲み込み、堪能するように動きを止める。黒曜石を食べる不思議な生態をしているが、この空間もこの蛇が黒曜石を食べて広げたのだろうか。そんなことを考えているうちに蛇は再び動き始めると、もっと欲しいというかのように今度は体をつついてくるのでストレージに入っていた石を全部実体化させる。ゴロゴロゴロッという音と共に横に自分の腰くらいまではある石の山が出来た。

それを見た蛇の目が一瞬輝いているように見えたのはきっと見間違いでは無いだろう。口の端からはよだれが垂れ、尻尾が振り回されている為かブン、ビタン、ブン、ビタンという音が鳴り響いている。

食べていい？と聞くかのように頭を傾ける蛇に苦笑しながら良いよと許可を出すと、待ってましたと言わんばかりに飛びつき夢中になって食べ始めた。

その間もブン、ビタンと蛇がたてる音は止まなかったのだが、ユウキが起きてくる気配は全くしなかった。

それから２０分ほど食べ続け、大量にあった石は全て蛇が食べきってしまった。しばらくその場で満足そうに舌をチロチロさせていたのだが、何を思ったのか急に湖へとスルッと入っていった。

湖が波立ち、写っている星や月が揺れる。その光景をみて、昼に来たときと夜に来たときで印象がガラッと変わったのかわかった。昼

はあの蛇が泳いでいるせいで湖面が揺れ普通の湖と変わらないが、夜になると洞窟へと上がりあの鏡のように空の景色を反射するようになるのだろう。夜にだけあの鏡のような湖面を演出するためだけのクリッターが、あの白い大蛇なのだろう。

そんな事を考えているうちに蛇はすぐに穴へと戻ってきていた。真っ白な口元には何かを加えている。湖から体が上がりきったとたんこちらへと向かってきた。1メートルほど手前で静止すると口に咥えていたものを落とす。カーンと高い音をたてて落ちてきたものは棒状の鈍器のような物だった。

「これ、くれるのか？」

そう聞くと首を上下に振り、まるで頷いているようだったので近づいて拾い上げてみる。

自分のＳＴＲなら余裕だろうと片手で拾おうとしたが、予想以上に重かったため両手でエイヤッと持ち上げる。

アイテム窓を開いてみると、そこには《ｓｗｏｒｄ　ｏｆ　ｏｂｓｉｄｉａｎ》と名前がつけられていた。ｏｂｓｉｄｉａｎは確か黒曜石という意味だったので、直訳すると黒曜石の剣となるだろう。表面に張り付いている岩でわかりづらいがよくよく見てみると黒く鋭い先端が見えている。

詳しく窓を見てみるが現在は装備不可となっており、ステータスも？マークがついているだけで一切わからない。

「ありがとな」

一言感謝を伝えると先程まで寝ていた場所へと蛇は戻っていく。暗闇に消えていく体を見ながら、ユウキに白い大蛇が居る事を説明する時どうすれば衝撃が少ないか考え始めるのだった。

ユウキが自発的に起きるか心配だったのだが、予定通り3時間半後には起きてきた。蛇の事を説明してから見張りを交代し、再び起きた時には空が薄紫色になりもうすぐ日が昇る時間帯だった。

まだ少しだけ眠気を訴えている脳を無視して周りを見渡す。未だに洞窟の中は真っ暗だったが、横穴から差し込む光でユウキが景色を眺めているのが見えた。その横顔は、どこか強張っているように思え

る。
「おはよう」
「あ、起きたんだね。おはよう、キリト」
1つ伸びをしてから寝袋をしまい込み、昨日から出しっぱなしだった椅子に座る。
「昨日の夕飯キリトに作って貰っちゃったし、朝ごはんはボクが作っておいたよ」
「ありがとな。それじゃいただきます」
そう言って渡されたのは俺の好きなサンドイッチだった。キャベツのような葉っぱやハーブで燻製された肉とチーズを挟んだだけの物だが、ユウキが作ったソースのおかげでメチャメチャ旨い。
さっそく頬張っているとユウキの顔から力が抜け、薄い笑顔が浮かぶ。ユウキも食べ始め2人でご馳走さまをした時、太陽が顔を出して洞窟内を赤く照らし出していた。
「ボク、二刀流を公開しようと思うんだ」
空と湖に写る太陽を眺めていると、ふとそんな言葉が隣から発せられた。
「大変になったら言ってくれ。サボり方なら教えてあげられるから」
思っていたよりも早かったが近いうちにそう言い出すのはわかっていた。
「キリトには迷惑かけると思うから。…えっと、その…一緒にいるのはもう…」
隣を見ると、ユウキは両手で顔を覆って俯いていた。
「あれ?なんで?とまらない」
うつむいているユウキの頭をわしゃわしゃっと乱暴に撫で付ける。
頭を押さえてこちらを見上げてくるユウキの目からはボロボロと涙がこぼれていた。
「アインクラッド初のユニークホルダーならともかく2人目なら大したことにならないって。それこそビーターの称号に比べたらなんてことはないさ」

そう言って慰めても、ユウキの嗚咽は止まらなかった。
「それでもっ！…それだけじゃないんだ。ボクと一緒にいると、後悔することになるから！今じゃないと、手遅れになっちゃうんだ！」
その時、ズルズルという音が聞こえてきた。振り向いてみると、寝ぼけているのか目をつぶったままの蛇がこちらへと這いずってきている。急いでユウキの手を取り引っ張りあげると、蛇はユウキのいたところを通過して湖へと入っていった。
ユウキが突き落とされることはなかったが、勢い余って抱き寄せる形になってしまう。泣いているユウキの体は、なんだかとても小さく感じられた。ぎこちない手つきでゆっくりと頭を撫でる。
そのとき、不思議と聞くなら今しか無いと思った。それはネットゲームではタブーとなる質問。しかし、ユウキが俺から距離を置こうとしている理由がそこにあると確信していた。
「ユウキのリアルについて、教えてくれないか？」
胸の中で、頭がゆっくりと縦に動いた。

2人の未来へ

一旦離れようと体を動かすが、ユウキの服を掴む力が強くなったのでやめる。体を支えているだけだった腕をしっかりと抱き締めるように背中に回すと、ユウキがその口を開いた。

ポツポツと話されるユウキの過去をひとつひとつ受け止めていく。話はメディキュボイドに入る直前まで進んだ。

「姉ちゃんと約束したんだ。ログアウトしたらＳＡＯでの冒険の話をするって」

「そっか…早く帰らないとだな」

こんなに小さな少女に振りかかった不運のなんと大きいことか。それを知っても何もできない自分に不甲斐なさを感じる。

「帰りたいよ…。でもね”ボクはもう長くないかもしれないんだ”」

話の流れから薄々勘づいてはいたが、それでも頭をガツンと殴られたような衝撃が走る。

焦っているのは分かっていたし、何かを悩んでいるのは分かっていた。けれども俺は、ユウキの事を真には理解していなかったようだ。

何も言葉にならない代わりに、抱き締める腕に力がこもる。

「最近、急に意識が無くなるんだ」

心当たりはある。アスナと食事に行ったときがそうだろう、もしかすると昨日の夜も意識が無くなっていたのかもしれない。

「夜になるとね、何をしててもいきなり3時間以上経ってるんだ。アラームをずっとかけてみたり起きるためにお裁縫をしてみたりしたけどダメでね。毎晩怖いんだ。明日の朝、ボクは生きているんだろうか。…意識を失ったまま、二度と目が覚めないんじゃないかって」

毎晩死の恐怖に晒される。それはどれだけの負担を彼女にかけていたのだろうか。

「死んじゃうのはもちろん怖いけど…それは、ずっと前から覚悟してたから。それよりも本当に怖いのはボクが病気で死んだと分かったら、キリトがどうなっちゃうか。攻略が間に合わなかったんだって

分かったら、きっとキリトは無茶しちゃうでしょ？」
　確かに、間に合わなかったせいと知れば無茶な攻略を続けることになったかもしれない。きっとそれは、黒猫団が壊滅したときよりも酷いのだろう。
「キリトが自分を追い詰めないように、距離を置こうって思ってたんだけど…。でももっと一緒に冒険がしたい。もっと一緒にいたい。でもそれはキリトにとって良くないことで…。そうやって考えながら別れる理由を探してる間にね、１人になるのが怖くなってくるんだ」
　ユウキの体が震えている。ここまで思い詰めていたんだと思うと、後一歩踏み込む勇気がなかった自分が情けない。
「何もわからないまま1人フィールドを進まなきゃいけないのが怖い。戦ってる途中に何が起きても助けてくれる人が居ないのが怖い。話しかけても誰もいないのが怖い。何もできないまま、自分の生きた意味すら残せずに消えていくのが…怖い。」
　吐き出された弱音は俺の心にも響いた。だってそれは俺が１層攻略後、ビーターを名乗ると決めたときに感じたものと殆ど一緒だったから。
「それでもね、ボクの為にキリトが心を傷つけるのだけは許せなかったんだ。何より、キリトがいなかったらボクの命は最初の日に終わっていたはずだから」
　服を掴んでいた手が1度だけぎゅっと握られ、離れていく。軽く体を押され、抱き締めていた腕がほどける。
「そんなふうに思っていたんだけど、ふとした時キリトが傷ついてくれたら良いなって思ったんだ。傷ついて忘れないでいてくれたら、それは生きた意味が残ったって事でしょ？今だって心のどこかで泣き叫べばキリトが助けてくれる。ずっと一緒にいてくれるって思ってる。キリトが思ってるよりもボクってずっと最低なんだ。だからね、キリト。これ以上一緒に居たくないって言うなら今だよ？」
　2～3度顔をぬぐった後にあげられた顔には、いつもの笑顔が張り付いていた。

きっとそれはユウキの作ってきた自分を守るためのもの。相手に心配されないように、踏み込まれないようにと作り上げてきた最後の一線。
過去は話してもらった。言うなれば今はその線に片足だけ入り込んでいる状態。足を引くか両足を踏み入れるのかが俺に託されたのなら、その答えは足を踏み入れる時点で決まっている。
「俺が一緒に行きたいんだ」
それは、1層を攻略した後にユウキにかけられた言葉。2人で一緒にアインクラッドを攻略する切っ掛けになった言葉。絶対についていくという決意が痛いほど伝わってきた、俺にとって特別な言葉。
ユウキは気づかないかもしれないが、返事はこれしかないと思った。
「同情なら良いんだよ？」
ユウキの顔は未だに笑顔が張り付いていて、そんなふうに笑っている彼女をそのままにしたくなくて。
「俺は、ユウキが好きだ」
ポロっとこぼれ落ちた言葉。しかし、吐き出してみたらユウキに対する感情はこれ以外にあり得ないと思えた。
「一緒に飯を食べ歩いているとき、美味しそうに食べている顔が好きだ。新しいフィールドや階層に来たとき、冒険するのが楽しみってな感じでわくわくしているところが好きだ。「…まって」ボス線で他の人を守ろうと必死になっている姿が好きだ。戦場では頼もしい「…まって！」」
俺の告白はユウキの大声で中断させられる。その顔は今にも泣き出しそうな程に歪んでいた。
「ボクの話を聞いてたの？ボク、傷ついて欲しいって言ったんだよ？」
「そうやって他人を傷つけるのが許せない所が好きだ」
「…っ！…泣きわめけば離れられないだろうなんて考えてたんだよ？」
「泣いていなくったって、いつでもユウキを支えたいって思ってる」

「ボクは…ボクは……ボクはもう、長くはないんだよ」
「時間が限られているからこそ、たくさんの思い出を作りたいし、作ってあげたいよ」
「ボクは…ぼ…くは……」
必死に反論を探そうとするユウキを再び抱き締める。
「俺の命だって、クリスマスの日に救われてる。だからこの命はユウキの物だ。別れの瞬間まで、君のために使わせてほしい。ずっと、一緒にいてほしい」
1度目を大きく開いた後、ユウキの顔が伏せられた。
そのまま抱き締めていると次第に胸元が濡れ、嗚咽が混じり始める。少女のしゃくりあげる声だけが響く洞窟の中、2人の両手は互いの背中にしっかりと回されていた。
「もう大丈夫、ありがとう」
ユウキ泣き止んだ頃には太陽が登り、洞窟の中は殆どが暗闇を取り戻していた。ゆっくりと抱擁を解き、正面で向き合う。
「気持ちは嬉しいし、キリトのことは好きだよ?でも、これが恋愛の好きなのかわからないから…。ごめんね?今すぐ答えは出せないけど…きっと間に合わせるから」
好きだと言った後、ずっと一緒に居て欲しいと告白じみた事をしていた事に遅れて気づく。メディキュボイドに入る前、学校で起きたことを考えると恋愛をしたこともないのだろう。返事を一生懸命に考えようとしてくれているが、せっかくユウキが悩みを吐き出せたというのに自分のせいで新しい悩みを増やしたくはない。
「俺が、必ず現実世界に連れて帰ってみせる。だから返事はこの鋼鉄の城を100階層まで駆け登った後に。それまでは攻略に集中してくれたら…って俺が言って良いセリフじゃないかな」
再びうつむいてしまったユウキは何かを、恐らくは100層まで行く事について考えているのだろう。
「ありがとう、キリト。多分ボクは攻略でいっぱいいっぱいになっちゃうと思うから。それよりも死んじゃうかもって弱気になるなんてボクらしくないよね。うん、100層まで一緒に行こう」

そう言って上げられた顔には先程までの弱々しい少女は消えていて、未来を切り開こうとする力強い光がそこにあった。

心の温度
エクストラスキル

「ねぇねぇキリト！今日はどこにいこうか？」

ユウキの二刀流スキルの発表から1ヶ月。あの夜に蛇から貰った剣はユウキの腰に。当初は情報屋が押し掛けたりして大変な目にもあったが、今ではそれも落ち着いている。嫉妬も多々あったようだが、攻略組全体はヒースクリフに並ぶ2人目のユニークスキル使いに沸き立っていた。

「最近迷宮区に篭りっきりだったし、今日は息抜きがてら色んなフィールドをまわってみるか」

「さんせーい！じゃあまずは…まだ行ってないし南の方に行ってみようか」

しゅっぱーつと元気よく宿を飛び出していく相棒の背中を追いかけ、今日もアインクラッドの1日が始まった。

仮初めの太陽が西に傾き始め、そろそろ切り上げようかと話をしているときだった。最後の1匹を切り捨てると、レベルアップを知らせるファンファーレが鳴り響いく。

「おっ、レベルが上がった」

「おめでとう。そういえば新しくスキルスロットが開くんだよね？何とるの？」

「正直戦闘で役立ちそうなのは取りきったからなぁ」

どれを取ろうか悩んでいると、見慣れないスキルがそこにあった。

「なんだこのスキル…換装？」

スキルをタップして説明画面を表示してみる。

《換装》

「発声（設定可・初期設定はチェンジ）することでプリセットされた装備に。もう一度発声することで元の装備に戻る。

（ｃｔ　３０ｍｉｎ）

習得条件：

〈クイックチェンジ〉
使用回数：３０００回
〈体術〉
熟練度：５００
〈装備選択〉」

１度読んでみた感想はなんだこれ？だった。クイックチェンジと何が違うのだろうか。ウィンドウを可視化してユウキに見せる。

「なあユウキ、換装ってスキルに聞き覚えあるか？」

「換装？う～ん、ボクも見たこと無いかな。情報屋の出してるスキル一覧には…あっ！あったけど名前と取得条件だけで検証まではしてないみたい」

「体術スキルを取ってる奴が少ないからか？スキルレベル上げるのも大変だしな」

取り敢えずスキル習得。

「スキルをアクティベートして…チェンジって言えば良いんだよな。っと警告…？装備が設定されていないためスキルの使用ができません…か」

装備選択の部分をタップすると普段の装備画面が２つ横並びに映し出される。左に現在の装備、右側に変身後の装備を選択するらしい。

今の装備はつけられないのか。なら昔使っていた装備をセットして…

「チェンジ」

「わわっ」

目の前が一瞬光ったかと思うと着替えが終わった。指輪が外れ、背中にあった重みも消える。指輪などの装備だけでなく武器まで消えてることから、セットした装備以外は全て変わってしまうのだろう。クールタイムが発生していないようなので変身→解除までがスキル１回の範囲らしい。

「見た感じはどうだった？」

「なんか下から上にパッてひかって装備が変わってたよ。なんだか

アニメみたいだった」
「それは自分でも見てみたいな。解除」
再び目の前が一瞬光り、服が元に戻った。
「で、これ習得するの？」
問いかけられ、少し利用方法を考える。装備画面をもう一度見てみると、防具だけでなくアクセサリーや武器の装備欄が存在していることに気がついた。
「ちょっと試したい事ができたけど…もうこんな時間か。しょうがない、今日はもう町に戻るか」
「帰り道で試してみたら？寄り道しても暗くなる前には帰れるだろうし。それにミスしてもボクがカバーするよ」
任せて！と言わんばかりに胸を叩いてやる気をアピールしているユウキに頼もしさを感じる。
「それじゃあ、いざというときは頼んだぞ」
「うん！」
弾むような足取りで歩きだしたユウキを追いかけ、帰りの道を歩き始めた。
帰り道の途中クイックチェンジ＋のクールタイムがあがったため、街道をそれてフィールドへと足を踏み入れていた。
「よし、じゃあフォローは任せた」
「りょーかい！」
頼もしい返事を背中に受け相対している敵、赤黒い毛を全身に生やした狼男へと剣を振るう。分厚い腕の毛皮に阻まれ大したダメージになっていないが、タゲはこっちに向いただろう。
大きく振り下ろされる爪を弾き飛ばし、あえて狼男の方に踏み込む。狼男の生臭い息がかかる距離まで近づくと、鋭い牙が生え揃った口を大きくあけて噛みつこうとしてきた。
狙い通りの攻撃に頬を歪ませつつ、首を狙う噛みつきを自ら後ろに倒れるようにして回避。背中から地面に激突する前に体術スキル、弦月を発動。振り上げられた右足で狼男の顎を強制的に閉じさせつつ、後方宙返りの要領で地面に着地。

大きくのけぞった狼男が体勢を立て直す間に構えをとる。赤い光が剣を包み、ジェット機のような重低音と共に肩に重い単発突きが突き刺さる。片手剣単発スキル、ヴォーパルストライク。

わざと急所を外された一撃は狼男の体力を2割削るに留まる。このままでは長い技後硬直を狼男の目の前で行うことになるが、ここからが俺の試したいこと。

ライトエフェクトが切れる少し手前で左半身に意識を集中させ、少し体を開くようにして左手を後ろに伸ばす。ライトエフェクトが消えた瞬間、先程習得したスキルの発動コマンドを読み上げる。

「チェンジ！」

一瞬目の前が光ったかと思うと狼に刺さっていた剣が消え、左手に先程まで使っていた剣とはまた別の剣が出現した。剣を握りしめると待機モーションが読み取られ、ソードスキルが発動する。

水平４連撃スキル、ホリゾンタルスクエア。

左から右への切りつけが当たり、敵の腕から赤いポリゴンが飛び散る。剣を振り抜いた勢いで回転し2撃目を叩き込もうとした時、バランスを崩しソードスキルが終了しそうになる。

（くそっ、重いのに軽すぎる!!）

「はぁぁぁっ」

転倒しないように地面を力強く踏みしめ体勢を立て直す。大きく振りきられた剣は体の右後方で止まり、ソードスキルの挙動に従っては右から左へと下顎を切りつける。慣性を無視し再び跳ね返った剣は左から右へと鼻を切りつけ、ソードスキルは終了。剣の軌道が描いた正方形がクルクルと回りながら広がっていく。

「解除！」

装備が元に戻り、右手にいつもの重み。次のソードスキルに繋げるため構えを取るが、バランスを崩した状態では上手くいかず、技後硬直に囚われる。

狼男のＨＰゲージが減少していき、赤色になったところで減少が停止。

無防備に固まっているところを狼男が襲う直前、突然視界が紫色に

染まった。
「やぁぁぁっ」
後ろから飛び込んで来たユウキが左の剣で顎をかちあげ、右の剣による振り下ろしで狼男のＨＰを削りきり戦闘が終了した。
「サンキュー、ユウキ。助かったよ」
「どういたしまして！キリトが転びかけるなんて珍しいね。どうしたの？」
剣をしまったユウキが振り向きつつ尋ねてきたので抜きっぱなしになっていたエリュシデータを見せながら答える。
「こいつに振り回されるって前に言った事あったよな？」
「重い武器だと慣性が大きくなるって話だったっけ。久し振りに使ったら思ったよりも慣性が小さかったってこと？」
「半分正解。ヒントは体感重量」
「体感重量？えーっと、筋力値が大きい程重たい武器が軽く感じるって事だよね？」
少しの間考え込んでいたが、何を言いたいのか理解したらしい。
「そういえばキリトってアクセサリーで筋力上げてたよね？」
「ああ、そうだな」
「それが換装で消えちゃったから軽い剣が重く感じた…ってこと？」
「おっ、正解。ついでに言うと大体今の装備でこいつを持った時と殆ど変わらなかったのが良くなかったんだよなぁ」
「それがわかっただけでも収穫だよ。じゃあもう用も済んだし、そろそろ帰ろっか」
「そうだな」
最低限周りを警戒しつつ、どうやったら換装が使えるのかを話しながら街道へと歩き始めた。

鍛治士の少女

あれから何度か換装を使ってみた結果、カカシ相手には3連続ソードスキルが成功するようにはなった。しかしフィールド上、よもや1つのミスが自分のみならず部隊の壊滅につながるボス戦で使おうとするには剣のもつ慣性の違いに不安が残ってしまう。

使うにしても最低限剣の重さを揃える必要があるとの結論になったが、６３層まで登ってきた今でもエリュシデータはトッププクラスの魔剣。そうそう同じスペックの剣は売られておらず、そこそこな性能の武器を買って重さを強化するにしてもかかる費用が馬鹿にならない。結局は作るしか無いということで、ユウキの友人であり現在の鍛治士でもトッププクラスの腕前を持つリズベットを訪ねることになった。

５０層から転移で飛んできたのは４８層リンダース。リズベットはここで川沿いの大きな水車のある工房に店を構えている。ちなみにユウキはここでちょくちょく武器のメンテナンスをしてもらいにきていたようだが、いつも近場のＮＰＣに頼んで済ませてしまっている俺は行ったことがない。

「お邪魔しまーす」

「いらっしゃいませ」

「あれ？リューイさんが接客してるってことはリズは工房かな？やっほー、リズ！」

ＮＰＣが接客しているのを見るなりユウキは勝手知ったる様子で工房に繋がるドアをバタンと開ける。一連の動作があまりにも自然だったので止めなかったのだが、鍛治士が工房にいるという事はもちろん鍛治をしている可能性があるわけで…。

ユウキの肩越しにうわっという声と共に明らかにインゴットではない何かをハンマーで打ち付けたガイィィンという物音が聞こえてきた。

「あちゃー。ごめんね、リズ。次から気をつけます」

「その台詞何回聞いたかなぁ。全くユウキもアスナも変なところで似

てるんだから。……まぁ叩き始めてからじゃ無くて良かったけどさ」
工房の中は他に人がおらず、ため息をつきながら金属を炉に入れ直しているのがリズベットだろう。ユウキはずんずんと工房の中に入っていき鍛治台の隣に置いてある木製の椅子に腰をかけたが、いきなり無断で入っていくのはどうかと思ったので俺は入り口に留まることにした。ユウキが勝手に中に入っていくのもいつものことのようでリズベットは気にする様子もなく話し始めた。
「あれ研ぎ直すんだったら先に打ち直しやってもいい？あれ、もう硬くなりすぎて時間がかかりすぎるのよね」
炉の様子を確認し始めたリズベットをユウキが慌てて止める。
「まってまって、今日はそれじゃないよ。まだ研がないといけないほど耐久値が減ってないし」
今ユウキの使っている黒曜石の剣は入手した当時では棒状の鈍器であったが、５４層にいた研摩士と名乗るＮＰＣに持っていくことで黒紫色の細身な長剣へと生まれ変わった。研磨という方法で生み出されたためか素材を使った強化ができず、代わりに研げば研ぐほど鋭さと丈夫さが上がっていき最大の耐久値と重さが減っていくという少し変わった特性を持っている。
「遊びに来んなとは言わないけどさ、もうちょっと時間を選んでくれないと…」
「あ、そうだった。今日は遊びに来たんじゃなくって新しい片手剣が欲しくって来たんだけど…おーいキリト、そんなところに立ってないでこっち来なよ」
「ここ、あたしの工房なんだけど…まぁいいわ、あんたもそんなところに立ってないで入って来なよ」
「お、お邪魔します…」
工房の中に入り、ユウキが席をポンポンと叩いているのでそこに腰掛ける。３人全員が腰をかけたところでユウキが話を切り出した。
「２人って初対面だったよね？紹介するね。こっちが鍛治士のリズベットで、こっちがえぇ～っと、パ、パートナーのキリト」
「何でそこで照れるのよ…はは～ん」

パートナー発言で少し赤くなっていたユウキの顔が、今度は耳まで真っ赤に染まる。
「いやいや、キリトとは…とにかくそういうのじゃないから！」
リズベットの顔が獲物を見つけたとばかりにニヤリと歪んだ。
「ふ～ん、それで〝そういうの〟ってどういうのかなぁ？」
「いや、えっと、それは…その……うぅ」
ユウキが机に突っ伏してちがうもんと呟やき始めたのを見てようやく満足したのか、リズベットがこちらに向き直った。
「そうそう、今日は片手剣が欲しいって言ってたけどあんたので良いのよね？性能の目標値とかはある？」
「あぁ、成る程……それならこの剣と同等以上の性能って事でどうかな」
エリュシデータを実体化して手渡す。こちらが手を離した瞬間にリズベットは1度剣を取り落としそうになっていたものの、机ギリギリのところで踏ん張り鑑定を始めた。
「…作れそう？」
鑑定結果を見て少し考え込んでいたようだが、声をかけると工房を出て店のエリアから1振りの剣を持ち出してきた。
「これならどう？私が鍛え上げた最高傑作よ」
手渡された剣は緑色の鍔がついたシンプルな細身の長剣。近くの物に当たらないよう気をつけながら振ってみるが、エリュシデータと比較するとどうしても軽いように感じてしまう。
「少し軽いな…」
「スピード系の金属を使ったからね」
性能を表示したりせずにそのまま剣を返す。
「あら、気に入らなかった？」
最高傑作を突き返されたせいかリズベットの声に少し棘が入っているように感じたので、慌ててフォローを入れる。
「言い方が悪かったよな。さっきは性能って言ったけど、そいつと重さが近いやつを探しに来たんだ」
「えぇ…、両手剣ならまだしも片手剣でそれと同じ重さの剣なんて鍛

えた事ないわよ。それにこれから作るとしても、それと同じくらいの重さにしたいってなると材料がないわ」
「うーん、レアなインゴットは今持ってないし困ったな…」
剣が作れないなら換装をスキルスロットから外すべきだろうか。そんな事を考えているとリズベットから声をかけられた。
「あたし、レアな金属になら当てがあるわよ」
「本当か!?それはどこで手に入るんだ？」
「５５層にある西の山に水晶を餌にしているドラゴンが居るらしくってね。そいつがレアな金属を体内に溜め込んでるって噂よ」
そういえば最近そんな噂を最前線で聞いたような気がする。確かあれは…
「それ、誰もゲット出来てないんじゃなかったか？」
「そうなのよ。それで金属を手に入れるにはマスタースミスが必要なんじゃないかって話になっててね。どう、試してみない？」
５５層程度の敵なら油断していても負けることは無いだろうが、リズベットもとなると月夜の黒猫団の最期が脳裏にチラつく。行こうとなかなか言い出せない中、いつの間にやら復活していたユウキが話に入ってきた。
「リズの事はボクが守るから任せてよ」
その言葉は俺の迷いを断ち切るのに十分な力強さがあった。
「了解、じゃあそれで行こう。それと、これからパーティーを組むわけだしリズベットって呼んでも良いか？」
「呼ぶならリズで良いわよ。よろしくね、キリト」
「よーし、そうと決まれば５５層にしゅっぱーつ!!」
ユウキが席を立ち工房のドアへ歩き出した。ついて行こうとしたその時、リズベットが近づいて来て耳元で囁かれる。
「全くの脈なしってわけじゃなさそうじゃん。良かったわね」
突然の出来事に頭がフリーズする。
「ぷっ、何よその顔。バレてないとでも思ったの？でも…ま、頑張りなさいよ」
そう言って工房を出て行くリズベットをただただ見送ることしか

できなかった。

「良いなぁ。あんた達には本物があるんだね」

工房を出る直前に思わず口から出た呟きは誰にも届かなかった。

竜の棲む山

５５層北部のテーマは氷雪地帯。素材入手のフラグを立てるため、クエストが見つかったという村まで進んでいく。道中は特に何事もなく、十数分程で圏内に入った合図の音楽が流れ出した。一息つくと共に意識しないようにしていた寒さが込み上げてくる。

それはユウキも同じだったようでいそいそとウィンドウを操作してコートを羽織っていたのだが、リズベットはウィンドウを操作するそぶりも見せずその場で震え始めた。

見かねたユウキが声をかける。

「もしかしてリズ、防寒具持ってないの？」

「５５層が氷雪地帯だなんて知らなかったのよ…」

一応コートの予備が無いかストレージを漁ってみるもののやはり1着しか無い。

「ユウキは予備持ってないか？」

「ボクも持って来て無いや。うーん、毛皮とか羽根さえあれば作れるんだけど、２人とも持ってないよね？」

２人して首を横に振る。

「毛皮とかって売ってるのかな…。良かったらボクの貸そうか？羽織るものくらいなら持ってきてるし」

「あたしは大丈夫だから、ほら、行きま…びえっくし‼？」

明らかに大丈夫じゃなさそうなので自分のコートを実体化し投げ渡す。クエストを受けるのは長老の家らしいしそこまでならまぁなんとかなるだろう。這い寄ってくる冷たさを意識から追い出す。

「ありがと…あんたは大丈夫なの？」

「こういうのは意識の持ちようでどうにかなるんだよ。さて、長老の家はどれかなー」

少し何か言いたげであったが、結局コートの暖かさに抗えなかったのか渡したコートをしっかりと羽織ったのを見て村を歩き始める。

幸いにも長老の家はすぐに見つかった。周りよりも一回りだけ大きい家に入るとそこには白髭豊かなお爺さんが出迎えてくれた。頭

の上にクエストを示すハテナマークが付いているのでこの人で間違い無いだろう。老人と向き合ってテーブルに着くとユウキが話を切り出した。
「すいません、お話を伺いたいんですけど…」
　声をかけた瞬間ハテナマークがびっくりマークへと変わる。フラグがあまりにも早く立った事を訝しむ暇もなく老人が喋り始めた。
「おおっ！こんな老いぼれの話を聞きたいだなんてなんという物好き。しかし期待されたなら答えねばなるまいて。あれはわしが子供の時の話じゃ…」
「えっと、西の山にいるドラゴンについて聞きにきたんですけど…」
「この村は今でこそここまで大きくなったが当時はまだ家が５軒しか無くってな…」
「だめだ、聞こえてない…」
　老人の話は長かった。少年期を超え青年期、熟年期と苦労話を話し続けられ全員グロッキーになっていると、そういえばといった様子でドラゴンについて話し始めた。事前に聞いていた話と違うところやフラグかないか気をつけて聞いていたのだが特に
　ふらふらになりながら外に出ると外は日が沈みだしており、家々に降り積もった雪がオレンジ色に輝いていた。
「まさか、フラグ建てにこんなに時間がかかるとはなぁ」
「うぅ、２人ともごめんね？ボクの話しかけ方が良くなかったもかも」
「いや、あの感じだとどんな話しかけ方しても変わらなかったと思うぞ？」
「そうそう、そんなの気にしなくて良いわよ。それよりもどうする？明日出直す？」
「うーん、ドラゴンは夜行性だと言ってたしなぁ。それに山ってあれだろ？」
　指差す先にあるのは白く険しい切り立った峰。とはいえアインクラッドの構造的に１００メートルを超える高さにはならないし大した距離があるわけでも無い。登頂するのにそこまで苦労しないだろう。

「リズは仕事大丈夫？」
「今は急ぎの依頼も無いし行っちゃおうか」
「じゃあ決まりだな」
３人で顔を見合わせた後、夕陽に向かって並んで歩き出した。

竜のいる山は登ってみると大したことはなかった。傾斜はそれほどでもなかったし、道中出てくる敵で1番レベルの高い氷のスケルトン達はリズがガシャコンガシャコンとメイスで蹴散らしていく。数十分でたどり着いた山頂は地面からクリスタルの柱が何本も突き出し、星空を模した照明に照らされたそれらがキラキラと虹色に光る幻想的な光景が広がっていた。
「わぁ……！」
そう言って走り始めようとしたリズの襟元を引っ張って止める。
「ふぐ！…何すんのよ！」
ここから先はボスエリア。今まで出てきたモブとは異なりそもそもが複数パーティーで戦うことが前提であるし、いくらレベルに差があろうともこちらのＨＰバーを０にしてくるものだと覚悟していなければならない。この感覚は前線に出たことがないとわからないのかもしれないが、浮ついた気持ちのままで居ては欲しくなかった。
「転移結晶の準備をしといてくれ」
真剣な様子にあてられたようでリズはこくりと頷くと転移結晶をエプロンのポケットに入れた。
「ここからは危険だから俺が1人でやる。ドラゴンが出てきたらリズはユウキと一緒にそこらへんの水晶の影に隠れておいてくれ」
「なによ…私だってレベルはそこそこ高いんだから手伝うわよ」
だめだとつい反射で言ってしまいそうになった時、ユウキにちょいちょいと肩を叩かれる。振り返り目が合うと、ユウキはボクに任せてと言わんばかりに頷いた。
「手伝ってくれようとしたのはうれしいけど、ボクもリズには隠れていて欲しいな」
「ユウキまで…」

ユウキは今まで浮かべていた微笑を引っ込め真剣な顔になる。
「リズ、ボス戦っていうのは一瞬の油断でＨＰが全損するようなそんなの世界なんだよ。それこそレベルが高いからって油断して死んでいった人たちをボクは何人も見てきた。だからここはボク達ボス攻略のプロに任せてくれないかな？」
こくりと頷いたリズを見てユウキがその顔を綻ばせる。
「それじゃあ行こっか」
ユウキの号令で再び山を進み始める。
山の中央まで来てもドラゴンはまだ湧いていないようだったが、代わりに直径１０メートルはあるような巨大な穴が俺達を出迎えた。壁面は氷に覆われ、垂直にどこまでも続いている。そこら辺に落ちている結晶のかけらを蹴り入れてみたが底にあたった音は聞こえてこなかった。
「深いなこりゃ」
「キリト、気をつけてね」
「おう、そっちこそ」
そんなふうに声を掛け合っていると、突如猛禽のような甲高い咆哮が夜の静寂を切り裂いた。
「こっち！」
ユウキがリズの手を引いて近くにあった大きな水晶の影に入っていくのを見届けてからドラゴンに向き合う。
「ええと、ドラゴンの攻撃パターンは左右の鉤爪と、氷ブレスと突風攻撃だって。…気をつけて！」
サムズアップで返事を返すと同時にボスのポップが始まった。ゴツゴツとしたポリゴンのブロックが大量に湧いたかと思うとそれらが徐々に削られていき、やがて氷のように白い鱗を持った１匹の白竜の姿をとった。
剣を抜き放ち構えると、それを合図にしたかのように竜の顎門が大きく開く。
「ブレスよ！避けて！」
心配そうな声が後ろから聞こえてきたので、安心させるためにもブ

レスに対して真っ向から立ち向かうことにした。
片手直剣ソードスキル＜スピニングシールド＞を発動。手を中心に剣が風車のように高速で回りだし、ソードスキルの光も相まって緑色のラウンドシールドがそこに出現したかのように見える。
剣とブレスが激突。衝撃から察するにそこまで威力は高くないように感じる。一部散らしきれなかった分に体力を少しづつ削っていくが、視界の端に見えるＨＰバーは減ったそばから回復していき常にほぼ満タンの状態を保てている。
（ブレスの威力はバトルヒーリングでなんとかなる範囲。この様子なら連続で直撃でもしない限り問題は無さそうだな）
ブレスが終わるのを見計らって一気に跳躍。５メートル程の高さでホバリングしている竜の眼前にまで迫ると、硬直している隙にバーチカルスクエアを発動。切り下ろしの反動で高さを維持する。クルクルと周りながら拡散してく四角い光の奥から反撃とばかりに鉤爪が迫るが、今度はバーチカルスクエアの１発目を鉤爪に当てて横にパリイ。残りの３連撃を足に叩き込んでから地面に着地する。今の１連の攻撃で３割以上の体力を削れたのを見るに耐久力も大したことが無さそうだ。
突風攻撃とやらは未だに見ていないが、取り敢えずはあの穴に落ちないようにだけ意識していれば大丈夫だろう。
着地した所に飛んでくるブレスをダッシュで避け、再び飛び上がってからレイジスパイクで突っ込んでいく。単発のソードスキルを中心にドラゴンを怯ませ続けていると、そう時間もかからずに赤ゲージまで削ることができた。
発狂モードに入った為か怯みが解除されたので一度着地し相手の行動を伺っていると、マップ上の見方を示す光点の１つが動いた。
「まだ出ていっちゃダメ！」
ユウキの焦ったような声とドラゴンが翼を大きく広げるのはほぼ同時だった。見たことのないモーションから突風攻撃が来ると予想し、剣を近くにあった水晶に突き立てる。翼が体の前で打ち合わされ、吹き上げられた雪がまるで壁のように迫ってくる。後ろを確認す

るとユウキが片手で剣を水晶に突き刺し、もう片方の手で吹き飛ばされそうになっているリズを捕まえていた。その表情には余裕がなく、大丈夫かと声をかけようとしたその時だった。
２人分の体重を支えていた剣が水晶から抜け、２人は体を宙に躍らせる。吹き飛ばされた先は先ほど見つけたあの深い深い大穴。死ぬかもしれないと思った時には既に剣を抜き飛び出していた。
２人の体が穴へと消える直前に剣が投げ捨てられ、少し遅れてリズの体が穴の外へと弾き出される。
「転移しろ！」
リズの横を通り過ぎる時にそれだけ言い残し、ユウキの姿を確認しつつ穴の中へと飛び込んでいく。１秒もたたないうちに追いつき、ユウキの手を掴んで自分の方へと抱き寄せる。
「掴まれ！」
体に両腕が回されたのが分かった瞬間、ヴォーパルストライクを発動。剣に引っ張られるようにして壁に近づき、剣を壁に突き立てる。ガクンとした衝撃と共に落下の勢いは弱まったが、完全に止まるとまでは至らなかった。金属を引き裂くような音と共に、剣で壁を削りながら落下していく。上からでは見ることのできなかった穴の底が見えてきた頃だった。シャラランと音がなったかと思うとユウキの片腕が体から外され、再びのガクンとした衝撃に襲わる。どうやらユウキも剣を壁に突き立てたようで落下速度が大幅に落ちた。
２人で壁を削りながらゆっくりと降りていく。４０メートルほどそうして落下することでようやく穴の底に足が着いた。

穴の中で

穴の底は氷の上に薄く雪が積もっているだけの空間で何も無かった。周りを見渡してみるが横穴なども無く、垂直に切り立った壁がただただ聳え立っている。左上に見えるリズの体力も回復しきっているので、恐らく無事に転移できたのだろう。そんな風に状況把握をしているとユウキが口を開いた。

「ありがとう、キリト」

「ユウキを付き合わせることになったのは俺のせいだし気にしないでくれ。それよりこっちこそ、リズベットの事を助けてくれてありがとな」

「ボクが守るよって言っておいて危険な目には遭わせちゃったけどね」

バツが悪そうな顔でこめかみを掻いているユウキを見て、2人が飛ばされる前に何があったのか気になった。

「そういえば、どうしてリズを引き留められなかったんだ？」

「あの時は何が起きてもいい様に剣を抜いて待機してたんだけど、両手が塞がってたせいでリズが飛び出した時に咄嗟に手を伸ばせなくって。まずいって思って剣を片っぽ捨てて手を掴んだ頃には突風攻撃に巻き込まれちゃっ…あ！剣を回収しないと。ごめん、ちょっとあっち向いてて」

アイテムを落としたり無くしたりしてしまっても所有権が残っていれば、つまりは5分までなら全アイテムの実体化コマンドによって回収できる。ただし文字通り現在所有している全アイテムがその場にドロップするため、女の子の見てはいけないものが見えてしまわない様に後ろを向く。

ドサァっと背後で物がばら撒かれる音を聞きつつ取り敢えず脱出手段を探そうとした時、足元に何かが転がってきてコツンと音をたてて止まった。ユウキがいる方を見ないようにしつつ拾い上げる。それはどうにかサチを生き返らせようとして獲得した蘇生アイテム、〈環魂の聖結晶〉だった。あれは確かクラインに投げ渡した筈だった

のだが、どうしてユウキが持っているのだろうか。
「なぁユウキ、これって…」
「どうしたの？ってあぁ…えっと…クラインさんとボス戦の攻略会議で会った時に『どーせキリトの奴は意地でも受けとらねぇからよう、いつも一緒に居るユウキちゃんがあいつの為に使ってやってくれ』って言われて、そのまま貰ったんだ。元はと言えばキリトがゲットした物だし、キリトが持っとく？」
「いや、ユウキが持っててくれ」
「ん。じゃあボクが持ってるね。それで、ボクどこまで話してたっけ？」
少々露骨な話題転換だったが、自棄になっていた時の事を思い出して少し沈んだ気持ちになっていたからありがたかった。
「剣を刺して突風攻撃に巻き込まれたところまでだったかな」
「そうだったそうだった。でね、剣の刺さりが甘かったみたいで抜けちゃって…」
そこからはおおよそ見た通り。２人纏めて穴の上に飛ばされたため、剣を捨ててリズベットを穴の外に放り投げたらしい。
話を聞きながら脱出方法がないか探るべく壁を触ってみるが、凍ってツルツルとしており特別な道具が無い限り登るのは厳しそうだ。どうせクリスタル無効化空間だろうとは思いつつもポーチから転移結晶を取り出して掲げてみる。
「転移、アルゲード…まあそうだよな」
予想通り結晶は何の反応も示さない。フレンド欄も見てみるが、ここがダンジョン扱いとなっている為メッセージは送れないようだ。一通り確認してみてわかったのは、リズが助けを呼んできてくれるまで穴からは出られなさそうだということだろうか。
「あ、もうこっち向いていいよ」
許可が出たので向き直る。ユウキの腰にはいつものように愛剣が２本とも差されていたので無事回収できた様だ。
「どうやって脱出するかアイデア募集」
「登ったりはできなさそうなんだよね？うーん、ロープを垂らしても

らっても途中で切れちゃいそうだしなぁ。リズに回廊結晶を落としてもらうくらいしか思いつかないかも」
「高すぎて勿体無い…けど、出られない方が問題だしな。ま、リズ頼みになりそうだしこう暗くなっちゃ今日はここで野宿か」
　頭にあるのは夜になると電源が落ちたかの様に寝ってしまうユウキの症状。一時期よりも良くなってきている様だったが、今でも何日かに1回は起きている。
「りょーかい。じゃあ、今日はボクが夕飯を作るね。キリトはお湯おねがい」
「了解」
　ユウキが組み立て式の机や野外用の調理キットを取り出している間にコンロ代わりになる大型のランタンを設置して上に鍋を置く。その辺の雪を中にごそっと突っ込めば後は勝手にお湯が沸くので、待ってる間ユウキの手で肉や野菜が切られていくのをぼーっと眺めていた。
「そんなに見つめられても、できるのは速くならないよ？」
　こちらの視線に気づいたユウキが、食いしん坊な子供を諭すように笑う。
「いや、ただ楽しそうに料理するなって思ってな」
「そう？…確かに、段々と美味しいものが作れるようになるのは嬉しいかな」
　お湯に具材や調味料が次々と投入されていく。蓋を閉めてダブルクリックを押すと料理完成までのタイマーがピコンと表示された。
「よし、これで後は待つだけだね」
　ユウキがテキパキと調理道具をしまい、俺の隣に腰をかける。
「お疲れ」
「大したことはしてないよ。それより問題です。ボクは何を作ってたでしょーか？」
　そう言われてさっきの調理風景を思い出す。テーブルの上にはなんかの肉と芋や人参、玉ねぎにキノコが並んでいたはず。このラインナップだとシチューが思い浮かんだが、牛乳を入れている様子はな

かった。
　つまり答えは…
「きのこカレー…だろ？」
　自信たっぷりな答えに対し、ユウキの両腕が頭の上に挙げられそのまま丸を作る…かと見せかけて勢いよく動き顔の前でバッテンを作っていた。
「ぶっぶー。正解はシチューでした！」
「え…でも牛乳とか使って無かったよな？」
「それはねぇ…じゃーん！」
　そう言って取り出されたのは白くて四角い塊。目の前に突き出されたそれをタップしてウィンドウを呼び出す。表示されたアイテム名は〈Ｓｔｅｗ　ｒｏｕｘ〉シチュー…ろー…るー…ルー
「これ、シチューのルーか？」
「正解！」
「へー、こんなの売ってたのか」
「それ、店売りじゃないよ？」
「ん？ユウキが作ったのか？」
「ううん。それ、アスナが作ってくれたんだ」
　脳裏に浮かんだ攻略の鬼と料理がいまいち結びつかない。ただユウキが女の子っぽい服装をするようになったのもアスナがきっかけだったし、家庭的な一面があってもおかしくはない…か？
　なんて失礼な事を考えていると、さらなる爆弾発言が。
「なんか料理スキルが８００超えてないと上手く作れないらしいけど…ってどうしたの？」
　アホじゃないのか!?
　という発言はかろうじて飲み込む事に成功したものの、衝撃は顔から出てしまったようだ。
「な、なんでもないよ。それよりもほら、もうすぐできそうだぞ」
「あ、ほんとだ！…ふぅ、危ない危ない」
　なんとか話を逸らす事には成功したが、改めて考えるとシチューだけだとちょっと物足りない。米かパンが欲しいなぁ…と考えている

と、まるで俺の思考を読んだかのように差し出されるパン。耐久値を見るに今日の朝に買っていたようだ。いったいいつのまに…
「キリトの分よそうからお皿ちょうだい」
「おう、ありがとう」
「よし、揃ったね。いただきます」
「いただきます」
聞きたい事はあるがまずはスプーンで掬って一口。
こ…これは…
最初に口いっぱいに広がるミルクの甘みの後、よく煮込まれた具材たちがほろほろと溶けて混ざり合い見事な調和を果たしている。少し濃いめな味付けなため、パンとの相性は絶妙に違いない。早速パンをちぎり、シチューに浸してまた一口。
「うまぁい」
気がつけばそんな感想が口から飛び出していた。
「良かった～、準備してた甲斐があったよ」
どうやら食べずにリアクションを伺っていたようで、ニシシッと笑いユウキもシチューに手をつける。
「おいしぃ～」
一瞬で蕩けた表情になるユウキに自分で作ったのにと一瞬思ったが、そういえばルーを作ったのはアスナである。つまりこの料理はアインクラッドの中で5本の指に入る美少女2人の手料理といっても過言では無いのでは…？
そんな益体もない考えをしていると何故だかクラインが血涙を流している様子が浮かんできたので、さっきから気になっていた事を聞き出す。
「そういえば昨日から準備してたみたいだけど、こんなハプニングでも予想してたのか…？」
「流石にそんな事ないよ。ただ、キリトが新しい剣を買うって言ってたから」
「それとこれとどんな関係が？」
「ほら、キリトってなんでもすぐ試したがるでしょ？だから剣を買っ

たら早速フィールドに出て新技を練習しに行くと思うわけ」
　確かに、と思いつつもまだ夕飯の準備が繋がらない。
「で、フィールドで他の人に見られたくないからマップの端っこだったり街から遠いところで練習する事になって」
　ふむ。
「成功してもどんどん難易度を上げるから引くに引けなくなって」
　ふ…む…
「もう少し、もう少しだけって帰るの嫌がるんじゃないかなって思ったから、じゃあ野営の準備しておこうって」
　そんな事はないぞ、と反論できれば良かったのだが、何よりも自分でその絵面が想像できてしてしまったために口をモニョモニョさせるだけで終わる。
「まさか穴に落ちて出られなくなるとは思わなかったけどね」
「…そうだな」
「あ、おかわり有るけどいる？」
「いる！」
　そうして談笑しながらご飯を食べた後、リズベットの救援を見逃さないように交互に寝る事を決め1日が終わった。

脱出

「キリト、起きて。朝だよ」
　肩を揺すられて意識が覚醒していく。ユウキの起こし方的に予想通りと言ってしまうとあれだが、リズベットはまだ救出に来れていないらしい。
「ふわぁ…おはよう」
「おはよう」
　目を開けると飛び込んできたのは光。眩しさに目を細めて辺りを見回すと、どうやら氷の壁が鏡になって穴の底まで光を届けているらしいことがわかった。キラキラと光を乱反射させている壁に目を奪われていると、少し色の違う光が視界の隅に引っかかる。
　光の出所は…あそこか。
　それは、床に積もった雪の隙間から少しだけ顔を出している薄青い結晶。なんだか気になって寝袋から這い出てその結晶を掘りにいく。
「いきなりどうしたの？」
　いきなり地面を掘り出した俺に困惑しつつもこちらの手元をのぞいてくる。
　3掻き程で露わになったそれを引っ張り出す。輝きからして高品質なインゴットであり、これがクエストの目的で間違いないだろう。アイテム名を表示すると〈クリスタライトインゴット〉と表示される。しかしながらどうしてこんな所にあるのかが謎だ。
　一旦情報を整理してみる。結晶を体内に溜め込んでいるという噂。ドラゴンを倒しても金属はドロップしない。大穴の底に落ちている目当ての金属…いや、ドラゴンが出入りできそうな大穴の底に落ちている金属だ。つまりこれは…
「それ、目当ての金属だよね？どうしてこんなところに？」
　出てきた結論を伝えるかどうか悩む…が、ずっとモヤモヤし続けるよりも正体を知っていた方が良いだろう。
「ドラゴンがクリスタルを齧って、腹の中で精製するっていう話だっただろ？」

「だね、それで？」
「でもって腹の中にずっとあったらいつか満帆になるだろ」
「あ…うん、そうだね…」
「で、そうならない様に出てきたのがこれ」
「あ～…うん、つまりそれって」
「ドラゴンの排泄物だ。ンコだ」
「一応そうは見えない位には綺麗だけど…う～ん」
　急にユウキが何かを考え始めた。推理が間違っていたのかと思い不安に駆られる。
「えっと…どこか変なところでもあったか？」
「あぁいや、そうじゃなくて…えーっとキリト、それで剣を作るんだよね？」
「ん？それがどうかしたのか？」
「キリトが気にしてないならそれは良いんだけど…う～ん、後でリズには教えておこう」
　後半の呟きは聞き取ることができなかったが、どうやら納得している様ではある。それ以上は気にしない事にしてストレージにインゴットをしまい込んだ。
「さて、これで後は脱出さえできればって感じだな」
「うん…ん？そういえばさ、それがあったって事はここはトイレなの？」
「流石に広すぎるし、多分巣なんだと思うぞ」
「巣…てことはさ、ドラゴン帰ってこない？」
「ん？」
「ほら、夜行性って事は朝には巣に戻ってくるでしょ」
「「……」」
　２人揃って穴の入り口を見上げると、まるでタイミングを見計らっていたかの様に黒い影が滲む様にして円の中に現れる。それはみるみると大きくなっていき、やがてその全貌が見て取れる様になる。
　氷の様に白い鎧を纏った竜。ようするに昨日戦ったドラゴンが縦穴を急降下してきていた。

２人揃って後ずさるが、すぐに壁にぶつかる。
「タゲられては…なさそうだね。どっちがタゲ取りする？」
「ブレスもあるし、俺がやる」
「りょーかい！」
冷静な相棒に頼もしさを覚えつつ、背中に吊った剣を引き抜く。
そうこうしている内に竜が盛大に雪を巻き上げながら着地した。
こっちもあっちも回避するスペースが無い狭い空間。鉤爪攻撃はパリイできるから問題ないとして、問題はブレス攻撃。この狭さじゃ正面からのは弾けても壁で反射してダメージをもらいそうだし、そもそもジャンプじゃ届かない位置でブレスを吐き続けられでもしたらかなり厄介だ。
どうにか飛ばれない様にできないか…飛ぶ？
「…っあ…まさか…」
「えっ…？えぇ!?」
剣を鞘に納め、斜め後ろにいたユウキを抱えて走り出す。
「ちょっと、どうしたのキリト！」
竜の死角に入るべく、湾曲する壁を走る。竜が首を曲げてこちらをタゲるが、４本足の動物は体の構造的にその場で回転するという行動が苦手だ。２周、３周と徐々に加速していき、竜がこちらを追いきれなくなっていく。
ここっ！
こちらが走る方向と同じでは追いつけなくなり首が逆回転する瞬間、壁を蹴って竜の背後をとる。こちらを完全に見失った竜がキョロキョロと周りを見渡しているので、見つからない様にゆっくりと近づいていき…
うまくいけ！と願いながら揺れている尻尾の先端をむんずと掴んだ瞬間、竜が甲高い叫び声をあげて翼を広げる。
ビンゴ！と喜ぶ暇もなく、竜が急上昇を始めた。
竜が飛べるのなら上まで運んで貰えば良い。
そんな目論見はこの通り。竜の尻尾に引っ張られ、左右に揺れながら凄まじいスピードで縦穴を登っていく。

「ユウキ、捕まってろよ！」
　返事は無かったが、代わりに首に腕が回される。壁を照らす陽光がどんどんと明るくなっていき、あまりの眩しさに周囲が白く包まれた瞬間、俺たちは穴から飛び出していた。
　細めていた目を開くと、眼下に広がる５５層の全景。山や村、そして遠く離れた主街区までもが見え、朝日に照らされてキラキラと光り輝いている。
「イェーー!!」
「わぁーー!!」
　思わず歓声を上げると、ユウキからも同じタイミングで歓声が上がる。
　綺麗な景色に目を奪われたが、俺たちの目的は穴からの脱出。尻尾の揺れに注目し、俺たちの体が横に振れたタイミングで尻尾から手を離した。
　ユウキを横抱きに抱え直し、慣性のままクルクルと宙を舞う。
　腕の中にいるユウキの目は朝日を受けて輝き、口は喜びに開かれていた。そういえばここまで喜びを露わにしているユウキは片手で数えられる程しか見ていない気がする。
　もっとこんな表情が観れると良いな。
　そんな風に思っていると、地表が近づいてきた。
　最後に１回転し、両足を広げて着地。落下の勢いは勢いは止まらず、雪を掻き分けながら滑走していく。１０秒近く滑った後山頂の端でようやく止まり、抱えていたユウキを降ろす。
　２人揃って大穴の方を振り向くと、こちらを見失ったドラゴンが上空をゆっくりと旋回していた。
　倒そうかと思って剣に手をかけると、ユウキに服の裾を引っ張られる。
「倒す必要もないし、このまま帰ろ？」
　今まで存在しないドロップアイテムのために狩られまくった竜をこれ以上狩る必要もあるまい。
「そうだな…今まで散々狩られて迷惑だったろ。アイテムの取り方が

広まればお前を殺しにくる奴も居なくなるだろうし、これからはゆっくりと暮らせよ」
「そうだね…って出れたってリズベットに連絡しなきゃ！」
　ユウキがリズにメッセを送っている間竜を見守っていると、１度澄んだ声で鳴いて巣穴へと戻っていった。
「リズは今５５層主街区に居るって言ってたけど、集合はリズのお店でいいよね？」
「それで良いんじゃないか？」
「りょーかい。じゃあそう書いておくね」
　今日はなんだか楽をしても良い様な気持ちになった。ユウキがメッセを送りきったタイミングで声をかける。
「…クリスタルで飛んじゃう？」
「うん、早く安心させてあげたいしね」
　転移結晶を取り出して掲げる。
「「転移、リンダース」」
　２つの光が山頂で煌めき、そして雪山に静寂が訪れた。